ブルキーのケイティ、お尻を叩かれる
（そしてヘルハイのその他の物語）

ユー・メイ および ドクター・クリーゲ著

著作権表示

序文

この短編集は、私がドクター・クリーゲのオリジナル『ヘルハイ』コミックの一つ、ブルキーのケイティというキャラクターが登場する作品のために書いたファンフィクションから始まりました。この愛すべき悪役キャラクターの何かに私が惹かれ、そのキャラクターの物語について私なりの解釈をもっと詳しく語りたいと切望しました。やがて私たちは、ブラットのベッキーなど、この架空の世界内の他のキャラクターやシーンを用いた物語を共に創作するようになり、ドクター・クリーゲの祝福も得て、ヘルハイの世界を舞台にした最初の「公式」短編集を世に送り出せることを嬉しく思います。ドクター・クリーゲは、この短編集に収録されたすべての物語に対して創造的な助言を提供し、そのうちのいくつかは直接共著者として関わっています。関連してはいますが、これらの独立した短編小説はそれぞれ別個に構想されたため、ここではオリジナルのタイトルと章のサブタイトルをそのまま掲載しています。

本書執筆時点では、この架空の世界のインスピレーションとなったドクター・クリーゲのオリジナルコミックやアートは、deviantART上の彼の個人オンラインギャラリーでご覧いただけます：https://www.deviantart.com/drkriege

内容に関する注意：これらの物語には、体罰、いじめ、屈辱、強制的な裸体、不快な言葉の使用、および一部に簡単なおむつの描写が顕著に含まれています。これらの物語における登場人物の行動や表現はいかなるものも、著者による是認と見なされるべきではありません。この作品は成人向けであり、子供には不適切な内容が含まれています。

この物語を書いている間、私がヘルハイの世界を訪れるのを楽しんだのと同じくらい、読者の皆さんも楽しんでいただけることを願っています。というわけで、ほほえみを浮かべて（皮肉を込めて）、あなたがたを先へ進むよう誘います。さもなければ、ですが。

スパンクス・フォー・リーディング！

—ユー・メイ

ブルキーのケイティ、お尻を叩かれる

パート1：掟を定める

ブルキーのケイティことケイティ・ボルカーが中等学校を卒業して以来、両親は彼女をどうしたらいいか分からずにいた。アイビー・リーグの大学から声がかかるとは思っていなかったが（彼女の成績平均点ではね）、せめて二流の大学のどれかには合格してほしいと願っていた。しかし、次から次へと不合格通知を受け取るたびに、パパとママは不安になっていった。ケイティの方としては、「ゲーマーガールのライブストリーマー」として大金を稼ぐつもりだと繰り返し主張していたが、それが具体的に何を意味するのかはよく分からなかった。ボルカー夫妻は決してケイティの趣味を妨げようとはしなかったが、それがどうやって家計を支えることになるのか確信が持てなかった。そして、夜中に何度もビデオゲームの爆発音や機関銃の銃声、それに身体の様々な部位を指す下品な言葉やその他の多彩な冒涜的な罵り声で起こされるのは、次第に少しばかりストレスになりつつあった。

二階のケイティの部屋から、パパとママは娘がお気に入りの四文字言葉を大声で叫び散らすくぐもった声を聞き取ることができた。パパは新聞の後ろに顔を隠した。ママは自分に言い聞かせるようにハミングしながら、盆栽をウサギの形に剪定していた。

ブルキーのケイティは、最後の対戦相手をなぎ倒しながら悪態をついた。「思い知れ、クソ野郎ども！ これで試合終了だ！ またまた勝利！ ドミママにひれ伏せ！」

彼女はゆうに七フィートはあり、肩幅は広く、骨太でハンサムな角張った顎を持っていた。ローマ風の鼻の左の鼻孔には一つのピアスを付けており、勝利の音楽が流れる中、広い肩と引き締まった上腕二頭筋を誇らしげに動かした。特に女性的というわけではなく、もちろんナショナル・ギャラリーに飾られるような古典的な美人というタイプではなかったが、そのがっしりとした塊のような体格には魅力がないわけでもなかった。黒い髪はきつくお団子にまとめていたが、乱れた前髪はいつも片方の目にかかっていた。彼女はフッと息を吹きかけて前髪を払い、ライブストリームのコメントを読んだ。

「今日も同時接続が約900人のブルカーか！ それじゃ足りないぞ、負け犬ども！ ゲーマー・ガールのバブルバス・アクションが見たいなら、あたしが太ももで頭蓋骨を潰すように、チャンネル登録ボタンを押しつぶして、目標の登録者1000人『我らは軍団』ストレッチゴールを達成しろ！」

ケイティはストリーミングソフトウェアのカメラコントロールをクリックして、新しいカメラアングルを披露した。それは彼女のバスタブの眺めで、ケイティの入浴タイムが見られるというグラフィックと、「ドミママ・ゲーマーガールのバスタブの湯」を事前予約するオプションが表示されていた。

定期的にケイティを視聴する900人の「ブルカー」たちは、数で劣る分を情熱で補っていた。実際、ブルキーのケイティが彼らを貶めれば貶めるほど、彼らはもっと欲しがった！ ケイティは自分のセットアップに非常に誇りを持っていた。両親

のクレジットカードを使って、複数のHDカメラを購入し、自分の顔とゲーマー機材の両方を撮影できるようにしていた。さらに、複数のサイトに同時配信する方法も学んでいた。TwitchやYouTubeの検閲官の怒りを買うようなことは絶対にしないように細心の注意を払っていた。しかし、ここでちょっとした脇の下や横乳を見せ、あそこでは筋肉質な尻の割れ目を一瞬見せることで、ケイティはインターネット上のニッチな小有名人になることに成功していた！

彼女の習慣として、ケイティはカメラの前でモンスターエナジードリンクを一気飲みし、一晩中のストリームを締めくくると、自分の分析データをチェックした。「もしかして、別のカメラアングルが必要かも？ そうだ！ 低いアングルにして、あたしが彼らの哀れな顔を踏みつけてるように見せられるやつ！」と彼女は考えた。無駄にしている時間はなかった！

どしんどしんと階下に降りていったケイティは、伝統的なイギリス式朝食の陰に縮こまっている両親を見つけ、何も言わずにママの財布を漁り始めた。パパは新聞をひったくるように掴み、ママはテーブルを掴んで椅子から転げ落ちるのを必死に防いだ。「おお！ ケイティ！ ライブストリームはどうだった？」

「最高だったよ！ バッチリだ！ でも、もっと… えっと、ポテチと炭酸飲料がいるんだ！」

ママの目が見開かれた。「もちろん！ 私のクレジットカードを使っていいわよ… でも、それだけを買うの？ 大きな買い物はもうしないで… お願い？」彼女はパパに助言を求めて視線を向けたが、パパは『タイムズ』紙を手に震えているだけだった。

ケイティは上の空でうなずきながら、財布の中身を全部ひっくり返してクレジットカードを奪い取った。「はいはい、どうでもいいよ！ 必要なものだけ買うから。ちぇっ！ そんなに詰め寄られなくてもいいんだから！」

ケイティがドアをバタンと閉めた後、パパはほっと息をついた。「クレジットカードの請求書について、彼女とちゃんと話し合う必要があるな。もっと優しい子育ての方法を試してみるべきかな？」

ママはこの提案を考えた。「うーん、理屈で説得しようとしたし… 家計のやりくりを見せようとしたし… 他にどんな選択肢があるの？」

パパは眼鏡を直した。「彼女に、自分の行動が他人にどう感じさせるか尋ねてみるのは？」

中等学校にいた頃、ブルキーのケイティは他の生徒にウェジー、スワーリー、ヌギー、ウェットウィリー、パープルナプルを決めるのが習慣だった。何度も校長室に呼び出され、自分の行動が他人にどう感じさせるかを尋ねられたものだ。ある時には、彼女は校長に自分のテクニックをすべて一度に実演してみせた。それ以来、ケイティが再び校長室に呼ばれることはなかったので、両親はその手法が素晴らしい効果を発揮したと結論づけた！

音楽のようなチリンチリンという音とともに、ベルが鳴り、郵便物が届いた。請求書や広告の山の中から、ママは一通の正式な手紙を見つけた。「合格通知？ ヘブンハイから？」

パパは金箔の飾られた封筒をじっと見つめた。蝋で封がされ、真珠の門と雲の紋章が押されていた。「うーん？ 中等学校か？」

ママは封筒を開け、夢中になって中身をめくり始めた。「違うわ！ 大学よ！ それに、ケイティが合格したって書いてある！」

パパは、ケイティに代わって願書やカバーレターを書いた様々な機関の名前を記憶から必死に辿った。「ヘブンハイの願書を出した覚えはないんだが…」

「ここには、志願者なら誰でも受け入れるって書いてあるし、学生の成績に関する統計を見てよ！ ヘブンハイの学生なら誰でもオックスフォードの教授に勝てるって書いてあるわ！」

「何かの詐欺に違いない。そんなうまい話はない。それに、もしそんなに優秀なら… ケイティの学業成績で奨学金が取れるわけがないだろう！」

しかしママが二つ目の小さな封筒を開け、ヘブンハイの校長がサインした全額奨学金の書類を見つけると、パパのあごは外れかけた。

ケイティは欲張って新品のHDカメラの箱を引き裂いた。「完璧だ！ これで考えられるすべてのアングルをカバーできる！」

中等学校の頃、様々なオタクやキモオタ、ダサい奴らを懲らしめることが彼女に人生の目的を与えていた。卒業後は、そこから人生は下り坂だと思っていた。しかし今、彼女は自分の天職を見つけた。それは、インターネット上の孤独な人々をいじめて、その特権のために喜んで金を払ってもらうことだった！

ケイティは玄関のドアを勢いよく開け、次のライブストリームの前に新しいカメラをセットアップしてテストする準備をしていた。だがその前に、エネルギー補給が必要だった！「朝ごはんはどこ？」

ママは、残り物を後で取っておくためにタッパーにすくっている最中で固まった。「ああ、ちょうどいいところに！ 冷蔵庫に入れようと思ってたところよ——」

「うっ！ なんで片付けるのよ？ 冷めた朝ごはんなんて大嫌い！」ケイティの巨大な手は、ママの手から簡単にタッパーを奪い取った。ケイティはぬるくなった朝ごはんを掻き込みながらぶつぶつと文句を言った。「あたしは一晩中一生懸命働いてるんだぞ。頼むから、熱々の朝ごはんを食べさせてくれってだけだ。そんなに無理なことか？」

「ごめんなさいね、朝ごはんが熱くなかったなんて。あなたの気持ちは正しいわ、ケイティ」ママは、試行錯誤してきた子育てテクニックの一つを試しながら、甘やかすように言った。

パパはHDカメラを見て目を見開いた。「ケイティ、お嬢ちゃん、またカメラかい？ まだ最初の三つの支払いが滞ってるんだが…」

ケイティは死を見つめるような視線でパパを黙らせた。「あんたがいつも、家計をきちんとすることが大事だって言ってるんだろう！ もっと手本を見せるべきなんじゃないの？」

「… そうだな、お嬢ちゃん」とパパは言い、良い知らせを思い出した。「ケイティ！ ヘブンハイから合格通知が来たぞ！ 全額奨学金付きだ！ 見てみろ！」

ケイティの頬は膨らみ、残りの朝ごはんを掻き込んだ。様々な資料を調べた後、彼女は大笑いし、豆と卵を飛び散らせた。「これ、冗談か？ ここの使命は『地上に平和を、人々に善意を』だって？ ダサい！ それに、ここはまだ体罰を使うんだってさ。信じられるか？ あたしはお尻を叩かれるのはごめんだ、ありがとうな！」

ママとパパは顔を見合わせた。パパが言葉を失っているのを見て、ママが口を挟んだ。「まあ、あなたのパパと私は体罰は野蛮で逆効果だと思っているけど、あなたは大人だから、とにかく考えてみてもいいと思ったのよ… だって、最初にあなたに手紙をくれた学校なんだから！」

ケイティは朝ごはんを一気に飲み込み、げっぷをした。「こんなダサいローブを着てる連中を見てよ。何て losers の集まりなんだ！」

パパは突然ひらめいた。「そうだな、私が寄宿学校にいた頃は、新入生とちょっとした無害ないたずらをしたものだ。当時は『ファギング』と呼ばれていた。君もあそこの学生たちとちょっとした… 無害ないたずらをしてみたら？」

ケイティはこれを考えた。昔ながらの強烈なアトミック・ウェジーを再び決めるという考えはなかなか魅力的だった。しかし、パンフレットに載っている幸せそうで笑顔の顔ぶれを見て、彼女は吐き気を覚えた。手首をひねって、手紙をフリスビーのようにゴミ箱にまっすぐ投げ入れ、両方の中指を立てた。「あたしは地獄に行ってやる！」

その瞬間、近くの教会の鐘が鳴り始めた。ケイティはあくびをして、汚れた食器を放り投げ、階段へと向かった。「さて

と、次のライブストリームの準備をしなきゃ。忘れんなよ、仕事中は静かにしろ！」

他に何をしていいか分からず、パパは新聞の後ろに隠れ、ママはテーブルからケイティの食器を片付け始めた。しかし、郵便物を脇にどけようとしたとき、分厚い血のように赤い封筒が彼女の目に留まった。封筒の表には、真っ黒なブロック文字で「地獄へ行け！」と印刷されていた。

「なんて目を引くデザインなのかしら。とても前衛的ね」ママは言いながら封筒を開けた。そして、きゃあと悲鳴を上げた。「パパ！ ケイティが別の大学に合格したわ！ 全額奨学金付きよ！」

「ドシーボーイズ・ホールじゃないだろうな？」

「いいえ！ それよりすごいわ！ ヘルハイよ！」

パンフレットの上部には、「天で仕えるより地獄で統治せよ」という言葉が炎で綴られ、その上には、学士帽をかぶり、スポーツカーに乗って機関銃を撃つ、肌を露出した男女の見事なイラストが描かれていた。背景では、ゴシック様式の大聖堂が炎上していた。

パパはため息をついた。「またこんな詐欺か。おそらく未公認だろう…」

ママは首を振った。「いいえ！ 見て！ 歴史上の最も賢明な男女の何人かが地獄に行ったのよ！ それに、どうやら懲戒プログラムはサド侯爵自身が設計したらしいわ！」

パパは鼻を鳴らしながらページをめくり、学校で使われる様々な体罰用器具の詳細な説明に衝撃を受けた。中には中世の拷問器具のように見えるものもあった。「フランス人

か？ どうもなあ、ママ。あのもう一方の学校も伝統的な体罰を好んでいたが、ケイティはそれに断固反対していたようだぞ。」

ママはヘルハイの使命を説明する小冊子を指さした。「でも、それが肝心なのよ！ まったく伝統的なプログラムじゃないの。とても実験的で先進的。ほら、ここに『ヘルハイにはルールはない*』って書いてあるわ。」

「じゃあ、そのアスタリスクは何だ？」

ママはパンフレットの裏に回り、細かい字でびっしりと書かれた数ページの法的通知を見つけた。老眼鏡をかけ、目を凝らして何とかその一部を読み取った。「ええと、最初のアスタリスクには『唯一のルールは「汝の望むことを為せ」である』って書いてあるわ。どうやらヘルハイでは『悪いことをした』から罰せられるわけじゃないみたい。実際、各学生は他の学生をできるだけからかい、罰することが奨励されているの。あなたが寄宿学校で言っていたことと似ているわね。ちょっとした無害なファギングよ！ ケイティが昔、精神科に行くことになったあの新入生たちにしてやったことと同じじゃない！」

パパは首を振った。「ケイティはどうやら自分の… ゲームのキャリアに専念しているようだ。興味を持つかどうかは分からないな。」

「じゃあ、どうして彼女が入学承諾書にサインしたのかしら？」

「何を言ってるんだ？ そんなはずはない。これは今朝の郵便で届いたばかりだぞ！」

しかし確かに、手紙の下部には、血のように赤いインクで走り書きされたサインがあった。「ケイティ・『ブルキー』・ボルカー」。その横には、ケイティの特徴的な下手くそな字で日付が印刷されていた。

パパとママはその朝の残りの時間を、ヘルハイからの資料を丹念に調べるのに費やした。驚いたことに、体罰に関する大部の小冊子に載っているイラストのほとんどに描かれている、がっしりした若い女性は、ケイティに驚くほど似ていた。

ケイティが最新のカメラのセットアップを終えると、それは彼女の大きな大きな足と、力強いアマゾネス然とした体型を美しく強調していた。彼女はストリーミングソフトウェアをテストし、次のライブストリームを予約した：「これが勝者の姿だ！！！ [#KatieTheBulky]」。それから、バスルームに設置したカメラのアングルを再確認した。ケイティに言わせれば、YouTubeやTwitchのわいせつコンテンツに関するルールは馬鹿げた純粋主義だったが、彼女は回避策を用意していた。メインのライブストリームでは、ヌードを注意深く隠しながら、からかうようにバスタブに足を踏み入れるつもりだった。低いアングルのカメラは彼女の肩と少しの胸の谷間を映すだろうが、主要プラットフォームからのBANは回避できると確信していた。その後、彼女は自分の大ファンたちに、コンテンツモデレーションがより緩い別のストリーミングプラットフォームで、第二の、よりスパイシーなカメラアングルをフォローするよう促すつもりだった。

両親が何か学校のことで盛り上がって話しているのを聞き、彼女は嘲った。「たぶんまた別のダサい宗教学校だろ！」

長い夜のゲームの後、ケイティは昨日の汗まみれの汚れた服を着替えもせずに仮眠をとった。彼女は中等学校での日々の甘い夢を見た。ケイティは同級生の名前を覚えようとしたことはなかったが、彼らに対する愛情を込めたあだ名はすべて覚えていた。「ドラ息子2号」、「オタク8号」、そして忘れてはならない「ドーファス13号」などだ。

ケイティは眠りながら微笑み、ディベートクラブの前でドーファス13号の裸のお尻を叩き、その後クラブの他のメンバーに整列して順番を待つよう命じた時のことを思い出していた。学校の応援集会でケイティがディベートクラブに野次を飛ばし、永遠に彼らを「マスターデベーターズ」とあだ名した後、校長はケイティに一学期間ディベートクラブに参加するよう提案した。ディベートの価値を学ばせるためだ！

そして案の定、ケイティはディベートクラブを愛した！ 初日、彼女はクラブを正式に「マスターデベーターズ」と改名するよう提案した。オタクたちは反対したが、ケイティがその全員をスパンキングした後、その提案は満場一致で可決された。ケイティはディベートに勝ったのだ！

ケイティの夢の中で、彼女はドーファス13号のにきび面で、四つ目で、矯正器具をつけた顔が、ブルキーのケイティにひざまずいて二度目のスパンキングを免れるよう懇願するのを思い出して喜んだ。「名前変更に反対するなんて、その前に考えるべきだったな！」ケイティは大笑いし、そのオタクを乱暴に自分の膝の上に引きずり寄せ、スカートを引き裂いた。そこには、まさに叩かれるのを待っているかのようなやせ細った小さなお尻が現れた。ケイティの命令で、ディベートクラブの残りのメンバーは全員スマホを取り出し、その「ディベート」を写真やビデオに撮り、後日ディベートクラブのSNSアカウントで共有されるようにした。

「なあ、数学クラブのあのオタクの名前は何だっけ？ ドーファス13号がすごく好きなやつ。ああ、どうでもいいや、とりあえずナード23号と呼ぼう。あいつはお前の最近の『ディベートパフォーマンス』に興味があると思うぞ。」

「やめて！ 彼に見せないで！ こんな姿、見られたくない！」ドーファス13号は泣き言を言ったが、ケイティはドーファス13号のスポンジ・ボブ・スクエアパンツ柄のパンティーのウエストバンドを引っ張り上げてきついウェジーを作り、さらに勢いを増してスパンキングを続けた。普段、ドーファス13号は控えめな女子高生の制服に太ももまでのソックスを履いていた。その夜、ドーファス13号は太ももまでのソックスだけを身につけて家まで走って帰ることを強いられた。

その結果、ケイティは修復的司法のセッションに丸一日を費やし、ドーファス13号と同じ部屋に座って、スクールカウンセラーとお互いの気持ちを話し合わなければならなかった。翌日、ドーファス13号が男子ロッカールームでパンティーに吊るされ、青みがかった紫色のあざだらけのお尻を晒し、首には「密告者をスパンキング！」と書かれた紙の札をぶら下げている動画がSNSに出回った。その後、ディベートクラブでブルキーのケイティに文句を言う者はいなくなったので、校長は修復的司法のセッションが見事に効果を発揮したと結論づけた！

眠っている間、ケイティはその年にドーファス13号をスパンキングしたすべての場面を思い出しながら唇を舐めた。ケイティの学校のオタクたちの中でただ一人、ドーファス13号は二つ目の、もっとかっこいいあだ名を与えられる栄誉を手にした。「リル・ミス・スパンキー・パンツ」だ！

しかし、この夢はどこか違っていた。いつもの場面（オタクたちのパンツを下ろして写真を撮る、オタクたちをパンツで旗竿に吊るす、オタクたちにパンツを食べさせる、など）に加えて、ブルキーのケイティは自分が教授になったことに気づいた。黒いローブを着て、彼女は自分のオフィスで学生たちにパドリング、ストラッピング、ケインを執行していた。オフィスの外では、泣き叫ぶ少年少女たちの列が順番を待ち、それぞれがブルキー教授のオフィスから、裸で燃え上がり、水ぶくれだらけで、痣だらけの真っ黒なお尻を晒して、泣き喚きながら出てくるのを見守っていた！

美しい夢は延々と続き、ケイティが目を覚ますと、彼女はあくびをして伸びをした。これまでにないほど爽快な仮眠だった！ いつかストリーミングで大富豪になったら、大学を買って、自分を校長に任命し、その夢を現実にするべきだ！

ケイティはベッドから転がり出て、時計を確認した。「ああ、くそ！ 寝坊した！」予定のライブストリームまであと数分しかなく、ケイティは急いでゲームを起動し、イヤーピース、マイク、ソフトウェアを最終チェックした。匿名の視聴者がすでにコメントを残していた：「さあブルクスター、ショーを見せてくれよ！」

「くたばれ！」ケイティはタイプした。これは彼女の忠実なファンに対する伝統的な丁寧な挨拶だ。「準備ができたらショーを見せてやるよ。」

彼女はグラフィックをクリックして、同時接続視聴者数1000人達成の報酬「ゲーマーガール・バブルバス」を宣伝した。ストリーム開始予定からもう一分以上遅れていることに気づき、ケイティはすぐにライブ配信を開始しようと考えたが、さらに熱心なコメントが殺到するのを見て、悪魔のような考え

が浮かんだ。「待たせろ！ 期待感を高めるのに勝るものはない！」

楽しみのために、ストリームの開始時間を尋ねる各コメントに、それぞれ異なる失礼な返答をした。彼女が最も忠実なサポーターの一人に、美味しく屈辱的な嫌味をタイピングし終えたとき、ブルキーのケイティはドアをトントン叩く音を聞いた。

ママの優しい声がドアの後ろから聞こえた。「ケイティ、あなたに良い知らせがあるのよ！」

ケイティはマウスの上に指を置き、両親がしつこくしてくるのをやめ次第クリックしてライブ配信を開始する準備をしていた。ドアの方を向いたとき、ケイティの太い指が意図したより少し強くマウスを押した。彼女が顔をそらして叫んでいる間に、画面に「ライブ配信中です！」という文字が静かにポップアップした。「言っただろ、ライブ配信中は静かにしろって！」

パパが口を挟んだ。「これはとても大事なことなんだ、お嬢ちゃん。君の新しい学校について話す必要がある。この夏やることがいくつかあるんだ！」

ケイティは唸った。「またかよ！ あたしはフルタイムのコンテンツクリエイターになるんだって言っただろ！ だから、あっち行け！」

ケイティは画面に戻ろうとしたが、自分のストリームがライブ配信になっているという通知を見逃した。代わりに、一つのコメントが目に留まった。「あなたのご両親はそこにいるの？」

変な質問だ、とケイティは思った。しかし、素早く返信をタイプした。「ああ、いるよ。うるさくしつこくしてるんだ。今からくたばれって言って、ライブ配信を始めるよ。」

外では、パパが咳払いをし、気持ちを奮い立たせているようだった。「ケイティ、君のライブストリームを一時停止して、私たちと話をしてくれないか。君が気に入った学校を見つけてくれて本当に嬉しいんだが、そこで君が成功できるように、新しい家のルールについて話し合う必要があるんだ…」

ケイティは目を細め、椅子でくるりと回った。彼女はそのコメンテーターの返信を見逃した:「彼らの声が聞こえる！ すごくいい人たちみたい！」

「まだあの気の抜けたヘブンハイの話をしてるのか？ あたしは地獄に行くって言っただろ！」

「分かってるわ！」ママが明るく答えた。

ケイティはため息をついた。「もういいや… 入って来いよ、たぶん！」

ママとパパは部屋に入り、空のポテチの袋や飲みかけのエナジードリンクの缶を踏み越えた。ケイティは立ち上がろうともしなかったが、座っていても両親と目線は同じ高さだった。ママは片手に重いダッフルバッグを、もう一方の手に真っ赤な封筒を持っていた。パパは散らかりようを見渡し、咳払いをした。「ケイティ、まずは君が希望する学校に全額奨学金で合格したことを祝福したい！」

女の子らしい興奮を抑えきれずに、ママは赤い封筒から正式な書類を取り出して掲げた。「私たちはあなたをとても誇りに思ってるわ！」

ケイティは瞬きをし、それから手紙を調べた。「え？ あたし、どこかに合格したの？ そんなの予想外だったよ。」

彼女はページの下部にある自分のサインを注意深く見つめた。「変だな、これにサインした覚えがないぞ。忘れたのかもな。」

パパは握手をしようと手を差し出したが、ケイティはそれを無視して学校のパンフレットをめくり始めた。彼女の喜びに、容赦ないイジメの画像が次々と目に飛び込んできた。「へえ、この学校はなかなかイカしてるみたいだな。まあいいや！ やってみるよ！ とにかく、ライブストリームを始めなきゃいけないから、部屋から出て行け。」

パパはついに諦めて手を下ろした。「それなんだけど、しばらくビデオゲームを休んでもらう必要があるんだ。新しい学校で良いスタートを切ってほしいから、ここではいくつかの…ライフスタイルの変更が必要になる。カリキュラムの厳しさに備えてほしいんだ。」

ケイティはうめき声をあげ、ゲーマーチェアに寄りかかって回転した。彼女はコメント欄にいくつかの新しい質問がポップアップしているのをちらりと見て、それらを読まずに「待ってろ！」と素早くタイプした。それからケイティは振り返って、予定を妨害するこの厄介な割り込みを片付けようとした。「わかったよ。夏休みの宿題をやらなきゃいけないのか？ 夏は丸々あるだろ！ 授業が始まる数週間前にやるよ！」

「どちらかというと、心構えの問題なんだ。君が小さい頃から、ママと私は優しい子育てを好んできた。しかし、君がケインを使用する学校に通い始めるのだから、これからはもっと… 規律と構造を提供する必要があると思うんだ。」

ケインという言葉が出たとき、ケイティはパンフレットをより詳しく調べた。「ここには堅苦しい伝統的なルールはないって書いてあるぞ。あそこでは好きなことをしていいんだ。」

ママに促されて、パパは自分の主張を押し通した。「ああ、そうだ。しかし、どうやら学生とスタッフは体罰を一種の… コミュニティビルディングのエクササイズとして使っているようだ。パドリング、イジメ、耐久テスト、そういったものだ。我々は君がそのような扱いに直面する準備ができているか確認したいのだ。」

ケイティはあくびをした。「あんなダサい連中が投げかけてくるものなら何でも対応できるよ。」

「ああ、そうだが、我々はまた、我々のために君にもっと自制心を持つように促したいのだ。ケイティ・ボルカー、我々は今まで君をスパンキングしたことは一度もないが、君の母さんと私は君をスパンキングし始めることに決めた。」

ケイティは嘲るように笑った。「… は？ 冗談だろ？」

ママは輝くような笑顔で首を振った。「今日はあなたの人生の新しい章の始まりよ。より多くの責任と説明責任があるの。夏の終わりまでには、あなたをしっかりさせて、大学に行く準備をさせるつもりよ！」

からかうように、ケイティはぷっくりしたお尻を持ち上げ、自分の尻を数回叩いた。「つまり、あんたらはあたしをスパンキングして、学校で『ケインを食らう』のに十分なタフさを身につけさせようってわけか？ ちっ！ そんなのあんたらの助けなんかなくても自分でできるよ！」

パパはママにうなずき、彼女はダッフルバッグから別の封筒を取り出した。「ケイティ、まずはこのクレジットカードの請求書について話したいんだ。君は我々の許可なくいくつかの買い物をし、我々が二度とクレジットカードを使うなと明確に頼んだ後にこのカメラを買った。」

ケイティは鼻を鳴らし、新しいカメラを足の親指で指した。「あの後、カメラを二台買ったんだぜ、一台じゃなくてな。だって必要だったんだ！ あたしは自分のやりたいことをやる！」

パパの唇が震えた。「そうか、ケイティ、君が我々に従わなかったから、今日君に最初のスパンキングを与えることにした。いい子なら、この面倒な事態はすぐに終わらせられる。しかし悪い子なら、新しい学校の懲戒プログラムで推奨されているより厳しい罰則を使う準備はできている。」

ついにブルキーのケイティは立ち上がり、両親を見下ろした。彼女は二人とも首根っこを掴んで放り出そうと考えたが、悪魔のような考えが浮かんだ。「いいぜ、やってみろ！ 思う存分やってみな！」

パパは安堵と不信が入り混じった表情で首を振った。「本当か？ 私の権威に従うのか？」

彼はケイティのベッドに向かってよろよろと歩き、床に散らばったゴミにほとんど躓きながら、彼女のマットレスの端に腰を下ろした。

ケイティは気軽に自分の尻の頬を掻いた。「ああ、そうだよ。あんたが決めたスパンキングなら何でも受けてやるよ！」

そして、彼女は自分の体をベッドに投げ出し、パパの膝の上に「ドスン」と重く着地した。

パパは息を詰まらせて顔を紫色にした。「おっと！ … よし。こうしなければならなくてすまない、ケイティ、だが君を叩くことにする。勇敢に、じっとしていなさい。すぐに終わるから！」

そう言って、ボルカー氏は片腕をケイティの分厚い筋肉質の背中に回し、もう一方の手を高く上げ、彼女のぴったりした薄いショーツの尻の部分に鋭く振り下ろした。

ケイティはその衝撃を感じ、肩を緊張させた。彼女の喜びに、自分の手のひらの痛みのために抗議の息を呑むパパの声が聞こえた。ケイティは心の中でほくそ笑んだ。彼女はこれを耐え抜き、パパがもう限界だと思ったら、何も言わずに立ち上がってゲームに戻ってやる。パパのような鈍感な奴でも、これが無意味な行為だと分かるだろう！

ママはケイティのゲーマーチェアに落ち着き、ダッフルバッグを膝の上に置いた。「さあ、頑張って、パパ。握手と同じよ。強い第一印象を与えなきゃ！」

ケイティは嘲ったが、鋭い一言を考える間もなく、イヤホンからかすかなブザー音が聞こえた。それは新しいチャンネル登録者が出たことを知らせる通知音だった。「いいね！」とケイティは思った。

パパの二度目の平手打ちが彼女を不意を突いた。「おっ！」とケイティは息を漏らした。イヤホンで二つの通知音が鳴った。「へえ、みんなこのライブストリームの開始をすごく待ち望んでるんだな」と彼女は考えた。

一方、インターネット上では、ブルキーのケイティのコメンテーターたちが、この最新のライブストリームが綿密なドッキリなのかどうかについて激しい議論を交わしていた。最も忠実なファンの何人かは、ケイティの他のライブストリームプラットフォームへのリンクを投稿し、ユーザー名「#1BulkerStan」は、念のためにケイティのすべてのストリームをスクリーンレコーディングしていると自慢し、こんなに素晴らしいストリームは見たことがないと語った！

ブルキーのケイティは自分の寝室に合計7台のHDカメラを設置しており、そのうち6台が現在アクティブで録画中だった。彼女の顔用カメラは、スパンキングが進むにつれてショートパンツを履いた彼女の後ろ姿も美しく映し出し、「足の写真を送って」カメラは彼女のベッドを低いアングルで捉えていた。ケイティは、テレビでコンソールゲームをするときや、単にエリートゲーマーチェアではなくベッドを使いたいときに主に使用するカメラをさらに2台持っていた。最も忠実な視聴者は、ケイティの両親がこれらのカメラを購入するのを手伝い、彼女が部屋のどこに座っていても常に視界に入るように、いくつかの芸術的なアングルまで提案していた。別のカメラは天井に設置され、部屋を見下ろす鳥瞰図を提供し（机に座っているときの彼女の胸の谷間も映し出した）、6台目は「太ももクラッシャー」とあだ名され、彼女がゲーマーチェアに座っていても、ベッドに座っていても、彼女の脚を映し出すように角度が調整されていた。通常、ケイティはストリーミングソフトウェアを使って好みのアングルを強調し、勝利を祝ったり寄付者に報いるために必要に応じて切り替えていた。10ドル以上寄付したチャンネル登録者は新しいカメラアングルを選ぶこともでき、時にはケイティの尻に焦点を当てることを好む者とケイティの胸に焦点を当てることを好

む者との間で入札戦争が勃発することもあった（そして今日からはケイティの足も！）。

7台目のカメラ（両親から明確に使うなと言われた後にケイティが購入したもの）は、彼女の枕元のテーブルに置かれ、ケイティが目標の同時視聴者数1000人を達成する瞬間を待っていた。彼女はすでにBluetooth接続を設定しており、目標に達した瞬間にカメラを作動させ、TwitchとYouTubeのストリームの新しいプライマリカメラにできるようにしていた。彼女の計画は、カメラを持ってバスルームに歩いて行き、最初の「ゲーマーガール・バブルバス」ストリーム（もちろん、それ専用の2台のカメラがあった）をからかうことだった。彼女はまた、見知らぬ人に絡んで脅すだけの笑えるドッキリ動画を見て、最後に「ただのドッキリだよ、兄弟！」と発表するものがあり、新しいハンディカメラで同様のコンテンツを撮影したくてたまらなかった。

各カメラは視聴者の寄付によって一部が支払われ、ストレッチゴール達成の報酬として、ケイティは両親のクレジットカードを使って自動クラウドバックアップサービスにも登録していた。すべてのカメラはクラウド上のバックアップフォルダに直接ストリーミングされ、ケイティ自身と… Patreonの数人のパトロンのみがアクセスできた。さらに、ケイティは複数のカメラアングルを複数のストリーミングサービスに同時配信し、プラットフォーム間でオーディエンスを増やそうとしていた。

忠実なファンの間では、ブルキーのケイティがゲーマー史上最も高価で綿密なセットアップの一人を持っていることは広く認められていた！

このようなことはすべて無視して、ボルカー氏は彼の巨大な娘の巨大な臀部に、手首の力のない平手打ちを続けた。

ゆっくりと、本当にゆっくりと、彼は平手打ちのテンポと強度を上げようと試みた。

そしてゆっくりと、本当にゆっくりと、世界中のインターネットユーザーがそれに気づき始めた。

初めての視聴者がライブストリームのチャットに参加し、ユーザー名は「リル・ミス・スパンキー・パンツ」だった。

「ブルキーのケイティ？ あなた？ 私よ、ドーファス13号！ 中等学校のこと覚えてる？」

数人のコメンテーターが新しい視聴者を歓迎し、彼女の奇妙なユーザー名と学校でのケイティとの時間について尋ねた。ドーファス13号はいくつかの答えをタイプしたが、ライブビデオフィードが目に留まった。「え？ これはどんなゲーム配信なの？」

ブルキーのケイティは、パパがさらに十数回の平手打ちを浴びせるのを感じて顔をしかめた。最初はただ退屈だろうという心配だけだったが、パパがこのスパンキングに心を込めていることは認めざるを得なかった。ケイティは顎を引き締め、声を漏らさないと決意した。

「もっと肩を使うようにして、パパ」とママが提案した。

パパは腕を高く上げようとし、平手打ちを決めた後、娘のお尻に波紋が走るのを見て満足した。「しかし、『手首がすべて』という言葉じゃなかったのか？」

ママはうなずいた。「そう言うこともあるけど、やっぱり肩も使うべきよ。それから最後に少し弾みをつけるために手首を使うの、クリケットのボールを投げるみたいに！」

ブルキーのケイティは、父親が次の平手打ちに肩と手首の両方を使うのを感じ、鼻歌を歌い、足を組んでこすり合わせた。彼女はもう少しだけ持ちこたえればよかった！

パパはケイティが足をこすり合わせているのに気づいた。どういうわけか、娘が自分の膝の上に横たわっている光景は、彼が子供の頃に読んでいたミニー・ザ・ミンクスの漫画を思い出させた。ケイティのように、ミニー・ザ・ミンクスもいつも何かいたずらをしていたが、漫画は通常、ミニーが親か先生の膝の上に乗せられてオチになることで終わっていた。

ケイティが2歳の時にスーパーでかんしゃくを起こし、それで彼との議論に勝って以来、彼は彼女をどう扱ったらいいのか分からなかった。今、人生で初めて、彼は「ケイティの父親」であることの意味を理解したような気がした。彼がもう一度腕全体を使って平手打ちを決めたとき、なぜ今までこれを試そうと思わなかったのか不思議に思った。

ケイティは拳を握ったり開いたりし、爪をめちゃくちゃで整えられていないベッドの毛布に突き立てた。努力すれば、歯を食いしばって最初のスパンキングを黙って耐え抜くことはできると確信していたが、ケイティは焦り始めていた。確かに、これを続けさせて、パパが意志の戦いに負けるのを見せるのは楽しいだろう。いつものように。しかし、ケイティはどうせ意志の戦いに勝つと確信していたので、今すぐ勝ってしまおうと決めた！

「おっ！ わかった！ もういい、言いたいことは分かった！」ケイティはシューッと息を吐きながら、力強くパパの膝の上から体を持ち上げ、彼が彼女を押さえつけようとしてうまくいかず、簡単に手首を挟んだ。最初にクールを装うという計画はもはや気にせず、ケイティは猛烈に熱くなったお尻を揉んだ。安心したことに、痛みはもう消え始めていた。スパンキングが少し痛かったと知られても誰が気にする？ 二度とやらせるつもりはないんだから！

一瞬、ボルカー氏は痛む手首を揉みながら、ブルキーのケイティの激しい睨みつけるような視線にひるんだ。彼はケイティが自分をスパンキングするのではないかと心配した！ しかしママは首を振った。「ケイティ、このスパンキングは終わっていないわ。あなたが気が向いたからといって立ち上がって終わりだと言えるものじゃない。パパがいい子にしなさいと言ったら、すぐに終わると言ったわね。でも今や、あなたの不従順のおかげで、もう一度スパンキングを受ける権利を得たようね！」

ケイティは目を回し、ゲーマーチェアに座り直そうとした。一度ゲームを始めれば、音量を上げてこの無意味な邪魔をかき消せるだろう。「ああ、どうぞ！ あたしをあなたの膝の上に置いてみなよ。あんたに… できるもんなら？」

机の上で、合格通知が彼女の目に入った。デスクトップモニターの光が、ページの下部にある血のように赤い署名を不気味に照らしているように見えた。「私はヘルハイの行動規範に従うことに同意します。—ケイティ・『ブルキー』・ボルカー。」

素早い動作で、ママはケイティのショーツのボタンとジッパーを外し、膝の辺りまでずり下ろし、ケイティを回転させて再び

パパの膝の方を向かせ、優しく押して娘を前に導いた。ケイティはショーツのグリップを失い、剃っていない脚の毛が逆立つのを感じた。まるで彼女には抵抗する力がないかのようだった！ 後ろを覗き込むと、ケイティは今日、幸運のゲーマーガール・パンティーの一つを履いていることに気づいた。緑と黄色のコットンのパンティーの前面には、「私がボスだ！」というカラフルなブロック文字が印刷されていた。スローガンの下には、スーパーマリオブラザーズで有名なゲームの悪役、キングクッパの絵が描かれており、ブルキーのケイティの子供の頃のアイドルの一人だった。

ブルキーのケイティは抗議しようとしたが、よろめいて前に倒れ、再びパパの膝の上に戻ってしまった。コットン生地は危険なほど伸び、ケイティの曲線的なお尻が父親の太ももの上にきつく曲げられた。「おい！ 何してるんだ？ 今日のスパンキングは終わりだ！」とケイティは愚かにも叫んだ。

激怒したケイティは、マットレスに手を押し付け、引き締まった上腕二頭筋を緊張させて体を持ち上げようとした… しかし、何かがおかしかった。まるでパパが気づかないうちに十人の男の力を持ったかのようだった。

ケイティはジッパーの音を聞き、振り返るとママがダッフルバッグを開け、赤い木製のヘアブラシを取り出すところだった。目新しさとして、裏面には白い文字で「冷静さを保ち、続行せよ」と印刷されていた。ママはそれをパパに手渡し、励ますようにうなずいた。「最初にうまくいかなくても、何度でも挑戦するのよ、パパ！」

「いや、いや、いや！！！」ケイティは吠えた。

「パシッ！ パシッ！！ パシッ！！！！」木製のヘアブラシが答えた。

「痛っ、痛っ、痛っ！！！」ケイティが答えた。

怒り狂って、ケイティはもがき、もがいたが、無駄だった。ケイティが頭の中でこの状況の馬鹿げた様子をまとめる前に、彼女の耳の中で怒ったブーンという音が大きくなっていくのを聞いた。それは彼女の尻の中で高まる怒りのブーンという音と一致していた。

「またチャンネル登録通知？ でも、一度にこんなにたくさん来たことはないぞ？」と考えたが、次の平手打ちが彼女のゲームキャリアから気をそらした。

「これでちゃんとした印象を与えられるだろうか？ 本当にかわいそうなケイティが気の毒だよ」とパパは考えながら、休むことなく娘をパドリングし続けた。

「ヘアブラシは確かに効いているようね。少なくとも、ケイティの反応から見てね。うまくいけばこれで十分で、ヘルハイの推奨懲戒措置リストにある高度なテクニックを使わなくて済むわ。ケイティ、いい子になる準備はできた？」

「くたばれ、二人とも！」ケイティは金切り声を上げ、意図せず声が甲高くなった。彼女は両方の中指を立てた。それは両親がうるさい時にいつも黙らせる方法だった。

「… ああ、なんてこった。本当にすまない、ケイティ」パパはおずおずと答え、ケイティの背中を軽く叩いて立ち上がらせた。

ケイティは、彼女のゲーマーガール・パンティーが、巨大でピリピリしたお尻の上で伸びて擦れるのを感じながら

シューッと息を吐いた。「何てこった？ あんたたち、本当に後悔するぞ、クソ野郎ども！」

ケイティが息を整えると、彼女の競争心あふれるゲーマーとしての本能が目覚めた。彼女の計画はうまくいった！ もちろん、両親が自分を手出しできないと分かっていたのだ。彼女は二人を合わせたより大きいのだ！ 復讐としてママとパパをスパンキングする準備をし、ケイティは袖をまくり上げ、権威的にベッドを指さした。彼女は二人に誰がボスかを思い知らせるまでやめるつもりはなかった。「よし、もうたくさんだ！ 今度はあんたたちの番だ、本当の尻叩きをくらわせてやる！ 二人とも服を脱いで、かがめ。あたしがあんたたち二人のホモ野郎を、真っ赤で生々しくなるまでスパンキングしてやる。さあ、ケツを突き出せ！」

しかしケイティがママに向き直ったとき、小柄な女性は片手で娘の顔を軽くつまみ、親指と指でケイティの頬をきつく挟んだ。「トゥトゥトゥ、ケイティ・ブルケ・ボルカー。その口の悪さは直さないとね！」

そう言って、ママはダッフルバッグから黄色い石鹸の固まりを取り出し、ケイティに見せびらかすように掲げた。何が来るか分かっているケイティは、唇をきつく結んだ。しかしケイティがママの掴みからいくら引き離そうとしても、まるで顔が万力にはまっているかのようだった。ママはため息をつき、掴みを放してケイティの鼻をきつくつまんだ。ケイティは息を止め、ママが優しく彼女の鼻を空に向けて持ち上げ、ケイティに頭を後ろに傾けさせるのに抵抗できなかった。ケイティは目尻で黄色い石鹸を見ることができ、顔が青くなっていくのを感じた。息をしようとケイティが息を吸い込むと、ママは石鹸を所定の位置に押し込み、ケイティの鼻から手を

離した。ケイティはほとんど石鹸の固まり全体を吸い込んでしまった！

目がしみて、ケイティは石鹸を吐き出そうとしたが、それはしっかりと舌に固定されていた。「何が起こってるんだ？ 吐き気がするのに、吐き出せない！」ケイティは考え、欲求不満の涙で視界がぼやけた。

すると、外で教会の鐘が鳴るのが聞こえた。振り返って見ると、ヘルハイからの手紙が机の上でそっと羽ばたいていた。窓はしっかり閉まっていて風もないのに。ページ下部の彼女の署名が、燃えるような内なる光で輝いているように見えた。

ようやく、ケイティは自分のデスクトップモニターに何が映っているのかを見た。何十ものコメントがライブストリームのフィードに表示されていた…

いや、何十どころか、何百ものコメントが、刻々と画面を駆け上がっていた！ 彼女の耳の中のブーンという音は、安定したリズムにまで大きくなり始めた。新しいチャンネル登録者が殺到していた！

そして、画面からは自分の間抜けな顔が見つめ返してきた。彼女はライブ配信していたのだ！

ケイティは自分の足が震え、ショーツが膝に絡まり、クッパのボクサーパンツがカメラの視野に完全に見えているのを見た。ケイティが母親に状況を説明しようと振り返ると、石鹸の泡が舌の上を伝い落ちるのを感じてむせた。

ママがケイティの肘を取ってベッドへ導く間、パパはベッドのケイティの左側に座るように位置を調整した。ママはかかと

で優雅にくるりと回り、彼女の巨人のような娘を簡単にベッドの上に曲げさせた。ケイティは左側にパパ、右側にママの間に挟まれた。

まるでブルキーのケイティはおもちゃの人形に過ぎず、ママはパパと人形のスパンキングをしてままごとをするつもりであるかのようだった。「んん一っ！ ふぃーかんっ！」ブルキーのケイティはどもった。両親はそれぞれ彼女の太ももの一つを自分の脚の間に挟み、ケイティを大きく開脚の姿勢に引き伸ばした。

彼らの膝がケイティの腰を持ち上げてきつい角度にしたとき、彼女は左肩越しに後ろを振り返り、テレビの上のカメラの赤いランプを見つけ、イヤホンでライブストリームの視聴者が寄付をしたことを知らせる通知を聞いた。頭を右にひねると、メインカメラがベッドのマットレスに焦点を合わせたカメラに切り替わり、彼女の「私がボスだ！」というパンティーが今や前面中央に映し出され、ショーを席巻していた！

ママは再びダッフルバッグに手を入れ、パパの革製のスリッパの片方を取り出した。「パパ？ ちょっと木のヘアブラシを貸してくれない？ あなたにはちょうどいい武器があるわ、輝く鎧の騎士様！」

パパはスリッパを受け取って顔をほころばせた。「素晴らしい提案だ。君なしじゃどうすればいいか分からないよ、我が最愛の人よ！」

ケイティは目尻で画面に何が起こっているかをちらりと見て緊張した。彼女はパパとママが腕を伸ばすのを見たが、インターネット接続による遅延のため、それでも彼らは彼女を不意を突くことに成功した。ケイティが画面上で彼らが道具を

高く掲げるのを確認するとすぐに、実際の平手打ちが現実に着地した！ 泡立った石鹸の泡がケイティの唇から飛び散り、彼女は泣き叫びながら顔の前の壁に飛び散った。

「パパ、あなたの娘の注意が向いているうちに、ヘルハイプログラムの次の段階を説明してちょうだい！」

「思い出させてくれてありがとう！ ケイティ、こんなことをしたくなかったんだが、ガイドラインには、通常の体罰が効果がないと判明した場合、ヘルハイ懲戒プログラムの高度なテクニックを直ちに実行すべきと明確に書かれている。君が地獄に行きたいと言うなら、ママと私は何があっても、できる限りのことをして君を助けるつもりだ！ 君を地獄のような目に合わせると約束する！」

怒りが爆発し、ケイティはまたFワードを叫ぼうとしたが、誤って石鹸の泡を飲み込んでしまった。「ふぁぁぁ... くっごっ！！！」

パパはまるで彼女が丁寧に新しいルールを説明してほしいと頼んだかのように答えた。「そうだな、ケイティ、まずは本に書かれている『毎月第一日に行う定期的なメンテナンススパンキング』から始めようと思う。ヘルハイによれば、それは家の中での自分の立場を思い出させ、我々の権威に服従するよう促すのに役立つはずだ。それで君を規律正しく保つのに十分だと思うか？」

ケイティはもがき、石鹸の固まりにもかかわらず、明らかに「違う、くたばれ！」と喘ぎ声を発した。

「おやおや。それなら、日曜日に週に一度、メンテナンススパンキングをしなければならないようだ。それで十分か？」

ケイティはマットレスに拳を叩きつけた。まるで二歳の頃、パパが欲しいものを何も買ってくれなかった時のように。その作戦はいつも効果を発揮してきた！ 石鹸の固まりを押しのけて、彼女は叫ぼうとした。「違う！ 殺してやる！」

パパは「違う」という言葉を聞き取り、失望してため息をついた。彼は一人娘がこれほど深く苦しんでいるのを見るのが嫌だったが、どうやら選択肢はないようだった。「よし。それなら、毎日、毎日、定期的なメンテナンススパンキングをしなければならないな。もし良い子なら、それがその日唯一のスパンキングになるだろう。しかし、悪い子のためのスパンキングも与えなければならない。これからは、不服従、無礼、不誠実はすべてスパンキングに等しい！」

ケイティの顔は真っ赤に燃え上がり、彼女は誇りの偽装をすべて忘れた。「うぅぅぅぅぅ、やめてえええっ！！！」彼女は壁に爪を立てて手がかりを探したが、見つからなかった。それから腰をひねって足がかりを探したが、見つからなかった。最後に、彼女は両親の背中に向かって無駄に腕を振り回し、足を蹴り上げて自分の尻を守ろうとしたが、膝のところで脚を押さえつけられていた。

パパとママはそれぞれ二度目の平手打ちを同時に決め、続けて三度目、四度目と続けた。「私がボスだ！」というボクサーパンツが上がり始め、ケイティはウェジーになり、輝くようなピンク色の尻の下側の曲線が露出した。十セットの平手打ちを完全に同期させて決めた後、パパとママは新しいリズムに入り、それぞれが安定したワンツーワンツーのパターンで交代した。それは彼らが初めて一緒に踊ったロマンチックなワルツを思い出させた！

二分間の着実なパドリングの後、ケイティは息を切らし、すすり泣く無残な姿に成り下がっていた。クッパの絵は完全に消え、ウェジーがますます高く上がるにつれてケイティの尻の割れ目に飲み込まれていた。彼女の尻のピンク色の跡は、「冷静さを保ち、続行せよ」のヘアブラシと同じ陽気な赤色に深まっていた。

ついにスパンキングが止み、ケイティは自分では起き上がれないほど弱り果てていることに気づいた。石鹸の刺激的な味が彼女の一万の味蕾すべてを襲い、彼女は濃い鼻水と石鹸の泡のよだれが顔の前面を垂れ落ちるのを感じた。

すると驚いたことに、彼女は二つの温かい手を感じた。

パパは彼女の肩を軽く叩いた。「よしよし、ケイティ、初めてのスパンキングは終わったぞ。」

ママは娘の背中の腰の辺りに円を描くように撫でた。「こんなことをしなきゃならなくてごめんね！」

必死に立ち上がりたかったが、ケイティは足がふらつくのを感じたが、パパは優しく彼女を起こして自分の膝の上に座らせた。彼女は彼より何フィートも高かったが、ケイティは奇妙にも、物を買ってもらえなかったことで彼を憎み始める前の、幼児の頃に彼の膝の上に座っていた幸せな記憶を思い出させられた。「ケイティ、我々は必要な時以外は決して君をスパンキングしたくないということを知っておいてほしい。ヘルハイでは、いつでも、どんな理由でも、今のようなスパンキングを期待できるだろう。しかしここでは、いい子にしている限り決して罰したりしない！ … まあ、毎日のメンテナンススパンキングは別として。」

言葉の意味は完全には理解できなかったが、ケイティは父親の声の温かさを感じた。彼女は… 安全で、愛されていると感じた！ 長い間、これほど強く感じたことはなかった。彼女は「いい子になります」と言おうとしたが、口の中にまだ石鹸の固まりがある状態で彼女が発することができたのは、「あ… び… ぐー！」だけだった。

ママはケイティの額に軽くキスをした。「いい子ね！ 今日はあなたにとって新しいスタートよ、ケイティ。私たちは過去のすべてを置き去りにするわ。私たちは今、過去にあなたを甘やかすことで、どちらもあなたを失望させてしまったことに気づいたの。私たちは二度と同じ過ちを繰り返さないわ。これからは、あなたを正しく育てていくつもりよ、ケイティ・ブルケ・ボルカー、最初からやり直して！」

ケイティは瞬きをした。「正しく育てる？ 最初からやり直す？」と考えた。

パパが彼女を軽く持ち上げると、ケイティはまるで赤ん坊のように、彼の腕の中に安全を感じたが、何かがおかしかった。これは意味をなさなかった。パパが彼女を持ち上げられるはずがない！ 彼女はもう赤ん坊ではないのだ！

そして、彼女はついにすべての点が一気につながった。吐き出せない石鹸… 両親の異常な力… 合格通知！ 顔を上げて、ブルキーのケイティは手紙に手を伸ばしたが、パパが彼女を寝室のドアの方へ運ぶにつれて、それが彼女の手の届かないところに移動するのを見た。

ページの上部の言葉は色あせ、新しい燃えるような文字がその場所を占めた：「来学期、ヘルハイで会おう！」

「お風呂の後は、お昼寝させてあげるからね」ママは優しく言った。

自分が見ているものに魅了されたリル・ミス・スパンキー・パンツ、別名ドーファス13号は、彼氏のナード23号を呼んだ。「ねえ、これ見て。ブルキーのケイティを覚えてる？」

「中等学校中ずっとお前を拷問してたあのサイコ野郎か？どうしたんだ？」

「彼女がライブ配信をしてて、切り忘れたみたい。そしたら今、両親が彼女をスパンキングしてるんだ。」

「自業自得だ。なんでそんなの見てるんだ？ あいつはお前にひどいことをしたんだぞ！」

ドーファス13号は自分の屈辱の記憶に顔を赤らめた。「ええ、でも、もし彼女があの動画をあなたに送ってくれなかったら… ディベートクラブであいつに負けたところの… あなたが私にデートを申し込んでほしいって知ってた？」

ナード23号は肩をすくめた。「あいつが動画を送ってくる数ヶ月前から、ずっとお前にデートを申し込みたいと思ってたんだ。それに、たぶんただのプロモーション用のドッキリだろ。ズボンの中に画用紙を詰め込んでるに違いない。」

「さあね、でもすごく本物に見えたよ。」

「じゃあ、彼女のことは忘れて、昼食に連れて行ってあげよう。ブルキーのケイティみたいな奴にクリックや視聴で報いるのは意味がないだろ！」

ドーファス13号は、自分をありのままに愛してくれる人を見つけられて幸せそうに微笑んだ。「うん、いいよ、連れて行って！」

しかしストリームを閉じる前に、ドーファス13号はブルキーのケイティが同時視聴者数1000人にどれだけ近づいているかを示すバーを見て、いじめの被害者を支援するプライベートFacebookグループを思い出した。メンバーの半数はブルキーのケイティの元被害者だった。誰かに見られていないかこっそりと確認した後、ドーファス13号はストリームへのリンクをコピーし、Facebookグループの投稿で共有した。

「トラウマ注意：ブルキーのケイティ。皆さん、ブルキーのケイティのおかげで学校でつらい思いをした人が多いのは分かってるけど、これには皆さん興味があると思って。どうやらケイティはついに心を入れ替えたみたいだよ！」

深い満足感のため息をついて、ドーファス13号は最後のコメントを書いた。「ねえ、ケイティ！ 中等学校で起きたすべてのことをもう許したって伝えたかったんだ！ ナード23号と私は今一緒にいるんだ、全部あなたのおかげだよ！ あなたの人生に何が待ち受けていようと、頑張ってね！」

ナード23号が自分の名前を呼ぶ声を聞いて、ドーファス13号はライブストリームのウィンドウを最小化し、夢の彼との夜に出かける準備をしに行った！

[パート1 終]

ブルキーのケイティ、お尻を叩かれる:

パート2:ゲーマーガールのバスタイム

「ピーン!」とケイティのライブストリームから通知音が鳴った。ケイティは、同時視聴者数1000人に達したときに、トランペットと子供たちの歓声のストック効果音を聞いた。新しいカメラアングルがライブストリームで映し出されているのが分かった。ゲーマーガール・バブルバスカメラが作動していたのだ!

「あの音は何だ?」とパパが尋ねた。

ママは戸惑いながらゲーミングセットアップを見つめ、何が何だか分からなかった。「ケイティのゲームボーイっていうやつじゃないかしら?」

パパの目が見開かれた。「おお! そう言えば、ケイティのゲームの権利は剥奪したんだった。新しいプログラムに彼女を導くまで、少なくとも数週間はかかるだろう。それまではスクリーンタイムはなしだ!」

パパが優しくケイティをママに手渡すと、ケイティはデスクトップに飛びついてライブストリームをシャットダウンしようとしたが、ママは彼女を腕に抱えて揺らし、まるでケイティがまだ赤ん坊であるかのように肩に寄り添わせた。ママは遊び心を込めてケイティの尻を軽く叩いた。「なんて騒がしい子! どうやらケイティはパパに自分のオモチャで遊んでほしくないみたいね。」

パパはうなずき、ライブストリームのウィンドウは閉じずに最小化した。彼はまだゲームのライブストリームが何なのか分

かっていなかったが、とにかく、ヘルハイの準備懲罰プログラムを終えるのを手伝った後でも、それはケイティのためにそこにあるだろうと考えた。「心配するな、ケイティ、君のビデオゲームには手を出さないよ。君が再びパソコンを使う準備ができるまで、このデスクトップにペアレンタルコントロールを設定するだけだ。」

ママはケイティの頬に軽くキスをし、それから鼻をしかめた。「それから、バブルバスの後には、お昼寝の準備をさせてあげるわ！ ふぅ！ あなたは臭い赤ちゃんだわ！ そうよ！ パパ、ケイティの古いベビーベッドを育児部屋に持ってきてくれない？ ガレージにあるはずよ。」

ケイティはむせび泣きながら、ママの掴みから逃れようともがいたが、ママが警告としてケイティの露出したお尻の頬に厳しく平手打ちを食らわせるのを感じた。「もう騒ぐのはおしまい！ お風呂で悪さをしたら、浴槽から引きずり出してスパンキングしてやるからね。その時は後悔するわよ！ びしょ濡れの小さなお尻を叩かれたら、めちゃくちゃ痛いんだから！」

しかしケイティは聞かなかった。ママがお風呂をため、遠慮なくケイティの服を脱がせ始めると、かつて誇り高きドミママ・ゲーマーガールのガールボスだった彼女は、むせ、どもり、吃りながらも無駄だった。二つの隠しカメラに気づかず、ママは入浴時間を先延ばしにしても無駄だと辛抱強く説明した。ブルキーのケイティは、巨大で力強い手で裸を隠そうとしたが、一箇所を隠すと、また別の隠し忘れた箇所を思い出すのだった。ヌードはYouTubeとTwitchから即座にBANされる可能性があった！ ママがパンティーを引き下ろすのを感じると、ケイティは好機を捉え、飛び上がってパンツから抜

け出し、洗面台のカウンターに向かって跳んだ。カメラに手が届けば、手動でシャットダウンできる！

「ああ、もうたくさんよ！」ママは唸り声をあげ、ケイティの腰を掴み、トイレに座って泣き叫ぶゲーマーガールを自分の膝の上に導いた。ケイティは激しく蹴り、トイレットペーパーホルダーを蹴り飛ばして空中に舞い上げた。トイレットペーパー自体は螺旋を描いて地面に戻り、ママの手のひらがケイティの左の尻の頬を叩く一瞬前に、ケイティの右の尻の頬に跳ね返った。ケイティは跳ね回り、新たな涙を流して泣き叫びながら、ママは十発の清々しい平手打ちを決めた。指を髪に食い込ませて、ケイティはまた長く辛いスパンキングに耐えようと身構えた。しかし幸いなことに、ママは一時停止した。「お風呂の時間にはいい子になるのか、それともバスブラシでスパンキングが必要か？」

長い柄のバスブラシを見上げると、ケイティは何千回も何も考えずに使ってきたそれを、突然新しい光の中で見た。今やそれは、邪悪で意地悪なスパンキング道具のように見えた。首を振りながら、ケイティは石鹸の固まりを通して泣きべそをかいて謝罪し、まるで祈る天使のようなケルビムのように手を合わせた。ママはうなずき、指を浴槽に入れてちょうどいい温度か確認した。「いい子ね！ さあ、浴槽に入って！楽しくできるように、ピンクの泡の入ったバスボールも用意したわ！」

ケイティは泡立った唾を吐き出し、必死に石鹸を吐き出して母親に状況を説明したいと思った。それからケイティは恐怖で固まった。バスルームにカメラを設置したことをママに認めたいとさえ思うだろうか？ それがまたスパンキングの対象になるとしたら？

両方のHDカメラが自分に向けられていることを知りながら、ケイティは立ち上がり、浴槽の方を向いて震えた。

どちらかのカメラが何かしらを捉えていないはずはなかった。ひらめきが閃いて、彼女は完全に露出すれば、YouTubeとTwitchにすぐにライブストリームをシャットダウンさせられるかもしれないと気づいた。しかしそれはプロゲーマーとしてのキャリアの終わりを意味した！ そしてそれがうまくいくかどうかも分からなかった！ たとえうまくいっても、検閲なしのプラットフォームへの同時配信には影響しなかった！

お風呂が終わってから手動でストリームをシャットダウンする方がいいのだろうか？ 忠実な視聴者はこれがすべて綿密なドッキリだったと信じてくれるだろうか？ 恐怖におののき、ケイティはどちらが悪いのか分からなかった。

ママは二度舌打ちをし、娘の真っ赤な尻の頬に素早く二回の愛情を込めた軽打を同調させて加えた。「トゥトゥ、ケイティ。浴槽に入るのよ。」

バスブラシを一瞥して、ケイティは決断した。今のところ、バスブラシでのスパンキングの見通しが、他のすべての心配事を彼女の頭から遠ざけていた。

慎重に、ブルキーのケイティは浴槽に登り、温かいお湯に身を沈めた。温度は完璧で、ママはすでにシュワシュワと泡立つピンクのバスボールを入れており、水を陽気なホットピンク色に染めていた。ママはローファーを使って優しくケイティの背中に温かいお湯をかけ、それから浴槽を調べた。「いい子ね！ さて、石鹸の固まりをどこに置いたかしら？ ああ、もちろん、私ったらバカね！」

ポンという音とともに、ママはケイティの口から石鹸を素早く取り除いた。吐き気を催しながら、ケイティは残った石鹸をできるだけ吐き出した。突然、彼女は再び話せることを思い出した。「カ、カメラが…！」

舌打ちをしながら、ママはケイティの髪にシャンプーを塗った。「チッチッ！ まだ許可なくあのオモチャを買ったことを後悔しているのかい？ 心配しないで、もうそれでスパンキングは済ませたからね！ さあ、目を閉じて、シャンプーが目に入らないように！」

しかしケイティの目は見開かれ、彼女は二つのカメラを指さした。一つは薬棚に巧妙に隠され、もう一つは頭上に直接シャワーヘッドの取り付け部分の上にあった。それからケイティは、両親がこれを許可していなかったことを思い出し、水に手を突っ込んで自分の尻を掴み、これがまたスパンキングに値する罪と見なされるのではないかと不安になった。「違う！ 消さなきゃ—— いや、あたしにやらせてくれ！ 自分で体を洗いたいんだ！ もう出て行け！」

しかしケイティが頭を後ろに反らすと、二滴のシャンプーが垂れて彼女の開いた目に入った。世界は暗闇と踊る光の中に消え、ケイティはあまりにも遅れてまぶたをぎゅっと閉じた。「うわああん！ しみる！」

素早く、ママはシャワーを出し、シャワーヘッドを下ろしてシャンプーを洗い流すのを手伝った。「あらあら！ かわいそうに！ 目を閉じなさいって警告したでしょう、そして今、その理由が分かったわね。でも心配しないで。ちゃんと洗い流してあげるから！」

頭を振り、涙をこらえながらケイティは水しぶきを上げ始め、イライラして水面を叩いた。もしケイティがクセルクセス1世だったなら、ついでにペルシャ軍にヘレスポント海の海面を鞭打つよう命じたことだろう。

ママは飛び散る水の奔流から身を守った。「ケイティ・ブルケ・ボルカー！ すぐにその水しぶきをやめなさい！」

「嫌だ！ やだもん！」ケイティは金切り声をあげ、津波のような水しぶきを上げげた。しかし痛む臀肉が浴槽の陶器の表面に押し付けられると、ケイティはきゃあと叫び、浴槽の縁をよじ登った。

「気をつけて、ケイティ！ 浴槽は滑るわよ！」ママが叫んだ。

「違う！ あたしの話を聞け！」ケイティは泣き喚きながら、母親の言うことを聞こうとしなかった。「出て行け！ あたしは——」ケイティは浴槽の底で足が滑り、前のめりに突進した。

ケイティにとって幸運なことに、ママは彼女が怪我をする前に腰を掴んだ。

ケイティにとってそれほど幸運でなかったのは、ママがケイティを浴槽の縁に曲げ、空いた左手でケイティのびしょ濡れの臀肉を叩き始めたことだ。「ケイティ・ブルケ・ボルカーお嬢さん！ この行動は許されません。首の骨を折るところだったわ。あなたが怪我をするなんて考えられない… だからもう一度スパンキングしなきゃね！」

プライマリカメラのおかげで、YouTubeとTwitchの視聴者はケイティの恐怖に引きつった顔と背中、そして高々と掲げら

れた彼女のお尻のてっぺんを完璧に見ることができた。忠実なPatreonサポーターの何人かは新しいタブを開き、ケイティの秘密の「スパイシーな」アカウントへのリンクを見つけ、そこではシャワーカメラが満月のショットを捉えていた。ママが確かな平手打ちを決めるたびに、水滴が絵画的に飛び散った。

ゲーマーとしての怒りが高まると、ブルキーのケイティは前回のスパンキングセッションで学んだすべてを忘れてしまった。「痛い！ ちょっと黙ってくれないか—— 痛っ！ ああ、くそっ！ … あたしの話を聞け、この—— うっ！ うおっ！ このバカな——」

ケイティが最後の卑語を言い終える前に、ママは石鹸の固まりを元の位置に押し戻した。「噛みしめるのよ、ケイティ。石鹸を落としたら、またスパンキングよ！」

ケイティは見えない力が石鹸を舌の上に押し付け始めるのを感じ、すぐに吐き出した。怒りでむせながら、ケイティは立ち上がり、泡立った水が彼女の引き締まった筋肉を伝って流れ落ちた。シックスパックの腹筋が輝き、ふくらはぎと太ももが光り、彼女の目は燃え上がり、たくましい手を母親に向けて伸ばした。「違う！ 今日スパンキングされるのはあんたの方だ！ 思い知らせてやる！ あんたのケツを真っ黒にしてやる！」

巨大な娘を見上げて、ママは微笑んだ。「ばかなことを言わないで、赤ちゃん。あなたは私をスパンキングできないわ！ 私はあなたのママよ！」

ケイティの手は凍りつき、ママの喉の一インチ手前で震えた。まるでママの言葉が魔法の呪文であるかのようだった。

「あ、あなたは… あたしをスパンキングできない！」ケイティは泣き言を言った。魔法の言葉を口にすれば現実になることを願って。

ママは首を振った。「もちろん私はあなたをスパンキングできるわ、ケイティ。だって私はあなたのママなんだから！ でもあなたと戦うつもりはないわ。必要ならためらわずにあなたを膝の上に引きずり上げるけど、私はあなたが聞いて従うことを期待しているの。特にバスタイムの間はね。さて、あなたに追加のスパンキーを与えなきゃいけないけど、いい子になると約束してくれたら、すぐに終わると約束するわ！」

意識的には、ケイティは何か地獄のような力が働いているに違いないと認識していた。彼女は従いたくなかった！ 自分の母親をスパンキングしたかったのだ！ しかし彼女はもう一度スパンキングされたくもなく、ケイティの望みはもはや重要ではなかった。

膝ががくがくと震え、ケイティの手は飛んで自分の尻を覆った。目はまだシャンプーでしみていたが、ブルキーのケイティは二つの芽生えた涙が下まぶたに重くぶら下がっているのを感じた。「お、お願い、スパンキーはやめて、ママ！」

ママは優しくケイティの巨大な手を掴み、前に引っ張り、慎重にケイティを元の位置に導いた。「でもあなたはスパンキングが必要なのよ、ケイティ・ブルケ・ボルカー。さあ、いい子になって、さっきみたいに浴槽の縁にお腹を乗せて寝転がって。お尻を上げて！」

ケイティは自分の体が従うのを感じた。心は逆らえと叫んでいるのに。二つの涙はついに重力に負けて彼女の頬を伝い落ちた。彼女の目はまだしみていた。

ママは試しにケイティの尻を数回軽く叩き、それから木製のバスブラシを手に取った。

ケイティはかすかな泣き声が唇から漏れるのを感じた。「いやあああ！ バスブラシだけは！」

「そうよ、ケイティ、バスブラシよ。でも心配しないで、まだすぐには使わないわ。最初のスパンキングが終わるまではね！」

ケイティは、温かい水の最後の一滴が彼女の顔を伝い、床に敷かれたタオルに滴り落ちるのを感じて寒気がした。「…最初のスパンキング？」

説明を待たずに、ママは左手でケイティの震える濡れた尻に十発の清々しい平手打ちを決めた。「はい！ これは浴槽で水しぶきをあげたからね！ それからこれ…」ママはさらに十発のスパンキングを決めてから付け加えた。「これはバスタイムが終わる前に浴槽から出ようとしたからよ。そしてこれは、最初のスパンキングの最中に立ち上がったから…」

さらに十発のスパンキング。強く耐え抜きたいと切望しながら、ケイティは泣き叫び、浴槽の水の中で足をバタつかせた。彼女はお尻に水しぶきがかかるのを感じ、それからママが警告として二発の鋭い平手打ちを決めた。「浴槽の中では蹴らないこと！」

ケイティは緊張して足を抑え、さらに水しぶきをあげてさらなる罰を受けるのを恐れた。案の定、ママはさらに八発の平手打ちを加えて十発のセットを完成させた。「くぅぅぅ！」ケイティは歯を食いしばった。

「ああ！ そう言えば！ これは悪い言葉を使ったからよ！」ママは石鹸の固まりをすくい上げ、ケイティの顔の前に置き、さらに十発のスパンキングを決めた。ケイティは跳ねる衝動を抑えたが、浴槽の湯が彼女の臀肉の下部に波打ち、その波が浴槽の縁から溢れ出さんばかりになっているのを感じた。

床のタオルに頭を下ろし、ケイティは泣き言を言った。
「うぅぅぅ痛いよお！」

ママは励ますようにケイティの尻を軽く叩いた。「よし！ これで小さな悪事を罰したから、次は二回目のスパンキングについて話せるわね！」

ケイティは肩をすくめ、ついに顔の前にあるバスブラシを思い出した。「でも、いい子にしてたらもうスパンキングはないって言っただろ！ あたしはいい子にしてる！」

ママはため息をつき、ケイティの背中を軽く叩いた。「違うわよ、ケイティ。従えばすぐに終わると言ったの。でも、二度とバスタイムで悪さをしないように、二回目のスパンキングをしなきゃいけないの。あなたは不従順のために自分を深刻な危険にさらしたのよ！ それだけでもバスブラシでのしっかりとしたパドリングに値するわ。でもその前に…」

ママはケイティの背中越しにシャワーヘッドに手を伸ばし、お湯を出して、慎重にケイティの上向きになった臀部に流した。「あなたのお尻をしっかりと濡らして、びしょ濡れにするつもりよ。それが本物のバスタイムのスパンキングを得る唯一の方法なんだから！」

ケイティは口を開けて反論しようとしたが、温かく心地よい水を感じて言葉を失った。「ば… でも？」

ママはケイティの肌から湯気が立ち上り始めるのを確認するまで待ち、それからシャワーを止めた。ケイティの頭は床の柔らかくてふわふわしたタオルに沈み、彼女は唇をそれに押し付けてその感触を楽しんだ。「んー！」

それからママはバスブラシの最初の一撃をケイティの左の尻の頬に加え、すでに焦げたように赤くなった肉の上に赤紫色の跡を浮かび上がらせた。ブルキーのケイティはその感触を少しも楽しめなかった！

「うぉおおおおおおっ！！」彼女は叫び声をあげ、反射的に脚とお腹を浴槽の縁にきつく押し付けたが、それでかえって腰がさらに高く上がり、二発目の一撃が右の尻の頬に決まり、同じような楕円形の隆起を浮かび上がらせた。

「うぉおおおおおっ！！！」目がくらみ、ケイティは息を求めてあえぎ、最初の隆起の残る感覚と二発目の新鮮な痛みが闘っていた。

ケイティがいい子になる準備ができた、あるいは少なくとも努力する準備ができたと満足したママは、黙ってバスブラシを掲げた。これが自分の厳粛な母としての義務であることを知り、これまでのすべてのスパンキングを合わせたよりもこの最後の教訓を厳しいものにしようと決意した。彼女はただケイティをとても愛していたのだ！

最初の二発の強烈さはケイティに再び逃げ出したいという誘惑を与えたが、さらなるスパンキングを獲得することへの恐怖が彼女をその場に留まらせた。浴槽の中で水が揺れ、数滴が縁からこぼれ落ちた。「お、お願い、ママ！ もう十分だ！ もう二度としない！ 約束する！」

しかしママは浴槽に手を入れ、栓を抜いた。ケイティはぬるい水が徐々に排水されていくのを感じながら皮膚をくすぐった。排水口の柔らかな音は、次の爆発的なバスブラシの衝撃音と、ケイティの同様に爆発的な悲鳴と対照的だった。

さらに二発の平手打ちの後、ケイティの声はかすれ、彼女の叫び声は勇敢なアマゾン戦士の鬨の声というより、怖がった小さな女の子の壊れた泣き声のようになった。

ケイティは新たな涙が目に溜まるのを感じ、唇を引き結んで叫び声を隠す最後の努力をした。ママはさらに五発の平手打ちを加え、合計を十発にしたちょうどその時、水位はケイティのふくらはぎの高さまで下がった。ケイティは最後の悲鳴を飲み込もうとしたが、唇を引き結んだだけではわずかにくぐもるだけだった。

ママはいつも十発単位でスパンキングすることを思い出し、ケイティはようやく震えるような息を許した。するとママは十一発目を加えた。ケイティは子犬のようにキャンと鳴いた。
「あわっ？」

ケイティが理性的にスパンキングがまだ終わっていないと処理し始めたちょうどその時、十二発目が決まり、彼女の慈悲の嘆願は泣き叫びと喘ぎ声に変わり果てた。「もうやめて、ママああああ！ うわあああん！ ひっ！ ふーっ！」

十三発目を決めた後、ママは徐々に平手打ちのテンポを上げていき、終わりにはケイティは泣き叫び、震える無残な姿に成り下がっていた。二十発目が決まったのは、最後の一滴の浴槽の湯がゴボゴボとシューという音とともに排水口に渦を巻いて消えていった瞬間で、それはケイティのすすり泣きとうめき声と見事に調和していた。

震えながら、ケイティは打ちのめされて横たわり、スパンキングされているという事実以外の何も精神処理できなかった。ライブストリームについての考えはすべて遠くへ消え去っていた。ママは優しくケイティの頭を床から持ち上げた。かすかに、ケイティは石鹸の固まりが唇に押し当てられるのを感じ、従順に口を開けてそれを受け入れ、苦い味が舌を襲うと顔をしかめて泣き言を言った。ママは彼女が浴槽に座り直すのを手伝い、ケイティは今や事実上紫色になった臀部が浴槽の冷たい表面に触れたときに身をすくめ、手と足に体重をかけた。

ママは再びシャワーヘッドの水を出し、ケイティの髪を洗い流し始めた。「よしよし、赤ちゃん。残りのシャンプーを洗い流してあげるわ。」

目の中の持続的なしみる感覚が、尻の中の持続的なしみる感覚から気をそらしてくれたが、ケイティは体を引っ込めて蛇口の下に頭を突っ込み、自分でシャンプーを洗い流したい誘惑に駆られた。

慎重に座ろうとしたとき、ケイティは自分の臀部の下部にあざができていると確信した。痛みは鈍い痛みに変わったが、彼女が全体重を座面にかけようとするたびに、臀筋の奥深くに針で刺されたような感覚を覚えた。しかしスパンキングの記憶が彼女を座らせた。お尻が浴槽の表面に押し付けられている限り、ママはそれを叩けないのだ。

そして温かい水が彼女に降り注ぐ中、ケイティは頭を後ろに反らし、ママに癒されるままに任せた。浴槽の水が抜け、ケイティは冷たく感じた。温かい水が陽気に彼女に飛び散るいくつかの箇所を除いては。ケイティは、ママが石鹸の固まりを引き抜き、彼女のあごを持ち上げるのをほとんど気づか

なかった。「吐き出しなさい」とママは命じた。ケイティは従い、口全体を覆う石鹸の厚い膜を吐き出した。温かい水でうがいをした後も、味は残っていた。しかしケイティはついに安堵を感じた。

ママはシャワーヘッドを止め、トイレに座り、遊び心を持って自分の膝を叩いた。「さあ、ずっと良くなったでしょ？ さて、今からあなたにリマインダースパンキングをしなきゃね。そうしたらバスタイムはおしまいよ！」

ケイティの全身が緊張し、血の気が引いた。「り、リマインダースパンキング？ それって何のため？」

ママは、まるでませた娘が可愛らしく単純な質問をしたかのようにため息をついた。「次にあなたをお風呂に入れる時に悪さをしないように思い出させるためよ、もちろん！ リマインダースパンキングって、それ以外に何かあると思う？」

ケイティはさらに濃い石鹸の泡立った痰を吐き出した。「でも … げほっ … それでさっきもうスパンキングされただろ！」

「もちろん。それは罰のスパンキングよ。それはあなたが悪さをしたことを罰するためだったの。でもリマインダースパンキングはまったく別物よ。次はもっと上手くやるように思い出させるためのものなの。」

頭がすっきりしてくると、ケイティは怒りが高まるのを感じた。彼女の尻を掴む灼熱の炎が、彼女の心を掴む氷のような冷たさに対抗していた。「でも、すぐに終わるって言っただろ！ あんたは——」ケイティはママを「嘘つき」と呼ぶ直前に石鹸でむせた。考え直して、ケイティは自分の主張のために汚い言葉を使うのは避けることにした。「げほっ！ つまり、

いい子にしてたらもうスパンキングはないって説明しただろ？ それこそがあたしが従うべき理由なんじゃないのか？」

ママは首を振った。「違うわよ、ケイティ、あなたは誤解してる。第一に、スパンキングを避けるためだけに従うのでは十分じゃないわ。あなたはいい子になりたいから従うべきなの。そしてあなたはそうしたいんでしょ？ 違う？」

ケイティは拳を握りしめたが、両方の中指を母親に立てる前に、彼女の臀肉の中のチクチクする感覚が燃え上がり、彼女の良心の痛みと一致した。彼女は決して認めたがらなかったが、自分自身にさえも、ケイティの一部は、遅かれ早かれ誰かが自分に立ち向かってくれることを密かに望んでいた。ケイティには自分自身の密かな願いを言葉にする自己認識が欠けていたが、どういうわけか、インターネットで哀れな孤独者やシンプたちをいじめるのは、彼女が思っていたほどいつも楽しいとは限らなかった。

ケイティの沈黙を「はい」と解釈して、ママはケイティの頭を軽く叩いた。「もちろんそうよ！ あなたの顔にありありと書いてあるわ！ あなたは悪い子じゃないのよ。ただ、正しい道に戻るためのちょっとしたリマインダーが必要なだけ。そして第二に、もしヘルハイの学生行動規範と懲戒マニュアルをもう一度読み直せば、『罰のスパンキング』と『リマインダースパンキング』はまったく異なる指導手段だって分かるわ。確かあなたは、様々な種類と適用方法をまとめた第六章から第九章を覚えているはずよ。どちらも『尻叩き』という点では同じでも、それらがまったく同じものでないことは分かってるわよね！」

ケイティは懲戒マニュアルという言葉に顔を青くした。それはおそらく彼女がざっとめくった本のことだろう。ママは彼女が

承諾書にサインする前にそれを注意深く読んだと思い込んでいた。しかし恐怖の中で、ケイティはそのような資料を読んでいなかっただけでなく、自分がその手紙にサインしたことさえ確信が持てないことに気づいた。「あたしが地獄に行くって言ったからだ！ いや、そんなに単純なわけないよな？」と考えた。彼女は助けを求めて口を開こうとしたが、まるで地獄の火がすでに下から彼女をくすぐっているかのようだった。

もし彼女のお尻が話せたら、きっとこう言っただろう。「口が払えない小切手は尻で支払うことになるってことを忘れんなよ、お嬢ちゃん。」

ママは娘の不滅の魂（そして死すべきお尻）の状態に対する内面の葛藤に気づかず、さらにしつこく自分の膝を叩いた。「さあ、ケイティ。あなたはヘルハイの行動規範書にサインしたんだから、次に何が起こるかは分かってるわね。リマインダースパンキングの準備はいい？」

ケイティの唇が震えた。「こ、これが最後のスパンキングなの？」

ママはくすくす笑った。「もちろん違うわよ、ばかね。でも今日のバスタイムのスパンキングはこれで最後よ。」ケイティが抗議する前に、ママは指で数え始めた。「ええと、今夜あなたを寝かしつける前にパパがしてくれるおやすみのスパンキングもあるし、一週間、毎回のバスタイムにまたリマインダースパンキングもあるわ。」

ケイティの目は恐怖で見開かれたが、ママはそれを娘が真剣に聞いている証拠だと思った。ケイティが注意を払っているのを見て喜んだママは、最初に懲戒マニュアルを調べた

時のことを思い出そうとハミングした。「うーん、リマインダースパンキングはバスタイムの前にするのか後にするのか、思い出せないわ。もしかして両方かしら？ 確認しなきゃね。でもいずれにせよ、一週間ずっとバスタイムでいい子にして悪さをしなければ、それで終わりよ！」

ケイティの口は開いたままだったが、やがて舌が動いた。「じ、じゃあ、従わなかったらどうなるの？」

ママの笑顔が消えた。「それなら、従わなかったことで罰のスパンキングをしなきゃいけないし、従わないことを教えるためのリマインダースパンキングもしなきゃいけないわ。それから、今夜のパパのおやすみスパンキングをもう一回してもらうように言わなきゃね。もちろん、浴槽で水しぶきをあげないようにリマインダーを与えるたびに、従うようにリマインダーを与えるために、リマインダースパンキングを繰り返さなきゃいけないわね。でも本当はそんなことはしたくないのよ。あなたをスパンキングしなきゃならないのは嫌なのよ、ケイティ。あなたよりも私の方が辛いの。だからそれが嫌なら、ママの膝の上に来なさい。ぐずぐずしないで。」

ケイティは尻の頬を引き締め、肛門が縮まるのを感じた。つまり、ちょっとした悪事でも少なくとも三回のスパンキングを稼ぐことになり、しかも行動規範のスパンキング対象となる違反のリストに何があるのかも分からなかった。さらに悪いことに、反抗と不従順の一つ一つがスパンキングの回数を指数関数的に増やすことになる。ケイティは数学が苦手だったが、これがすぐに二度と快適に座れなくなることを意味することくらいは計算できた。「はい、ママ、従います！」

ケイティは立ち上がったが、カメラを思い出してこっそりと身を隠し、それから浴槽から急ぎすぎると不注意でスパンキン

グされるかもしれないと思い、それからゆっくりすぎると従うのが遅いとスパンキングされるかもしれないと思い、結局カメラのことは完全に忘れてしまった。

ケイティが最後の足を浴槽から上げようとしたとき、ママが手を挙げた。「ちょっと待って、あのバスブラシをどこに置いたかしら？」

ケイティの髪の毛が逆立った。彼女はママが置き去りにしたままの、浴槽のフックに掛かったバスブラシを見つけた。ケイティがスパンキングの素晴らしい世界を知る前は、よくママは「自分の頭が肩に付いてなければ、自分の頭さえ忘れる」と言っていた。彼女の一部はママがその恐ろしいブラシを決して見つけないことを望んだが、ケイティは自分の震える指が勝手に動くのを感じた。「そこにあるよ、ママ。」

ママは顔をほころばせた。「おお、まあ、もちろんそこに置いたままだったわ。私ったらばかね！ 自分の頭が肩に付いてなければ忘れてしまうこともあるわ。思い出させてくれてありがとう、ケイト。もうすでにこんなに赤くて生々しいのに、またあのバスブラシであなたのお尻を水ぶくれだらけにするために使うって分かっていながら、それを教えてくれるのは辛かったでしょう？ 分かる？ あなたが優しくて従順な小さな女の子になることを促すために必要なのは、良いスパンキングだけだったのよ。ずっとあなたはいい子だって分かってたわ… 心の奥底ではね！」

ブルキーのケイティの後ろ姿は確かに今のところ良いスパンキングを感じていたが、ケイティはまだいい子になることに興味はなかった。今のところ、ケイティは母親の腕を掴み、自分の膝の上に引きずり寄せ、その場で真っ黒になるまでスパンキングしてやる姿を鮮明に想像していた。しかし行動

規範の地獄のような文字がケイティの心に焼き付いているようだった。口を開ければママに悪態をつきそうで怖くて、ケイティはうめき声をあげてうなずくことにした。「んー。」

ママは子犬のように首をかしげた。「なんて勇敢な子！ お願いだから、あのバスブラシを取ってきてくれない？」

怒りに燃えながら、ケイティはフックからバスブラシをひったくり、乱暴に差し出した。「さっさと終わらせろ！」

しかしママは手を挙げ、娘の手を長い柄の周りに閉じさせた。「ダメダメ、ばかね！ リマインダースパンキングの肝心な点は、あなたの行動について話し合い、過去に何を間違えたか、そして将来どうやって改善するかを考えるのを手伝うことなのよ。リマインダースパンキングの前に、追加の罰のスパンキングが欲しいわけじゃないんでしょ？」

ケイティはブラシを握りしめ、新兵のようにピンと張りつめた。「違う！ もうスパンキングはやめて… お願い？」

ママはくすくす笑った。「まあ、これからもっとたくさんのスパンキングがあるのは間違いないけど、今日はだいたい一回分のスパンキングは免除してあげられるわ。さて、リマインダースパンキングを行うための便利なヒントを覚えているかどうか見てみよう… ああ、そうだ！ 始める前に、ケイティ、ブラシを前に持ってほしいの。」

困惑しながら、ケイティはブラシを掲げ、洞穴女の棍棒のように握ったが、ママは首を振った。「そんな風じゃないわ。もっと淑女らしく。こうやって。」

ママは手のひらを上にして実演し、ケイティはおずおずとそのジェスチャーを真似た。バスブラシは彼女の手に軽く感じ

られた。ケイティのケツは、つい最近のスパンキングの記憶でピクピクと動いた。

ママは、ケイティの沈黙の考えに同意するかのようにうなずいた。「そうそう！ それが、懲罰者にスパンキング器具を差し出す礼儀正しい方法よ。自分を王女だと思って、魔法の剣を王子様に授けるのよ。ただ、王子様が恐ろしいドラゴンを叩きのめす代わりに、あなたのボトムを叩くってだけね。次に、そのバスブラシをじっくりとよく見て。手の中の重さを感じて… さあ！」

ケイティがブラシを見下ろすと、それは突然彼女の手の中で重くなったように感じられ、ついさっき感じたばかりの目がくらむような重い一撃と結びついた。

ママは、まるで木製ブラシの職人技についての意見を述べるように手を振った。「その同じ重さのブラシが、あなたのいたずらな小さなお尻に叩きつけられた時の感覚を覚えている？」

怒りの中で、ケイティは「もちろん覚えてるに決まってるだろ！ 何を期待してるんだ？」と吠えたかったが、代わりに「ああ？」と言うことにした。

ママは猫のように微笑んだ。「きっと覚えてるわね！ 次に、あなたが何を間違えたか話しましょう。」

ケイティは目を回した。なんて馬鹿げた質問だ。「浴槽で水しぶきをあげて、それから浴槽から出ようとして、最初のスパンキングの時に立ち上がった。」

ママはうなずいた。「そして、あなたはスパンキングされるのが好きなの、お嬢さん？」

ケイティは、ブラシが耐えられないほど重くなったかのように震えた。彼女は何が起こるか正確に分かっており、それを止めるために何もできないことを知っていた。前回のスパンキングで彼女のお尻が抗議の叫びをあげていること、そしてこの手の中の恐ろしいものが彼女をさらに傷つけることを知っていた。彼女はこの邪悪なバスブラシを素手で二つに折ることができると知っていたが、それをすればすべてがもっと悪化するだけだと分かっていた。ケイティは知らなかったが、人生で初めて、彼女がいじめっ子として活動していた間の被害者たちが感じていたのとまったく同じ気持ちを味わっていた。涙が彼女の目にあふれた。ケイティは何年もの間いじめっ子だったことを後悔してはいなかったが、今のところ確かに自分自身を憐れんでいた。「… 嫌？」

ママは腕を組んだ。「それならなぜやったの、ケイティ？」

ケイティはうなだれた。「分かんない…」

「よく考えてごらん、ケイティ。浴槽の中で立ち上がった時に、あたしに何て言ったか覚えてる？」

ケイティは震える手を落ち着かせ、ブラシを落としたら何が起こるか知りたくなかった。彼女はママをスパンキングすると脅したことを確かに覚えていた。なぜならケイティは今でもママをスパンキングしたいと思っているからだ。「あ、あたしは… 覚えてない…」

ママはしかめ面で首をかしげた。「嘘はダメよ、お嬢さん！この会話を最初からやり直す前に、もう一度スパンキングが欲しくないなら、本当のことを言いなさい。」

ケイティは顔をしかめ、二つの涙が頬を伝い落ちた。「あ、あたしは… ママをスパンキングしたいって言った…！」

ママは首を振った。「そうね。でも分かるでしょ、ケイティ、あなたは私をスパンキングできないの、どんなにスパンキングしたくても。私はあなたのママなんだから。そして私があなたのママだからこそ、どんなにスパンキングしたくなくても、スパンキングしなきゃいけないのよ。」

ケイティの涙は自由に溢れ、鼻水が出始め、息をしようとあえいだ。「お願い、スパンキングしないで、ママ！ お願い！」

左手を使って、ママは娘の後ろに手を回し、ケイティの右の尻の頬に素早く愛情のこもった軽打を加えた。ちょうど十分な強さで、それが揺れて跳ねるほどだった。「もうやめなさい。すぐに泣く理由をあげるからね。さて、ケイティ、その態度こそが今あなたがそんなに問題を抱えている理由なのよ。そう、あなたは浴槽で悪さをした。それはスパンキングを受ける原因になった。でもなぜあなたがそれをしたのかは、もっと深刻な問題なの。私があなたをスパンキングする時、あなたのあの馬鹿げた『ママをスパンキングする』という脅しを思い出してほしいの。あなたが私をスパンキングしたいと思った理由こそが、私があなたをスパンキングしなければならない理由だってことを思い出してほしいの。ここで誰がボスかを思い出させるためにね。」

鼻づまりで鼻をすすりながら、ケイティはうなずいたり首を振ったりを繰り返した。「誰がボスか分かってる！ ママがボスだ！ スパンキングしなくても——」

「ダメ。口を挟まないで。」

ケイティはパチンと口を閉じた。彼女の唯一の希望は従うことだった。もし完全に従順であれば、ママは彼女が今やいい子になったと見て、もしかしたら、もしかするとママはもうス

パンキングは必要ないと決めるかもしれない。ママは沈黙を続け、娘が聞いていることを確信すると、明るく続けた。「最後に、ケイティ、あなたの行動に対して何が公正な罰かを話し合わなきゃね。確か覚えていると思うけど、罰のスパンキングは通常、罪の重大さに応じて一定の回数が決まっているのに対し、リマインダースパンキングは、懲罰者の裁量でずっと短くなったり、ずっと長くなったりするのよ。」

ケイティは、まるでママが何を言っているのか正確に分かっているかのようにうなずいた。

ママは指で数え始めた。「例えば、手だけを使って長いスパンキングをして、バスブラシは使わないという方法があるわ。あるいは、手でのスパンキングを省いて、バスブラシだけで短いスパンキングをする方法もあるわ。」

ケイティの頭は逃げ道を探して疾走した。「他に選択肢はないの？」

ママは目を見開き、それから指を数え直した。「もちろんあるわ！ 三つ目の選択肢を忘れてたわ。リマインダースパンキングには、手だけ、器具だけ、あるいはどちらも選ばないという三つの選択肢があるの。代わりに——」

「どっちもいらない！」ケイティは叫んだ。彼女はそれが文章を書くとか、余分な家事のようなものだと確信していた。この恐ろしくて、ひどくて、まったく良くない、最悪のバブルバスから逃げられるなら、それが何であれ気にしなかった。

ママは息をのんだ。「ケイティ？ 本当に？ もし私があなたなら、手でのスパンキングを選ぶけど、でも——」

ケイティはかかとでぴょんぴょん跳ねた。浴槽の湯気で鏡が曇り、彼女はサウナに閉じ込められているように感じたが、冷や汗をかきながら彼女は逃げ道を見つけた。「三つ目の選択肢！」

ママは微笑んだ。「とても誇りに思うわ、ケイティ。簡単な道として短いスパンキングを選ぶこともできたのに、明らかにあなたは自分の行動に責任を受け入れる準備ができているのね。」

ケイティはうなずいたが、その恐ろしいブラシを投げ捨てようとしたまさにその時、彼女はそれができないことに気づいた。ブラシを安定して持ち続けることで腕が痛んだにもかかわらず、まるで手のひらがブラシの柄に接着され、ブラシは空中に不動で浮かんでいるかのようだった。彼女はブラシを包み込む地獄の炎の舌を見たように思い、それが自分の手を焼いていると確信した。火から遠ざかりたいという本能が彼女に駆け巡ると、ケイティは息を吸い込もうとしたが、詰まった鼻がふさがっているのを見つけた。

娘のジレンマに気づかず、ママはブラシを受け取るために手を差し出した。「それなら、毎回のバスタイムに、長い手でのスパンキングと、さらに長いバスブラシでのパドリングをしてあげるわ。それが浴槽に座っている間の行儀を思い出させるリマインダーになるでしょう。さあ、ケイティ、ブラシを渡して。」

ケイティが自分に何が起こっているかを理解したとき、彼女はバスブラシの地獄の力が作動し、ブラシを渡して大人しくスパンキングを受け入れさせるだろうと予想した。しかしブラシを取り巻く炎が彼女の手のひらの皮膚を溶かしているように見える中、ケイティはそうではないことに気づいた。ブラシ

は彼女に何も強制しようとはしなかった。他に選択肢はなかったが、それでも彼女は自由に、スパンキングを受け入れることを選ばなければならなかった。頭の中で「嫌だ！」と叫びながら、ケイティは優しくブラシをママの開かれた手のひらに置いた。

ママは遊び心を持って手のひらでバスブラシを跳ねさせ、期待してケイティを見つめた。沈黙が気まずくなると、ママは眉を上げてバスブラシを脇に置き、洗面台の手の届くところに置いた。「ケイティ、マナーを覚えてる？ リマインダースパンキングの時には何て言うの？」

「え… 何？」

「覚えてないの？ リマインダースパンキングの章では、罰を求める丁寧な方法が説明されてるわよ。読んだんでしょ？」

「うん！」ケイティは反射的に嘘をついた。彼女が嘘をついた瞬間、あざだらけの臀肉の鈍い痛みが消え、不自然に熱いチクチクする感覚に取って代わられた。「うっ！ でも… 思い出させてくれる？」

ママは真面目ぶって手を組んだ。「よろしい。でもちゃんと練習するのよ。リマインダースパンキングの時に適切な感謝を示さないと、もう一回スパンキングをされることになるからね。まだ学んでいる最中だから、今回は罰のスパンキングはしないであげるわ。」

ママは笑みを浮かべ、真面目な演技をやめて、遊び心を持ってケイティの尻を三回軽く叩いた。「でももうリマインダーはなしよ… さもないとリマインダースパンキングが増えるからね！ あとに続いて言いなさい：『ありがとう、ママ。い

い子でいることを思い出せるように、良いリマインダースパンキングをしてください。』」

ケイティは硬直し、地獄の炎が彼女の後ろ側でパチパチと音を立てる中、軽いタップの一つ一つが本格的なスパンキングのように感じられることに気づいた。しかしママが最後の平手打ちを決めると、まるで彼女は地獄行きのケイティのケツを焼く見えない炎を消し去っているかのようだった。炎が消えると、彼女は涙が戻ってくるのを感じ、自分の運命を決定づける言葉を繰り返そうとしてしゃっくりをしながら言った。「あ、ありがとう、ママ。お、お願い ひっく 良いリマインダースパ—— ひっく！ リマインダースパンキングを、—— ひっく！ いい子になるのを覚えられるように… してください！」

「はい、キティ、するわよ。そして知っておいてほしいの：ママはあなたを愛してるわ！」

ケイティはママに赤ん坊のように空中に持ち上げられてきゃあと鳴いた。ママは彼女を自分の右の太ももの上に座らせ、温かい抱擁でケイティを胸に抱き寄せ、ケイティのお尻が外側を向き、脚が母親の膝の両側に垂れるようにした。ケイティは、自分に何が待ち受けているかを痛感していなければ、とても安全で慰められていると感じたことだろう。ケイティは「ああ、やめて、ママ。お願い、やめて！」と懇願しようと口を開けたが、ママはためらわずに左手で最初の鋭い平手打ちを決めて娘の騒ぎを黙らせた。ケイティがキャンと鳴くと、彼女のしゃっくりは消えた。

ケイティはすぐにスパンキングの回数を数えられなくなった。「長い手でのスパンキング」は約一分間続き、続いてバスブラシでのパドリングが二分間続いた。終わりには、ケイティ

はまた泣き崩れていたが、彼女が立ち上がってスパンキー（スパンキングされる側）の戦争踊りを始めようとしたとき、ママが彼女の手首を掴んだ。「ちょっと待って、ばかね！ 反対側もやらなきゃね。ムラのある仕上がりは嫌でしょ？ マニュアルには、均一な赤色を生み出す必要性が明確に書かれているのよ！」

ケイティは激しく首を振ったが、反論する間もなく、彼女はママの左膝の上に、先ほどの位置の鏡像のように配置され、ママは右手で彼女をスパンキングし始めた。「私は生まれつきの左利きなの。だからパパと一緒にあなたをスパンキングする時は、彼がもう片方の頬を均してくれるのを当てにできるわ。でも二人きりの時は、右手を使うのに慣れなきゃいけないみたいね！」

一分間の右手での手のスパンキングと、二分間の右手でのバスブラシでのパドリングの後、ママはリマインダースパンキングが正式に終了したと宣言した。ケイティはバスルームのリノリウムの床に崩れ落ち、呼吸を荒げながら、ズキズキするお尻を高く上げた。「ふぁ―― ひっく！ くぅぅぅ！」ケイティは歯を食いしばった。かすかに、彼女は率直なカメラが彼女をYouTubeとTwitchからBANさせるのに十分なものを捉えたかどうか疑問に思った。

ケイティは肩越しに振り返り、シャワーの上に隠されたカメラを見つけようとして瞬きをした。しかしママが指を鳴らした。「おお！ そう言えば、悪い言葉を使わないようにリマインダーをしなきゃいけなかったわね！」

ケイティの困惑のうめき声と恐怖の息を呑む声は、両方とも新たなしゃっくりによって遮られた。「え？ ひっく！ え？ ひっく！」

しかしケイティが自分の絶望をさらに詳しく述べる前に、ママは黄色い石鹸の固まりをすくい上げてケイティの口に戻し、ケイティをすくい上げて再び自分の膝の上に座らせ、二度目のリマインダースパンキングを始めた。ケイティは叫び声をあげ、うめき声をあげたが、無駄だった。

「あたしは口の中に石鹸の固まりがある、そしてあたしは叫ばねばならない！」とブルキーのケイティは思った。

[パート2 終]

ブルキーのケイティ、お尻を叩かれる:

パート3:細則を読め

ケイティが二回目の「優しいリマインダー」スパンキングを耐え抜いた頃には、彼女は完全に、そして徹底的に疲れ果てていた。ケイティはトイレの背面に額を預け、木製のバスブラシによる一見終わりのない平手打ちの連続に震えていた。それらは以前より痛みが弱まったわけではなかったが、彼女はあまりに疲れていて、もう蹴ったりもがいたりする気力さえ残っていなかった。

ママはバスブラシを置き、安堵のため息をついた。「さて、これでバスタイムのスパンキングは十分でしょう。お昼寝の前に、さらに悪さをする方法を見つけでもしない限りね。」

ケイティは、石鹸の固まりを通してむせび泣きながら答えた。泡と唾を飛ばしながら。

ママは自分の額を叩いた。「私ったらばかね。口に石鹸の固まりを詰め込まれて、礼儀正しい会話ができるはずがないわね！」

ママが泡立った石鹸の固まりをポンと抜き出すと、ケイティはむせて泡立った舌を出した。「べえっ！」

ママは遊び心を込めてケイティの尻を叩いた。「ママに舌を出すなんてダメよ、てへへ！ さあ、体を拭いてあげるわね。」

ママはタオルを掴み、ケイティが反論する間もなく彼女の髪をゴシゴシと拭き始めた。ママはケイティの臭い衣服を拾い上げながら、そっと鼻歌を歌った。「あらまあ、着替えを持っ

てくるのを忘れてたわ！ 今はとりあえずタオルにくるまってなさい。パパがあなたの新しい服を準備してくれてるはずよ。家族で話し合いが終わったら着替えましょうね。」

ケイティはタオルに手を伸ばしながら、泡を何度か咳き込んだ。ママはくすくす笑いながらタオルを引っ込めた。「あらあら、ダメよ！ あなたには特別なタオルがあるの！ 小さい頃、これをすごく気に入ってたのを覚えてる？」

ママが流しの下から二枚のぼろぼろの古いタオルを取り出すと、ケイティはそれらを認識して顔を青ざめた。「ス、ス、スポンジ・ボブ？」

ママはうなずき、その笑顔が突然神秘的なものになった。「あなたのお気に入りよ！」

ケイティは泣き言を言いながらタオルを受け取ったが、自分の尻の悲惨な状態を思い出し、ケイティはすぐに幼児向けのタオルで胴体と頭を包み、文句を言わなかった。

腹立たしいことに、ケイティは鏡の中に自分の臀部の下部がちらりと映るのを捉えた。タオルは彼女の胸を覆うのがやっとで、腰にはまるでスキャンダラスなほど短いミニスカートのように掛かっていた。しかし、ないよりはましだった。

口をとがらせながら、ケイティはタオルを持ち上げて痛む臀部を調べた。それは依然として悪魔的な赤色で、下部の頬にはいくつかの斑点状の紫色のあざがあった。突然、ママは子供のようにケイティを抱え上げ、前腕に乗せた。「さあ、パパのところに行きましょう。パパがあなたが従うべき新しいルールと、なぜ今スパンキングが必要なのかを説明しなきゃね。」

ケイティは、自分の体重すべてが臀部の下部に押し付けられるのを感じてきゃあと鳴いた。「ひっ！ ま、ママ… あたしはもう大きい子だろ？ 二人きりで話せないの？」

「どういう意味、ケイティ？ もう二人きりでしょ！」

ケイティはシャワーヘッドの後ろに隠したカメラを見つけてごくりと飲み込んだ。「えっと…」

そしてママがドアを開け、ケイティが振り返ると、パパがハンディカメラをまさに彼女の臀部に向けているのが見えた。パパはくすくす笑った。

「おっと！ すまない、ケイティ、録画であんたの小さなお尻をちょっと見てしまったようだ。見てくれ、このカメラは完全にワイヤレスだ。私たちの小さな可愛い子を外に連れ出す時に録画できるだろう。ケイティが小さい頃、いつもベビービデオを撮りたかったけど、カメラが買えなかったのを覚えてる？ 今、まるで二度目のチャンスが与えられたみたいだ！」

ママは首を伸ばしてカメラを調べた。「これって、私たちの悪い娘が許可なく買ったカメラの一つじゃない？」

恐怖の中で、ケイティはハンディカメラの赤い録画ランプに気づき、それがゲーマーガールのバスタイムセッションを告知するために自動的にライブ配信を開始するよう設定したものだと認識した。WiFi接続を示す青いランプが点灯していた。つまり、彼女はまだインターネット上でライブ配信中だった！

ケイティの恐慌に満ちた表情に気づかず、パパはカメラを掲げた。「その通りだ！ でもこれは家族の思い出を録画するのに便利だと思う。どのボタンを押せばいいか怖いけど、録

画はできていると思う。ケイティとの小さな『家族会議』を録画してみないか？ 後になって彼女が人生の教訓として役立てられると思う。何しろ、ケイティ、今日はお前がついに大きな女の子になること、そして責任を取ることを学ぶ日なんだから！」

首を振りながら、ケイティは歯を食いしばった。「やあああ あ！」

ママはケイティの後ろを叩いた。「おやまあ。どうやら私たちのいたずらな小さなケイトとちょっとしたおしゃべりをするには… ケイティのいたずらな小さなお尻ともう一度おしゃべりが必要になりそうね！」

ケイティは、遊び心のある愛情のこもった軽打が彼女の座面に地獄の火を再燃させるのを感じて息を吸い込んだ。「分かってない！ あのカメラは——」

ケイティは言葉を切った。もし両親が彼女がそのカメラを何に使おうとしていたかを知ったら… 確実にまたスパンキングされるだろう！

パパは瞬きし、カメラを安定させたままだった。「何だい、ケイティ？」

ケイティは作り笑いを浮かべた。「あのカメラは… ホームビデオに最適だね！ バッテリーを後で取っておくために、電源を切ったほうがいいよ！」

パパは顔をほころばせた。「心配するな！ 取扱説明書を見つけたんだ。さっぱり分からなかったけど、どうやらバッテリーは充電なしで何日も持つらしい。さあ、ママ、囚人を居間に連れて行け！ 裁判の時間だ。」

「た、囚人？ さ、裁判？」

ママは優しく言った。「おお、心配しなくていいわ、キティ。それはただパパが裁判官のふりをしてからかってるだけよ… もちろん、あなたが悪さをして言うことを聞かないなら、私が喜んで処刑人を演じてあげるけどね。」

ママは警告が明確に伝わる程度の強さで、ケイティの後ろを叩いた。ケイティは緊張し、唇をきつく結んだ。あとはママとパパが気をそらすまで冷静を保つことだ… そうすれば自分の寝室からライブストリームをシャットダウンできる。彼らが知ることは決してない。

ママがケイティを居間に座らせた後、ケイティは素早くタオルを直し、パパが咳払いをした。「このカメラを暖炉の上に置いておくよ… よし！ これで全部を撮影できる… コホン！ さて、ケイティ、よく聞いてくれ。家の中で新しいルールがいくつかできる… そしてそれを破った場合の厳しい結果もある。これからは、何か悪いことをしたら、スパンキーをもらうことになる。でもスパンキーはただ悪いことをした罰だけじゃない。いい子になることを教える方法でもある。だからつまり、これからは少なくとも一日一回、そして寝る前にもスパンキーをもらうことになる！」

ケイティは顔をしかめた。「何だって？！？」

ママは、鮮やかな赤と黒の表紙の分厚い本を掲げた。「ヘルハイ懲戒マニュアルによると、これらは両方とも特別な種類のスパンキングなの。『メンテナンススパンキング』と『おやすみスパンキング』って言うのよ。悪いことをしたからもらうわけじゃないの。これらのスパンキングはただ、いい子でいるように思い出させるためのものなの！」

ケイティは自分の尻を掴み、子供の頃のタオルのスポンジ・ボブの柄を巨大な手でねじった。「で、でも、でも、もうリマインダースパンキングをもらっただろ！」

パパはしかめ面をした。「おやおや。ケイティはバブルバスの間に悪さをしたのかい？ あれが俺が聞き取ったあの騒ぎの全部だったんだろうな。」

ママはため息をついた。「どうやらそうみたい。ケイティはバスタイムの間に三回別々の罰のスパンキングを稼いだわ。でも心配しないで、三回分の追加のリマインダースパンキングも忘れずにあげたからね！」

「それは良かった。残念ながら、それでも今夜は三回追加のおやすみスパンキングを稼いだことになるな。合計で何回だ？」

ケイティは歯を食いしばった。「でも… 今日、もう十二回くらいスパンキングされたんだぞ！」

ママはため息をついた。「ええ、本当に行動を改善するように努力すべきね、ケイティ。それにマニュアルをもう一度読み直すべきよ。リマインダースパンキングはメンテナンススパンキングやおやすみスパンキングとは違うって、もう知ってるはずよ。三つとも似たような目的を持っているのは確かよ。すべて強化として機能する。でもそれぞれの種類のスパンキングには独自の目標があるの。」

涙が目に浮かぶのを感じながら、ケイティは首を振った。「もう十分以上に罰せられたんじゃないのか？」

パパは彼女の裸の肩を軽く叩いた。「もちろんそうだ… 今日お前がした悪いことに対してな。もちろん、これからもっと間

違いを犯して、将来さらに罰のスパンキングが必要になるだろうし、私たちは必ずそれを与えるつもりだ。でもたとえ今日の残りの時間を完璧に振る舞っても、お昼寝の後にはメンテナンススパンキングが待っている。」

ママは六本の指を立てた。「それに六回のリマインダースパンキングと六回のおやすみスパンキングね。」

パパは首を振った。「ああ、違うよ、ママ、七回のおやすみスパンキングになるはずだ。彼女はいつも少なくとも一回はもらうし、さらに悪事一つにつきおやすみスパンキングが一回追加されるんだ。」

ケイティは頭がくらくらするのを感じた。「どんな悪事だ？」

ママは指で数えた。「許可なくお小遣いを使ったこと、スパンキングの最中に不従順だったこと、悪い言葉を使ったこと、浴槽で水しぶきをあげたこと、危険な行動をして自分を傷つけそうになったこと… それにまた悪い言葉を使ったこと！」

パパはうなずいた。「おやまあ、再犯か？ それならおやすみスパンキングは八回になるな。」

ケイティは息が詰まるのを感じた。「八回のスパンキング？」

ママはくすくす笑った。「もちろん！ もし一日のうちに同じ違反で二回以上スパンキングされたら、それはより深刻な行動問題ってことだから、追加のスパンキングに値するのよ。」

ケイティは膝ががくがく震えるのを感じた。「つまり… スパンキングされたからって… またスパンキングされるってことか？」

パパはため息をつき、居間のテーブルのメモ帳に手を伸ばした。「彼女のリマインダースパンキングを記録しておく必要があるな。それぞれの罰のスパンキングの前に、従うように思い出させるためのリマインダースパンキングを忘れずに与えたか？」

ママはうめいた。「おやまあ！ それ、忘れてたわ！」

パパはメモ帳に猛烈に書き殴り始めた。「ちぇっ！ それは譲れないものだぞ。それでバスタイムにケイティとそんなに苦労したわけだ。まあいいや、午後のメンテナンススパンキングに三回追加しておくよ。」

ママはメモ帳を軽く叩いた。「違うわよ、パパ、六回追加にならないと。三回のリマインダースパンキングの前にも、リマインダースパンキングをもらうべきだったんだから。」

パパはうなずいた。「ああ、そうだな！ ちょっと待ってくれ、いい子でいるように思い出させるためのリマインダースパンキングをする前に、いい子でいるように思い出させるためのリマインダースパンキングをするべきなのか？」

ママはくすくす笑った。「そんな馬鹿なこと言わないで、パパ！ そんなことしたら、彼女をスパンキングし続けるのをやめられなくなっちゃうじゃない！」

パパはくすくす笑った。「ああ、もちろん！ それは再帰ループになるわけだ。とにかく、ケイティ、私たちに何か質問はあるか？」

ケイティの声は裏返った。「な、なぜ私にこんなことをするんだ？」

ママとパパは優しく微笑み、一緒に答えた。「私たちがあなたを愛しているからよ！」

パパは瞬きした。「ちょっと待ってくれ、繰り返しの悪事で追加されるスパンキングは、リマインダースパンキングのセットも引き起こすのか？」

ママはマニュアルをめくりながら首を振った。「うーん、分からないわ、パパ。それが案内書に載ってると思う？」

パパは学校の紋章が入った、綴じられた書類の束を手に取った。「案内書にはケイティの行動規範と来学期の準備資料だけが入っているだけだ。懲戒マニュアルにその答えがあるはずだ。」

パパが案内書を掲げると、ケイティは最初のページの下部にある自分の署名を認識し、乱暴に父親から奪い取った。「あれだ！ ヘルハイと何か関係がある！」

パパはくすくす笑った。「まあ、もちろんそうだよ、ケイティ。何しろそれはお前の新しい学校なんだからな！」

ママは分厚いマニュアルをパチンと閉じてため息をついた。「そして心配しないで、九月までにあなたが学校に行けるように、懲戒プログラムの詳細を確認し続けるからね… どんなに多くのスパンキングをしなきゃならなくても！」

ケイティは案内書を握りしめ、血のように赤いインクで書かれた自分の乱雑な署名を認識して手の中でねじった。「で、でも… あたしはこの学校に行きたくない！ スパンキングされたくない！」

パパはため息をつき、運命の署名を指で軽く叩いた。「もちろん行きたいんだろ、お嬢ちゃん。何しろお前がサインした

んだから。見ろ？ ここにお前の署名があって契約が成立してる。」

ケイティの顔が真っ赤になると、彼女は分厚い書類の束をきれいに二つに引き裂き、さらに四つに裂いた。「違う！ 行きたくない！ こんな案内書なんてくそくらえ！ こんなバカな学校なんてくそくらえ！ あたしはあたしのボスだ！」

ケイティは深く、激しく息を吸い込んだ。やった！ このバカな契約書を破壊した今、悪夢はついに終わった！

するとママが指を振った。「おやおや、ケイティ、そんな言葉遣いはもう警告したわよね！」

パパは腕を組んだ。「その通りだ。さあ、パパの膝の上に戻るんだ！」

ケイティは指をポキポキ鳴らした。「そうはいくか！ この馬鹿どもが最後に俺の尻を叩いた時だ！ 今度は俺の番だ——」

その時、ひらひらと舞う紙切れが彼女の目に入った。彼女は案内書をきれいに四分の一に引き裂いたにもかかわらず、ケイティは自分の署名が完全に無傷のまま残った紙切れを見つけた。

それからパパがケイティの手首を掴み、ソファへと導いた。

ママは舌打ちをし、きちんと歩いて台所へ向かった。「チッチッ！ 彼女の扱いが終わったら、口を洗うための新しい石鹸を取りに行くわね。」

ケイティは悲鳴をあげ、父親の小さな手に対して全力で引っ張ったが、無駄だった。パパが座ると、彼女を前に引っ張っ

て膝の上に乗せた。「ああ、そうだ！ 罰のスパンキングの間に行儀よくするように思い出させるためのリマインダースパンキングもしなきゃな！」

ママの声が台所から響いた。「そして、悪い言葉を使わないように思い出させるためのリマインダースパンキングの前に、従わないように思い出させるためのリマインダースパンキングも忘れずに！」

パパはスポンジ・ボブのタオルの端を持ち上げ、ケイティのぷっくりとした真っ赤な後ろ姿を露わにした。「ああ、そうだ！ さて、ケイティ、いい子になって、スパンキングの時はじっとしていなさい。なぜなら、そうしなければ…」

パパはケイティの臀部の中央に清々しい平手打ちを決め、しっかりとした安定したスパンキングを始めた。ケイティは激しくもがいたが、パパの小さな左手が彼女の腰のあたりに置かれると、それが金敷のように彼女を押さえつけ、右手は鍛冶屋のハンマーのように、彼女の燃えるような真っ赤な尻を打ちつけた。

ママが新しい石鹸の固まりを置くと、彼女はケイティが引き裂いた案内書の切れ端を拾い上げた。「しまった。これを額に入れたかったのに。ヘルハイが代替品を提供してくれることを願いましょう。とりあえず今はこれを修復してみるわ。」

パパは、すでに敏感になっているケイティのケツにさらに重みを加えて平手打ちをしながらうめいた。「ふん！ いい考えだ。これは時間がかかりそうだ… さて、ケイティ、リマインダーを受けたからには、いい子になって罰のスパンキングを受け入れる準備はできたか？」

ソファのクッションに指を食い込ませながら、ケイティはついに息を吹き返した。「ああっ！ これは狂ってる！ あたしはスパンキングされるには年を取りすぎてる！ あたしが仕切ってるんだ！ あたしだ！ あたし、あたし、あたし、あたし、あたしぃぃぃぃ！」

しかしケイティでさえ自分の声の必死さを聞くことができたが、パパは別の一発で彼女を遮った。「違うよ、お嬢ちゃん。すまないが、大人に仕切らせてもらわないと。」

ケイティが抗議の叫び声をあげると、パパは喧騒の上から聞こえるように声を張り上げた。「追加のスパンキングについてはマニュアルに何て書いてあったっけ？ 今日ケイティが抗議のために懲戒されるのは二度目だよな？」

ママはマニュアルを開き、指で行をたどった。「スパンキングへの抗議は、スパンキングへの抵抗と同じカテゴリーだと思うわ。一般的な反抗、無礼、不服従ね。でもそれは別の事例だから、今すぐ追加の罰のスパンキングを引き起こし、それからリマインダースパンキング、それにおやすみ時の追加のリマインダースパンキングもね。」

パパは娘の臀部を叩き続けながらうめいた。「それに、スパンキング中の不従順に対する追加のリマインダースパンキングもある。今夜、可哀想なケイティが受けるおやすみスパンキングは九回だな。」

「違うわ、今夜は十回のおやすみスパンキングよ。Fワードを使ったことでまた一回稼いだわ。」

「二回使ったから十一回目のスパンキングか？」

「それは懲罰者の裁量に委ねられていると思うわ。」

「それなら、追加のスパンキングは一回だけにしておかないか？ もう彼女の可哀想な小さなお尻が気の毒になってきた。」

「まあ、あなたは彼女にとても優しいのね。聞こえたか、ケイティ? パパは簡単に済ませてあげようとしてるわよ。」

「うぉぉぉぉおおお！」とケイティが答えた。

パパはスパンキングを一時停止した。「おや、最初のリマインダースパンキングはこれくらいで十分だろう。ケイティ、最初の罰のスパンキングの準備はいいか？」

「あああーははははあおお！」

パパは手を高く掲げて顔をほころばせた。「それは『はい』と受け取るよ！」

スパンキング中の反抗に対する罰のスパンキングを決めた後、続いて別のリマインダースパンキング、その後に悪態に対する別の罰のスパンキングを決めた後、ママはパパに、ケイティには両方の違反に対する最後のリマインダースパンキングが必要だと、またそれぞれのリマインダースパンキングの最中に従うように強化するためのリマインダースパンキングも含めて、親切に思い出させた。少なくとも千回のスパンキングを決めた後、パパは顔をしかめて指を曲げ伸ばしした。「ちぇっ！ 頑丈なスパンキング道具が必要だな。毎日これだけのスパンキングをこなすのは、私の可哀想な手にはとても負担がかかる。」

スパンキングがようやく止むと、ケイティは泣き言を言いながら息を切らせた。

そのまさにその時、玄関のベルが陽気に「チリンチリン！
ポーン！」と鳴った。

無表情な女性がドアの窓から顔を覗かせた。「ヴァルキリー配達サービスです。大きな荷物の受取人様のサインが必要です。」

ママがドアを開け、用紙にサインしながら優しい声を出した。「あらまあ！ 荷物が届くとは思ってなかったわ。まさか何が… 入ってるのかしら？」

しかしヴァルキリーの配達員はすでに長く去った後だった。ママは鼻を鳴らし、ドアを閉めた。「ふん！ 昔ながらの牛乳配達員と気軽におしゃべりした良き日々はどうなったのかしら？」

ケイティが新たな涙をこらえて瞬きをすると、分厚い赤い封筒が郵便受けから押し込まれるのが見えた。ママは封筒を拾い上げて顔をほころばせ、ドアを押し開けた。「おお？
戻ってきたの？ もしよかったら、ちょっとお茶でも… いかが？」

ママは空っぽの玄関ポーチを見つめ、それからあらゆる方向を見渡したが、配達員は見つからなかった。彼女は何も見えず、何も聞こえなかった。近くの木々から聞こえる鳥の鳴き声以外には。「… とても奇妙ね？」

パパはケイティの尻を軽く叩いた。「さて、謎の郵便物の中身を見てみよう！ ケイティ、いたずらな小さなお尻をまっすぐ隅っこに歩かせなさい。両手を頭の上に置いて、鼻を壁につけるんだ。」

ケイティが徐々に自分の馬鹿げた指示を理解すると、拳をぎゅっと固く握りしめた。「嫌だ！ 従うもんか！」

パパはため息をつき、足を上げてスリッパの片方を脱いだ。「ちぇっ… まだまだ長い道のりがありそうだな。」

そう言って、パパはスリッパの革の底で猛烈な一撃を加え、それは簡単にケイティの両方の尻の頬を覆った。不運なことに、ケイティにとって、彼女の父親は巨大な足の持ち主だった。

瞬時に、ケイティは重いスリッパと父親の繊細な手の違いを感じ取った。「痛っ！ 痛い、痛い、痛い！ 覚えてろよ！ 必ず仕返ししてやる！ 待ってろよおおおおおお！」

パパは見事な一振りでケイティの反論を遮り、それからスパンキングのテンポを上げた。「さあケイティ、そんな脅迫的な態度は許されない。それで反抗に対する罰のスパンキングがもう一回追加だ。」

ママはノートに正の字を記した。「もう十二回のおやすみスパンキングになったわね… あら、何が届いたの？ 素敵じゃない！」

パパは一時停止し、首を伸ばして箱の中を覗き込み、突然自分の前にある豊満で巨大な裸の臀部を思い出した。「何だい、ママ？ ああ、それはただのリマインダースパンキングだったよ、ケイティ。さて、本番の罰を始めよう。」

パパが本格的にスパンキングを再開すると、ママは木製のパドル、革のストラップ、細い木製のケインを、昔風の女子生徒が鞭打たれているイラストが描かれた小冊子と一緒に並べた。「ヘルハイの伝統的プログラムの主要な三つのス

パンキング器具よ。紋章の彫刻が見えるでしょ？ それに、注文できる特別な器具の素敵な小さなカタログも付いてるわ。むしろの束を準備するセクションもあるのよ。ケイティに自分自身のむしろを切って準備させるべきね。どうやらかなり浄化作用があるみたい。」

ママの言葉を必死に聞き取ろうとしながら、ケイティは頭がくらくらするのを感じた。「何？ いや、いや、いや！ こんなものは必要ない！ あなたたちは… 必要ない… お願い、スパンキングしないで！」

パパはスリッパの裏をケイティの焼け焦げたようにヒリヒリする座面に当てた。「ケイティ、命令に従えないお前は、このスパンキングに値するんだ。」

ママは指を一本立てた。「もちろんリマインダースパンキングもね。」

パパはターゲットの上に優しく円を描くように撫で、ケイティの恐怖に、見えない地獄の炎が戻ってきて鈍い痛みを焼き尽くすのを感じた。彼女は今日の最初のスパンキングと同じくらい鋭く、それぞれの柔らかなタップを感じた。それは今や数千年も前のことのように思えた。パパはケイティの尻を軽く叩き、スリッパを高く掲げた。「そしてもちろん、同じ違反で一日に二回の罰のスパンキングが必要だったことに対する追加のスパンキングも稼いでいる。」

ママはペンを舐めてノートにチェックを入れた。「十三回ね！」

「さあ、じっとしてなさい、お嬢ちゃん、このスリッパでのお仕置きを終わらせないと。」

ケイティが激しく首を振り、叫び声をあげると、髪に巻いたスポンジ・ボブのタオルがほどけ、長い濡れた前髪が激しく舞った。「うぅぅーやあああ！ うわあああーはははははああ あ！」

パパは全力でさらに二十発の平手打ちを加え、一時停止した。「ママ、本当に毎回、毎回、ケイティにすべてのリマインダースパンキングをしなければならないのか？ とても追いきれそうにない。」

ママはため息をつき、マニュアルを調べた。「ケイティをちゃんと準備させるためには、本当は徹底すべきなんだけど…でもリマインダースパンキングは裁量に委ねられていると思うわ。罰のスパンキングだけが、打撃回数の最低要件があるのよ。」

「おお、ありがたい。それなら、ケイティ…」

パパは最も確かな一撃を、ケイティの左下部の臀部を狙って決めた。「… スパンキングの間はじっとしていることを覚えなさい…」

二発目は右下の臀部を狙った。「… スパンキングの間は言い返さないことを覚えなさい…」

三発目は右下の臀部のまったく同じ場所に決まった。「… ママやパパを脅さないことを覚えなさい…」

四発目は今度は左下の臀部に決まった。「… 悪い言葉を使わないことを覚えなさい…」

五発目、最後の一撃はケイティの臀部の中央に厚いパシッという音とともに決まった。「… そして、いい子になって、言

われたらタイムアウトに行くことを覚えなさい。さて、キティちゃん、いい子になって隅っこに行くのかい？」

ケイティは胸を上下させ、息を飲み込みながら、すすり泣きの合間に答えた。「は、はいいい！ わ、わかったあああ！」

彼女が最後に発した音は、ママが石鹸の固まりをケイティの口に押し込む前の驚きのきゃあという声だった。瞬時に、それは彼女の舌の上に押し付けられ、しっかりとくっついた。

パパはケイティの尻を軽く叩き、彼女を立たせた。「いい子だ。さあ、タイムアウトに行きなさい。」

彼女は胴体を包む小さなタオルがほどけ始めるのを感じ、すぐに直そうとしたが、ママがそれを摘まんで引きはがした。まるで手品師がテーブルクロスを引くように。「あらあら！ もう十分に乾いたと思うわよ。あのいたずらなお尻を丸出しにしましょう。もし赤く叩かれた小さなお尻を晒しているのが馬鹿げていると感じるなら、今日のあなたの行動がどれほど馬鹿げていたかを思い出せばいいわ。」

ケイティは冷たい空気を感じて硬直したが、最後のスパンキングの痛みがまだ頭に新しいうちに、彼女は隅っこに走ろうとした。しかし、残る痛みを呼び覚まさずに普通に動くことは不可能だと気づいた。彼女の臀筋はとても痛くて敏感で、彼女は一歩ごとに跳ねたり、スキップしたり、引きずったりするような動きを余儀なくされた。

ケイティが鼻を壁に押し付けた瞬間、封筒が破かれる音が聞こえ、続いてママの喜びの悲鳴が聞こえた。「これを見て！ 新しい案内書よ… ケイティのサイン付き！」

「うーん？ ケイティがこれにサインする時間がいつあったんだ？」

ケイティは硬直し、それから肩越しに振り返って覗き込んだ。鼻を壁から離さないように注意しながら。心の中で彼女は叫んだ。「違う、そんなはずはない！」

ママはくすくす笑った。「どうやら複数の写しをファイルしているみたいね。よかった！ ケイティがまた可愛らしい癇癪を起こした時に備えて、これを冷蔵庫に貼っておくわ。」

「いい考えだ。それからカタログを調べよう。すべての器具を少なくとも一つずつ注文すべきだ！」

ケイティは肩をすくめ、壁を見つめた。覗き見が不服従と見なされるかどうか知りたくなかった。立っている間、彼女は顎を固定し、鼻から深く息を吸って石鹸を唾液で濡らさないようにしようとした… しかしまるで見えない指が石鹸を押し下げ、優しく前後に、そして円を描くようにこすっているかのようだった。すぐに、泡立ったよだれが石鹸の端から滴り始めた。ケイティはほとんどむせたが、それからはっきりと考え始めた。

もちろん、ヘルハイからの契約書がこれと何か関係しているに違いない。彼女はそれにサインした覚えはなかったが、最初の写しは破壊した。今、愚か者たちが最後の残りの写しを送ってきたのだから、それを引き裂くだけで、その力から解放されるはずだ。

ケイティは微笑んだが、石鹸の厚い膜で吐き気を催しそうになった。ケイティは額を壁に押し付け、よだれをカーペットに自由に垂らした。もちろん、彼女はエリートゲーマーガールだ。強くてパワフルな女性だ。そしてこれは単純なパズル

だ。あとはそれを解くだけで、再び自由になれる… そしてその後は… ママとパパのスパンキングの番だ。ケイティは石鹸の固まりを噛みしめ、怒りに燃えた。「おお、ふふ… 一生に一度のスパンキングだ！」

肩越しに覗き込むと、ケイティは両親がカタログに完全に夢中になっているのを見た。彼女は彼らの死角にいた。慎重に、ケイティは隅っこから這い出し、キッチンに向かってそっと忍び足で歩いた。動くたびに臀部の頬からの抗議の悲鳴を無視しながら。

彼女は冷蔵庫に掛けられた案内書を見た。まるで彼女を迎えるかのように待っているかのようだった。石鹸の泡のおかげで、ケイティは口から泡を吹いているように見えながら文書に近づいた。すると鋭いホーという音が聞こえた。ケイティは固まり、かかとでくるりと回転し、巨大な手で胸と前を隠した。しかし誰もいなかった。隣の部屋で両親が和やかに話しているのがまだ聞こえた。目の端で、何かが窓を通り過ぎるのを見て、ケイティは安堵の口笛を吹いた。「ただのバカな鳥だ」と彼女は思った。

冷蔵庫から案内書を奪い取ると、ケイティは一気に二つに引き裂こうとしたが、分厚い書類の束は抵抗した。ケイティは二度力を込めた後、深く息を吸い込み、両手でねじってゆっくりと二つに裂いた。慎重に、ケイティは自分の署名「ケイティ・『ブルキー』・ボルカー」がまさに真ん中で裂かれたことを完全に確認した。歓喜にむせて笑いながら、ケイティはゴミ箱の引き出しを押し開け、引き裂かれた案内書の残骸を放り投げた。それから、彼女は封をされた白い封筒に気づき、それを調べた。「ヘブンハイ：地上に平和を、人々に善意を！」

嘲るように鼻を鳴らし、ケイティは封筒をゴミ箱に戻したが、閉めた時、紙切れが床にひらりと舞い落ちた。ケイティはかがんでそれを拾い上げた… そしてそれは、彼女の署名全体が完全に無傷で残った紙切れであることに気づいた。ケイティは瞬きもしなかった。

それから、震える手で、彼女は素早くその紙切れを二つに引き裂き、捨てた。もちろん、それは最初の案内書の写しの一片に過ぎなかった。今や両方ともなくなった！ しかしケイティが引き出しを開けると、案内書が彼女を迎えた。端はくしゃくしゃで破れていたが、完全に無傷だった… 彼女の署名も含めて。

案内書を奪い取ると、ケイティは最初のページを残りの文書から引きはがし、簡単に半分に裂いた。しかし破片を持ち上げると、裂け目が中心から大きく外れ、彼女の署名を外していた。ページの残りの半分を落とし、ケイティは署名を再び裂こうとねじったが、紙は耐えた。ケイティは石鹸の固まりに深く歯を立て、全力を尽くしたが、それに傷をつけることすらできなかった。怒りでシューッと息を吐き、ケイティはハサミを掴み、全身を震わせながら、無傷の署名が入った最後の紙切れを切ろうとした。二度、紙はハサミの掴みから滑り落ちたが、ついに端を捉えて切り始めた。汗がケイティの眉から滴り落ち、彼女はハサミを強く握りしめたため、金属の刃が負荷で軋み始めた。

ママの声が鞭のように背後から炸裂した。「ケイティ・ブルケ・ボルカー！ いったい何をしているの——」

彼女が飛び上がると、ケイティは石鹸の固まりをきれいに二つに噛み砕き、ほとんど半分を飲み込みそうになり、ハサミの刃の一本が折れて空中に飛び散った。

ママは悲鳴をあげた。「——私のハサミで？ おやおや、ケイティ、恥ずかしい！ 恥ずかしい、恥ずかしい、恥ずかしい。目を潰すところだったわ！ これは間違いなくまたスパンキングに値するわね。ママのものをおもちゃにしちゃ——」

ママがケイティの手首を掴んだ時、彼女は引き裂かれた案内書の残骸を見つけた。「あなた、行動規範を引き裂いたの… また？」

パパがキッチンのドアに現れた。「彼女が何をまたしたって？ ケイティ！ もしお前の学校の校長が知ったらどうする？ お前がヘリオン（地獄の生徒）になりたいと思ってないと思うかもしれないぞ！」

ケイティはむせながら、必死に引き裂かれた案内書の残骸を指さした。「だ、だってー あたしゃヘリオンになりたくなんだよ！」 [But–I don't wanna' be a Hellion!]

パパは袖をまくり上げた。「もうたくさんだ、ケイティ。どうやらお前に厳しく接しなければならないようだ。」

ママはケイティをキッチンから連れ出しながら手を挙げた。「ちょっと待って！ あなたの血圧を忘れないで。それに、ケイティに一発食らわせるのは私の番だと思うわ。」

パパは額を拭った。「よかろう。ケイティの就寝時間まで待つとするよ。その頃には冷静になっているといいが。覚えておいてくれ、ママ、怒りに任せて愛するケイティを罰してはいけない。」

「ええ、ええ、必ずハサミの罰をする前に、怒りのすべてをケイティのいたずらな小さなお尻に叩き込むからね。」

パパはもう一方の袖もまくり上げて顔をほころばせた。「全くその通りだ。それから、案内書をまた引き裂いたことに対する罰もある… つまり同じ違反行為を繰り返したことでまたスパンキングだ。彼女は今何回のおやすみスパンキングになっている？」

ママはソファに座り、悲鳴をあげ抗議する娘を簡単に母親の膝の上に引きずり上げながら嘲った。「ある程度を超えたら、タイマーを数時間にセットして連続してスパンキングするだけでいいと思うわ。マニュアルの後ろに『伝統的スパンキングに代わる創造的代替案』っていうセクションがあるのよ。」

「おやおや！ なんて進歩的だ！」

ママが本格的にケイティをスパンキングし始めると、パパは懲戒マニュアルを手に取り、座って読み始めた。彼がパイプを抜き出すと、満足げな表情を浮かべていた。「知ってるか、何年もこんなにリラックスした気分はなかったよ。スパンキングをカタルシスの一種とするこの理論全体には、何かがあるに違いない。」

ケイティは叫び声をあげ、泡でむせながら舌を出したが、今や石鹸の残骸は接着剤のように彼女の舌に張り付いていた。

ママは長い手でのスパンキングを行い、それからパパにお気に入りのヘアブラシを持ってくるように頼んだ。

パパは木製のパドルを掲げた。「本当にこれを試してみたくないのか？」

ママは首を振った。「罰のスパンキングに使う前に、それらで練習したいのよ。」

「練習？ そんなのどうやって練習するんだ？」

「もちろん、ケイティで練習するわ！」

ケイティはうめいた。今や石鹸の固まりは彼女の口の中で白い泡の水たまりに溶けていた。つまり、彼女はようやく半ばまともに話せるようになったのだ。「やああああ… お、お願い！ はあ… ふう… やああああ！」

パパはマニュアルのあるページを開いた。「ちょっと待ってくれ、ここにはケイティを学校の懲戒に備えさせることは別のカテゴリーに分類されると書いてある… 懲戒スパンキングだ。」

ママは唇をとがらせた。「罰のスパンキングのこと？」

「いやいや、懲戒スパンキングだ。もちろん重複はあるが、両者の間には微妙な区別がある。」

「それは？」

「罰のスパンキングは不適切な行動の特定の事例に関連しているのに対し、懲戒スパンキングは良い行動を促すための適切な構造を課すことに関するものだ。例えば、すべてのメンテナンススパンキングは懲戒スパンキングのカテゴリーに分類される。それで思い出したんだが… ケイティ、お嬢ちゃん。もし望むなら、メンテナンススパンキングを私の手でする代わりに、これらの器具の一つを使ってもいいぞ。それがいいか？」

ケイティは唾を吐き、怒りに満ちていた。「ぷはっ！ 嫌だ！ もちろんそんなの嫌だ！ あんたはバカなのか？」

ママはヘアブラシで猛烈な一撃を決めた。「もう一度言ってみなさい、ケイティ、もっと礼儀正しくね。」

「ああっ！ わかった、わかった！ お願いだからやめてくれ！」

パパは首を振った。「本当か、ケイティ？ 遅かれ早かれパドル、ストラップ、ケインを経験しなければならないんだぞ。さもなければ学校でそれらに服従する準備ができないだろう。本当にお前の定期メンテナンススパンキングを、これらの器具それぞれを使ったトレーニングセッションに置き換えるべきだと思う。最初はもっと厳しいかもしれないが、後で感謝するだろう。」

ケイティはソファのクッションに額を叩きつけた。「もう嫌だって言っただろ！ 嫌だと言ったら嫌なんだ！」

パパはため息をついた。「よし… それなら、手で普通のメンテナンススパンキングをしてやる… それから三つの器具すべてを使ったトレーニングセッションを続ける。毎日… 毎日だ。追加の懲戒を求めるなんて、お前はとても勇敢だな、ケイティ。とても誇りに思うよ！」

ケイティの目が見開かれ、彼女はママの膝の上で跳ね回った。「何？ 違う、違う、違う！ それはあたしの望みじゃない！ あたしは——」

ママはヘアブラシのさらに猛烈な一撃でケイティの言葉を遮った。「馬鹿なこと言わないで、ケイティ。もちろんあなた

はパパを誇りに思わせたいんでしょ。なぜなら心の奥底で、それがあなたに必要なものだと分かっているからよ！」

長く震えるような嘆きの声とともに、ケイティは頭を後ろに倒し、背中を反らし、足を蹴り上げて尻を守ろうとしたが、すぐに引き離すのを思い出した。「ごめん！ ごめんなさい！」

ママはヘアブラシでケイティの尻を軽く叩いた。「あらあら！ 危なかったわね！ 今回は尻を守らないことの重要性を強調する時間を取って正解だったわ。どうやらこのスパンキングはもうすでにあなたの行動に良い、穏やかな影響を与えているみたいね。あなたはまたいい子になりつつあるわ。」

パパはダッフルバッグを手に取り、おしゃぶりを取り出した。「そう言えば… 見ろよ、ケイティ、お前がまだ赤ん坊の頃のお気に入りの古いダミーだよ！」

ケイティが懇願しようとすると、パパはおしゃぶりを彼女の口にポンと入れ、彼女が吐き出そうとすると、以前と同じ地獄の力がそれを所定の位置に固定しているのを感じた。

パパはケイティの頭のてっぺんを軽く叩き、乱れた髪を撫でた。「さて、ちゃんと罰せられたからには、約束通り、ようやく白紙の状態からやり直せるな。さあ、服を着せてあげよう。」

ケイティはバッグの中身を見て臀筋を引き締めた。ゴム製のよだれかけ、フリルのついたピンクのボンネット、そしてピンクのウールで手編みされたミトンと靴下のセットだ。ケイティは「ああ、くそっ！」と言おうとしたが、彼女のお尻にとっては非常に幸運なことに、彼女はおしゃぶりを大声で吸うことしかできなかった。

暖炉の上のハンディカメラをちらりと見て、ケイティはママが膝の上から持ち上げる時に素早く前を隠した。ケイティはひねって逃げようとしたが、ママは彼女を膝の上に座らせ直し、ケイティの頭にボンネットを結び、パパがよだれかけを取り付けた。その前面には漫画のような文字が飾られていた。「おっと！ 汚しちゃった！」

ケイティは床に降ろされると首を振り、仰向けに寝かされ、靴下とミトンも強制的に付けられた。パパはダッフルバッグを覗き込んでしかめ面をした。「ママ… 本当にケイティにおむつをまた履かせるつもりなのか？ 彼女が赤ん坊の頃のをいくつか見つけたんだが… でも、もう彼女に合う大きさではないと思う。」

ママはため息をついた。「そうね、あなたの言う通りだわ。でもこの練習の要点は、象徴的なリセットとして機能することなのよ。こんなに大きな赤ちゃんに合う大きさのおむつがないのが残念ね。」

突然、玄関のベルが鳴った。パパが応対すると、まったく同じヴァルキリーの配達員が、おむつをした漫画のキリンが描かれた六つの段ボール箱の台車を押して立っていた。「えっと… ケイティ・ザ・ブルキー 1337 ゲーマーガール様宛の大人用おむつの一年分です… ここにサインをお願いします？」

パパはクリップボードを調べた。「何だって？ 誰からだ？」

配達員は肩をすくめた。「えっと、敬愛するファンから、とだけ書いてあります。それに、こっちに小さな荷物もあります。これは… あなたの旧友、リル・ミス・スパンキー・パンツから、ってサインがあります。」

パパは振り返ってママを見た。「見知らぬ人からの奇妙な荷物？ なぜ誰かがケイティに大人用おむつを送るんだ？」

ケイティは緊張し、暖炉の上のハンディカメラをちらりと見た。確かに、赤い録画ランプはまだ点灯しており、WiFi接続が完全に機能していることを示す青いランプも点灯していた。

ママはくすくす笑った。「どうして、明らかじゃないの？ ケイティのファンが何かの内輪ネタとしてプレゼントを送っているんだろうね。インターネットミームに関係があるんだと思うわ。最高のものはいつもランダムなんだから！ そうでしょ、ケイティ？」

ケイティは飲み込んでからうなずき、おしゃぶりの向こうでつぶやいた。「うん。」

配達員がようやくケイティを見つけた。「へえ。インターネットのやつか… まあいいや、お邪魔しました。」

女性が振り返ると、フクロウが近くの木から急降下してきて、彼女の頭の上に止まった。女性はもがきながらクリップボードを落とした。「ああっ！ 何だよ？ どけよ！」

ケイティはフクロウが赤い封筒を落とし、それがひらりと舞い去るのを見た。配達員はうめいた。「ううっ… こんなの、給料に見合わないよ…」

それから女性は、まだ床にうずくまっているケイティをちらりと見た。「ケイティ・ザ・ブルキー、ね… 君のプロフィールを検索してみるよ。」

パパはくすくす笑った。「おや、君もゲーマーなのか？ 警告しておくが、ケイティはとても悪い子だったから、ゲームの権

利はすべて剥奪されているんだ。インターネットを再び使えるようになるまで、数ヶ月はかかるかもしれない。」

ママはウインクし、ケイティをうつ伏せに転がして彼女の真っ赤な臀部を露わにし、遊び心をもって軽く叩いた。「まさに…彼女は当分の間、ビデオゲームをするために座るのが難しくなるってわけよ。」

ケイティはおしゃぶりを噛みしめ、肩越しに振り返って顔を赤らめた。「おねがーい！」

配達員は瞬きした。「そうだな… もしかしたら、俺の仕事もそんなに悪くないかもしれないな。じゃあな、皆さん！」

パパがドアを閉めた後、彼は地面に落ちている赤い封筒に気づいた。「うーん？ 配達の娘が落としたのか… おお！ これが何か分かったかもしれない…」

パパは赤い封筒を開け、別の案内書を取り出した。「ママ！ケイティが私たちにちょっとしたドッキリを仕掛けたんだと思うよ！」

ケイティの瞳孔は針の先のように縮み、血のように赤いインクで書かれたページ下部の自分の署名を認識した。

ママは鼻を鳴らした。「まあ、私に言わせれば、あまりいいドッキリじゃなかったわね。でももうそれでケイティをスパンキングしたんだから、残りはおむつを履かせてお昼寝させるだけね。」

パパはおむつのパックを取り出し、軽く叩いた。

ケイティはおむつという言葉に緊張した。四つん這いになり、猫のように飛びかかって戦う準備をした。しかし、その恐

ろしい契約書を見ると、世界全体が彼女の周りから消え去ったように見えた。彼女の輝く赤い署名の燃えるようなイメージ以外は。

それから、涙が目に浮かびながら、ケイティはソファ全体をひっくり返し、うつ伏せに寝転がって足を蹴り、拳を叩きつけた。「やだああ！ いやだ！ あたしゃ大きい子だ！」[No! No wanna'! I'm a big girl!]

力強い蹴りで、ケイティは居間のテーブルを部屋の向こう側に飛ばし、それから仰向けに寝返りを打って、手足を激しくバタバタさせた。

ママはケイティの足首を掴み、娘の脚をおむつ交換のポジションに持ち上げながら首を振った。「ダメダメ！ そんなのダメ！ 癇癪を起こすなんて？ あなたの年で？」

パパはケイティにおむつを付け始めながら顔をしかめた。「えっと… ママ、本当にケイティにこれを使わせるつもりなのか？」

ママは嘲った。「おやまあ、そんなわけないでしょ！ … 彼女がちゃんと振る舞えばね。一度ケイティのトイレトレーニングは済ませたわ。二度とごめんよ！ … だからあなたの娘がちゃんと振る舞うことを学ぶことを願っておくことね。さもないと、あなたの番だから。」

パパはおむつのテープを貼り終え、ケイティの尻を軽く叩き、彼女を抱え上げて腕に抱いた。「そんな必要はないと思うよ。一度ケイティがスパンキングを受け入れることを学べば、幼児服に昇格させられる。本では週に一度再評価し、進歩があればより成熟した服に進めることを推奨している。」

「後退しないといいけどね。こんな格好で学校に送り出すのは嫌だわ… 私たちの可愛い赤ちゃんにおむつを履かせるのを手伝ってくれてありがとう！」

「カメラを取ってくれないか、愛しい人？ ケイティを初めてのお昼寝に連れて行くんだ。この瞬間を大切にしたい。」

ママがカメラを手に取ると、彼女はリル・ミス・スパンキー・パンツからの小さな荷物に気づいた。「… そう言えば、この小さな箱には何が入ってるの？」

「見てみなよ！ リル・ミス・スパンキー・パンツが誰であれ、彼女はブルキーのケイティの大ファンに違いない！」

ママはそれを開けた。「ベビーモニター？ … そう言えば、あなたと私がまたデートに出かけたいなら、ケイティを見てくれるベビーシッターを雇わないといけないわね。」

ケイティは箱の中身を見て顔を曇らせた。ベビーモニターは漫画のような顔をした小さなロボットに似ており、厳しい権威の可愛い真似で小さな指を彼女に向けていた。

パパは鼻歌を歌った。「ケイティのクラスに、かつてベビーシッターの仕事をしていた良い子がいなかったか？ ケイティがとても好きだと言っていたあの子だ。」

「ディベートチームの子？ にきび面で矯正器具をつけてた子？」

「そう！ その子だ！ まだ彼女の両親の電話番号を持っていると思う。」パパはケイティをベビーベッドに寝かせた。それは彼女のフルサイズのベッドの真ん前に設置されていた。ベビーベッドはとても狭く、ケイティは膝を胸に引き寄せることを余儀なくされた。

ママは娘を寝室に運びながら、ケイティの鼻にキスをした。「さて、ケイティ、初日は大変だったわね。でも私たちの権威を尊重することについては、まだたくさん学ぶべきことがあるわ。だから少し休みなさい。」

パパは漫画調のベビーモニターをケイティのドレッサーの上に置き、権威の真似をして指を振った。「そして、お昼寝の時間にこっそり抜け出すのはダメだぞ！」

ベビーベッドの端を握りしめ、ケイティはまつげに張り付いた涙を拭い、かすかに自分の周囲に気づいた。パパはベビーモニターを作動させるのを忘れていた。彼女のゲーミングセットアップをちらりと見ると、すべてがそのまま残されていることに気づいた。ケイティが立ち上がろうとすると、ほとんど滑った。ピンクの靴下は滑りやすく、ミトンのせいで何かを掴むのが難しかった。

あざと水ぶくれだらけの臀部からのズキズキする脈動を無視して、ケイティはベビーベッドから這い出し、パソコンに向かって這った。それから突然、這う必要はないことを思い出し、立ち上がってミトンを掴もうとした。しかしミトンはきつく結ばれすぎていた。

ついに、彼女は苛立ちの口笛を吹き、マウスを掴んだ。ゆっくりと、ケイティはパスワードを入力し始めたが、画面に貼られた付箋を破り取るために一時停止した。そこにはこう書いてあった：「覚えておけ、ケイティ：ビデオゲームはダメ！ — 愛を込めて、パパより。」

指なし手袋のおかげで、ケイティはデスクトップのロックを解除するのに三度試行錯誤が必要だった。彼女がライブストリームを表示するとすぐに… ケイティは画面に自分の顔を

見た。それはまだライブ配信されており、何百ものコメントがチャットボックスを飛び交っていた。ケイティは放送をシャットダウンするためにストリーミングソフトウェアを探したが、一つのコメントが目に留まった。

「やったぞ、ケイティ！ BANされないように守ったんだ！」

ケイティは瞬きした。それから彼女はチャンネル登録者数と同時視聴者数に気づいた。今朝、彼女は同時視聴者数1000人に到達するのに苦労していた。目をこすりながら、ケイティは今や「視聴中」に10万人以上がリストされているのを見た。

さらに多くのコメントが目に留まった。「何かが映りそうになるたびに、カメラアングルを切り替え続けたよ！」

「パトロンだ！ Patreonがお前をシャットダウンする前に、全部をアーカイブした！」

それからケイティは奇妙なユーザー名を見つけた。リルミススパンキーパンツと書かれていた：「ケイティ・ブルケ・ボルカー！ お嬢さん、ベッドから出て何をしているの？」

怒りに燃えて、ケイティはチャットをクリックし、卑猥な脅しをタイプしようとした。しかし彼女がウィンドウをクリックした瞬間、ポップアップが表示された。「ペアレンタルコントロール：この操作は許可されていません！ ロックを解除するにはパスワードを入力してください。」

ケイティの目が見開かれ、彼女は慌ててパソコンのタスク機能を開こうとした。すべてがロックされていた。もちろん！ もしパパが他のものには一切触れずにペアレンタルコントロールをインストールしたなら、それはすべてが彼女が残したま

まの状態で動作し続けることを意味した。ケイティは自分の部屋を見渡し、自分で設置したすべてのカメラを見た。それらは邪悪な目のように、あらゆる角度から彼女を見ていた。パノプティコン、そしてすべては彼女自身の設計によるものだった。ケイティはピンクのミトンで机に爪を立てた。パソコンのプラグを抜くことができれば…

すると、寝室のドアがゆっくりと開き、パパが現れ、その後ろにママがいた。「シーッ！ 私ったらばかね。ベビーモニターを設定するのを忘れてたよ。起こさないように静かにしよう… ケイティ？」

それからママの目が細くなった。「ケイティ・ブルケ・ボルカー！ お嬢さん、ベッドから出て何をしているの？」

ケイティはピンクのミトンを前に振った。それからすべてが起こり始め、彼女にはそれを止めるためにできることは何もなかった。

ケイティが気づく前に、彼女はママとパパの膝の上にうつ伏せに横たわり、おむつを引きはがされて、後ろのカメラたちに裸の尻を晒されるのを感じた。

ケイティの窓の外で、アメリカワシミミズクが木の枝に止まり、羽を膨らませて一部始終を見守っていた。「うーむ… あの別の魔法学校の手紙を配達していた時には、こんなことが起こるのは見たことがないな」とフクロウは考えた。

フクロウが黄色い目を細めると、若い女性が仰向けに寝かされる様子を完全に捉えた。それから彼女の足首が高く持

ち上げられ、両親がスリッパとヘアブラシの両方を使って、進行中のスパンキングの第二ラウンドを開始した。

フクロウはくちばしを鳴らした。「でも私に言わせれば… これは間違いなく改善だな！」

[パート3 終]

ブルキーのケイティ、学校に叩き込まれる
:

パート1: 第一印象

ブルキーのケイティがキャンパスに到着すると、混雑していたヘルハイの学生たちは畏怖の念で道を開けた。彼女はおしゃれに遅刻して到着したのだ。彼女がエントランスホールをどしんどしんと歩くたびに、タバコの煙の跡を残していった。重いアーミーブーツは、太ももまでのストッキングと鋭いコントラストをなしていた。だらしなく伸びた黒い髪は乱れ、風化した赤いデニムのショートパンツは彼女の筋肉質な臀部を辛うじて包み込んでいた。部屋中の視線が一瞬にして彼女のだぶだぶのパンクロックTシャツに釘付けになった。そこには誇らしげに「Fuck You！」と書かれていた。

眼鏡をかけた少女が鹿のように固まったが、ケイティはまるで接近する列車のように彼女を平然と撥ね飛ばした。「おい、どこ見て歩いてんだ、シマリス。」

ケイティは背の低いその学生をじっくり見て瞬きをした。どういうわけか、彼女のスカートは後ろでまくり上げられ、白いパンティーがちらりと見えていた。ケイティは気軽にその学生の鼻をはじいた。「なんだそれ？ なんかのファッション宣言か？ 先生たちにそんな格好見られたらヤバいぞ。」

眼鏡の学生は自分のスカートの後ろを一瞥し、顔を赤らめた。「で、でも… 先生にそうしろって言われたんです。」

すべての学生が固まった。インターホンがカチッと入り、天井のあらゆる隅を監視するテレビ画面の一つに厳しい男性

の顔が現れた。「学生諸君、伝統的な寮の選別式は最終時限の直後に行われることを知っておけ。出席は必須だ。また、ケイティ・ブルケ・ボルカー、学生番号1-6-1-8、直ちに9B階の主任苦悩官のオフィスに報告せよ！」

ケイティは胃が痛むのを感じた。「うっ。ここにも堅苦しい連中がいるのか」と考えた。

しかし多くの視線を浴びて、ケイティは冷静を装うことにした。何しろ、これは彼女の評判を築く最初のチャンスだった。「いいぜ、どうやら俺は王族のような歓迎を受けてるみたいだな。じゃあな、オタクども！」

ケイティは精巧に彫刻された両開きの木製のドアの下をくぐった。そこにはケイティが読む気もないラテン語のモットーが刻まれていた。

三角眼鏡をかけた小さな老婦人がアンティークのタイプライターに座っていた。彼女の頭上には活版印刷のポスターが掛かっていた。「確かに、地獄への最も安全な道は段階的なものである。 —スクリューテープ」

彼女の机の上のプレートには「ミノス夫人、主任秘書」と書かれていた。

ケイティは秘書の机の上に腰かけた。「主任指導官ってやつはどこだ？ あいつが俺に会いたいんだろ。」

ミノス夫人は、太ったヒキガエルが同じく太ったハエをじっと見るように瞬きし、細長く尖った指の爪で部屋の反対側の孤独なドアを指さした。「主任苦悩官のことなら、ベリアル先生を探しているのね。『主任苦悩官』と書かれたドアよ。見間違

えることはないわ… たとえあなたがどんなに見たくなくても。」

ケイティは機知に富んだ反論を考えようとしたが、何も浮かばず、ぶつぶつ言いながら歩き去った。ケイティは乱暴に主任苦悩官のドアを押し開けた。「で？ 何の用だ？」

彼女はベリアル先生が机の後ろに座っているのを見つけた。彼のすべてが鋭かった。スーツから、きちんと整えられた先の尖ったあごひげから、光沢のある黒い髪の未亡人頂点まで。しかし何よりも鋭かったのは彼の目だった。「ボルカー嬢だろう。お入りなさい。ドアを閉めて。静かに。」

ケイティは後ろでドアをバタンと閉めた。

まばたきもせずに、ベリアル先生は机の上のボタンを押し、インターホンの赤いランプが点滅し始めた。「… それは静かではなかったな。クラスメートや先生方を騒がせたいのか？」

ケイティは腕を組み、最も得意げでリラックスした笑顔を浮かべた。「誰が聞いても構わない。ブルキーのケイティが初日に事務所行きを稼いだって、みんなに知られるのはいいことだ。俺はここで伝説になるんだ。」

「ケイティ・ブルケ・ボルカー嬢、君は懲戒審問のために私のオフィスに召喚された。ドアの閉め方はヘルハイでは許されないが、その件についてはすぐに取り上げることにしよう…」

招待を待たずに、ケイティは彼の向かいの安物のオフィスチェアに座った。「おお、どうするつもりだ？ 俺の可哀想な小さなお尻を叩くのか？ 泣くまで？」

ベリアル先生とブルキーのケイティの声が学校のインターホンシステムに響き渡ると、ヘルハイの全教員が講義の途中で手を止め、集まった学生たちは進行中の会話を聞き取ろうと顔を上げた。

すると、古いテレビが火花を散らし始め、画面がパチパチと音を立てながらベリアル先生のオフィスの隠しカメラ映像を読み込んだ。画面の下部には現在の日付と時刻、そして「セキュリティ映像。法的および歴史的目的のために、アーカイブは要求に応じて利用可能」という文字が表示された。

自分のオフィスに設置されたあらゆる角度をカバーする隠しカメラを素早く一瞥して、ベリアル先生は小さな黒いポケットブックを取り出した。「ところで、校則を読む時間はあったか？ 君の両親も写しを受け取ったはずだ。彼らはヘルハイの懲戒体制にとても感激していると電話してきた。」

ケイティは喉が締め付けられるのを感じた。数週間にわたる毎日のメンテナンススパンキングと、両親に赤ん坊のように扱われた後、ケイティはついに「公の場に出しても大丈夫」と判断され、自分の服を選ぶ権利さえ与えられていた。ケイティはヘルハイが体罰を用いることを知っており、その差し迫った脅威を恐れるようにさえなっていた。しかし彼女の一部は、期待に反して、両親の家を出て学校の環境に戻れば、何とかやり過ごせるのではないかと密かに望んでいた。「うーん？ ああ、ざっと目を通したよ。でも、ここは地獄なんだから、罰を与えるのは俺の方だろうって思ったんだ。」

ベリアル先生は微笑み、首を振った。「違う、ボルカー嬢。ヘルハイではそういう仕組みではない。罰を与えられるのは階

層の頂点に立つ者だけだ。そして階層を上がるにはルールに従うことによってのみ可能だ。」

「でも、あんたらはルールとかそういうのが嫌いなんじゃなかったのか？ あんたらのパンフレットにそう書いてあったぞ。」

「どうやら君は教育哲学のセクションをあまり注意深く読んでいないようだ。我々はルールを嫌っているわけではない。不合理なルールを嫌っているのだ。我々は道徳律という幻想を嫌っている。分かるか、大抵の学校は、いわゆる『善』と『悪』の間に単純で白黒はっきりした区別があるという考えを育んでいる。我々はそんなおとぎ話のような考え方を拒絶する。ヘルハイのルールは単に合理的なのだ。我々のルールシステムは、強者が頂点に上り詰め、弱者をかかとにしっかりと押し付けることを可能にする。我々が王や女王を『支配者』と呼ぶのは、まさに彼らがこの権力システムに耐え、強制するからだ。階層を上ることは君の望みか？」

ケイティはこの新しい情報を咀嚼した。彼女は道徳哲学者というわけではなかったが、女王になって弱者をかかとに踏みつけるという部分には確かな魅力があった。「うーん、ルールに従うってことは、ここらのオタクどもをスパンキングできるってことか？ それなら、ああ、やれるよ。」

「よし。つまり我々は合意したと？ 君はルールを厳守する、と。」

ケイティは足を机の上に上げ、アーミーブーツが泥を滴らせた。「ああ、そうだ。それで階段を上がれるなら、あんたが何をしてこようと、俺は耐えてみせるさ、サージェント・ペッパー。」

ベリアル先生のあごひげは黒い煙のように膨らんだかと思うと、彼は深く息を吸い込んだ。「… それなら次の質問だ。なぜ制服を着ていない？」

ケイティは鼻を鳴らした。「… え？ だって、バカみたいに見えたくないからだよ？」

「完全な制服の着用は義務だ。それはルールの一部だ。君が従うことに同意したばかりのルールだ。そしてそれらのルールに従わないことは、懲戒処分の対象となる。つまりスパンキングだ。具体的には、君が着ている間違った服の一点ごとに一回のスパンキングだ。」

ケイティは自分の服装を見下ろした。考えてみれば、両親は彼女が制服を買いに行く必要があると何か言っていたような気がした。ケイティはうめいた。「はあ、わかったよ。さっさと済ませよう。」

ベリアル先生はケイティのアーミーブーツから滴る泥を一瞥した。「つまり、君はシャツ、ショートパンツ、そして靴を履いているが、それらは要求される制服の一部ではない。ストッキングは適切な長さのスカートと組み合わせれば認められるだろう。少なくともブラとパンティーは学校の基準に合っているか？」

ケイティは机の上にある彼女の足元の小さな革製の本をちらりと見た。「えっと…」

足を下ろし、ケイティはその本をざっとめくり、自分のものとまったく同じような質素な下着を着た若い女性のイラストを見つけた。「… じゃあ、もし合ってなかったとしても、誰にも見えないものを制服の一部に含めるのは公平なのか？」

「それはヘルハイのルールの一部だ。我々にはそれを書いた理由がある。ルールがなければ無秩序になる。それに、君の正式な学校のブラウスは十分に薄いので、ほとんどの人は透けてブラが見えるだろう。そしてスカートが後ろでまくり上がっていれば、パンティーも見えるだろう。」

「でもそれって、目的を果たしてないんじゃないか？ 学校制服のポイントって、慎み深くするとかそういうことじゃないのか？ つまり、男どもをあまり興奮させないとか？」

「我々は慎み深さなど気にしない。我々が気にするのは画一性だ。さて、君の下着は学校のルールに適合しているのか、していないのか？」

ケイティはこっそりとルールブックをちらりと見た。「どうやら違うみたいだ、苦悩官様。」

ベリアル先生は微笑み、立ち上がった。机の後ろに立つと、奇妙に背が高く見えた。「よろしい。ではシャツ、ショートパンツ、靴、ブラ、パンティー。六点だ。六回の別々のスパンキングだ。」

ベリアル先生は立ち上がり、鉛の枠入りガラスの前面を持つ壁掛けキャビネットへと歩いていった。

ケイティは頭の中で苦悩官と一緒に数を数えようとして瞬きをした。「六… ちょっと待て、それって——」

ベリアルがキャビネットの扉を押し開けると、ケイティは言葉を遮られた。「六回のスパンキングだ… それぞれ異なる器具で行う。」

ケイティを出迎えたのは、ヘアブラシ、スリッパ、パドル、ケイン、ストラップ、ベルト、タウズ、そして彼女が名前さえ知らないいくつかの体罰器具の見事なコレクションだった。

ケイティが固まりを飲み込むと、ベリアル先生は彼女をにらみつけた。「もちろん君も知っているだろうが、私の手による一回のスパンキングも受けることができる。ある学生たちは手でのスパンキングは他の器具ほど厳しくないと思っているようだ。残念ながら私にはその件についての見識はない。最初の器具を選びたまえ。」

ケイティがケインを見つけると、突然ひらめいた。それは細く、本物の歩行用の杖よりはるかに軽そうに見えた。「最初はケインだ。」

「何しろ」と彼女は考えた、「服を着た尻の上でそれを済ませた方が、痛みが少ないだろう。」

ベリアル先生は細い柳のケインを取り出しながら眉を上げた。「興味深い選択だ… よろしい。あの椅子の上に身をかがめなさい。手のひらを座面に平らに置くんだ。」

ケイティは目を回し、それから姿勢を取った。彼女は座面に届くほど深くかがむと、赤いショートパンツがきつく引っ張られるのを感じた。「こんな小さな椅子、バカみたいだ」と考えた。

ケイティはベリアル先生がケインを空中で振る練習をする鋭い口笛の音を数回聞き、それから彼がケイティのすぐ後ろと横に位置を取るのを聞いた。それから彼はケインをそっと彼女の尻に当てた。「六回だ。」

ケイティがケインが空気を切る音を聞くと、彼女は身をすくめた… しかし何も感じなかった。彼女はさらに数回の軽いタップを感じ、目を開けて周りを見回すと、ベリアル先生が全身を後ろに反らし、ケインを頭上高く掲げるのがちらりと見えた。

バシッ！

ケイティはケインが一直線に、彼女の臀部の中心を正確に横切るのを感じた。まるでボックスカッターの刃が段ボールを切るかのように。ケイティは自宅で保育園用のケインを経験していたので、細い線状の跡が浮き上がる「余震」を感じる準備はできていた。しかし何か奇妙なことが起こった。彼女は幻の痛み、かゆみのようなものを彼女の臀部全体に感じたように思った。

後ろから見ると、ケイティの臀部は普通の目にはまったく正常に見えた。しかし主任苦悩官の視点からは、ケインの一撃の熱の上昇と、地獄の火が六本の追加の線状跡を三本ずつセットで、一本の「本物」の線の上下に焼き付けるかのような、幽霊のような赤い輝きが見えた。

ケイティは最初の衝撃を感じてうめき声をあげ、それから間違いなく七本の別々の新しい線状跡がすべて同時に浮き上がるのを確認して鼻を鳴らした。恐怖とともに、ケイティはこの夏に何らかの形でうっかりサインしてしまった地獄の契約書を思い出した。努力して、ケイティは叫びたい衝動を抑えた。それから恐怖が彼女の心を掴んだ。一本の一撃の後で泣き崩れないようにするのに、彼女の意志力のすべてを注ぎ込んだのだ。

ケイティは、六本の線状跡からの熱の上昇がすでに彼女のショートパンツに押し付けられ始めているのに気づいて、口をぽかんと開けた。「な、何だ？ 地獄で何が？」

「その通りだ。」

それから、ケイティはベリアル先生がケインを彼女の尻に軽く当てるのを感じた。柔らかな「トントントントン」という音とともに。

ベリアル先生は舌打ちをした。「最初の罰にケインを選んだことには感心したよ。うーむ…『感心』というよりは『驚いた』が正しいかもしれない。ケインは確かに残りの懲罰のために尻をうまく準備してくれる。」

スッ… バシッ！

ケインの二度目の魔法の一撃が、最初の一撃のすぐ下に灼熱の痛みの線を描き、続いてさらに七本の線状跡を浮かび上がらせた。

ケイティは吠え、それから唇を引き結んで鼻歌を歌った。

特に急ぐ様子もなく、ベリアル先生は遊び心をもって再びケインでケイティの尻を軽く叩いた。「彼女は折れるだろう」と考えた。「痛くないふりをしようとしているのか？ お互いがそれが偽りだと分かっているのに、礼儀正しい虚偽を楽しむことに何の意味があるのか？」

ベリアル先生は、その猛烈な力を少しも損なうことなく、三回の正確なケインの一撃を素早く連続して決めた。彼はそれぞれの一撃を前の一撃よりわずかに低く狙い、五本目の線状跡がケイティの臀部の下部を横切り、太ももの上部にちょうど触れるようにした。

「さて、ボルカー嬢、それは何回だったかね？」

ケイティは空気を求めてシューッと息をし、自分の尻があたかも古い鉄製の炉の鉄格子の上に座ったかのように感じることだけを考えていた。彼女がようやく質問に気づいた時、彼女は自分が数を数えていなかったことに気づいた。「痛い！ … えっと… 四回？」

ベリアルは広い笑顔で白い歯を見せた。「そう言うならそうだろう。」

彼はさらに二回の一撃を続けざまに加え、それぞれが以前の線状跡の上に正確に重なるように決めた。

六回目の一撃が決まった瞬間、ケイティは叫び声をあげ、それから唸り声をあげて立ち上がり、両方の巨大な手で自分の臀部を掴んだ。「六回だ！」

ベリアルは遊び心をもってケイティの太ももにケインを軽く打ち付けた。「さて、ケイティ、もちろんスパンキングの最中に立ち上がることを禁じるルールは覚えているだろう。六回のセットが終わったのは分かっているが、私はそれを宣言していなかった。だから、もう一度かがみなさい。最後の一撃をやり直すぞ。」

ケイティはベリアルに向き直ってしかめ面をした。「は？ 何だって！ 警告くらいで済ませてくれないのか、この——」

ケイティがベリアルが自分と目線の高さであることに気づくと、彼女は固まった。彼女が最初に部屋に入った時には、彼を見下ろしていたはずではないか？ ケイティは方針転換が必要だと決めた。「あ、あなた… ヘリオンの仲間よ！ 何し

ろ、あんたは一日中俺をスパンキングしてるわけにはいかないだろ？」

ケイティは目をぱちぱちさせて、ベリアル先生が小悪魔的な女性的なタイプに弱いことを願った。しかしベリアルは冷笑しただけだった。「変な顔をするのはやめたまえ、お嬢さん。私は主任苦悩官だ。いたずらな小僧をスパンキングすることが文字通り私の仕事であり、毎日一日中やっているのだ。しかし、ケインをやりすぎると麻痺効果があることも確かだ。君にはまだかなりのスパンキングが残っていることを考えれば、今回はその件は見逃してやろう。」

ケイティは安堵のため息をついた。「へっ。簡単に逃がしてくれてありがとな、弱虫。どうやらあんたは脅しを実行しないようだな…」と考えた。

ベリアルはケインをフックに掛けた。「さて、それは不適切なブラジャーを着用したことに対するスパンキングだった。次は不適切な靴を履いていることに対する罰を執行する。そしてこのスリッパが最も適切な道具だと思う。」

ケイティはケインの跡がピクッと痛むのを感じて身をすくめ、それから前髪を吹き飛ばした。「わかった。」

スリッパは色あせた赤いタータンチェック柄で、少なくともサイズ14（米国の読者のために言えば、メンズサイズ15）に見えた。ケイティは裏面が小さなゴム製のボブで覆われているのに気づき、それらはよりしっかりとしたグリップを可能にするためのものだろうと推測した。

底は柔らかくてふにゃふにゃに見えた。「何しろ、スリッパは快適なはずだよな？」とケイティは考えた。

ベリアルはケイティが先ほど使っていたのと同じ椅子に座り、重厚なスリッパを右手の拳に握った。おそらくそれが利き手だろう。「私の膝の上に、ボルカー嬢。君のかなりの体格からすると、角度を合わせるのに顎が床に着くかもしれない。だから手の上に休めることを勧める。」

ケイティは口をとがらせながら、苦悩官の左太ももの上にどさりと身を投げ出した。「ふん。」

ケイティは確かに自分の顔が床に届くことに気づいたが、代わりに肘に体重をかけ、クールを装うことにした。「何しろ、ケインよりはマシだろう」と考えた。

ベリアルがスリッパでケイティの尻を軽く叩くと、ケイティは自分の体格にもかかわらず、その底が両方の尻の頬をほとんど覆うほどであることに気づいた。

それから、空気の唸る音とともに、それが彼女の広い臀部に振り下ろされた。

それはケイティの後ろ全体に衝撃波を送り、その波紋はケインによって残されたズキズキするあざの一つ一つを伝わり、まるですべてが新たに、そして同時に打たれたかのようだった。

ケイティが前に飛び出すと、彼女は歯を食いしばり、その顔は困惑と狼狽が混ざった愉快な漫画のような表情に歪んだ。「く、くそったれ！」

「何か言ったかね、ボルカー嬢？」

ケイティはシューッと息を吐いた。「いいえ、先生… ただこのシャグカーペットの景色を鑑賞してるだけです。」

「君が靴を脱いで、そもそもこのスパンキングを避けることを選ばなかったことに驚いているよ。」

ケイティは鼻を鳴らし、明らかな痛みを皮肉の背後に隠そうとした。「ああ、そんな選択肢があるのか？」

「それはルールに明確に書いてある、ボルカー嬢。違反しているアイテムを脱ぐことを選べば、服装規定違反によるスパンキングを回避できる。残念ながら、我々はもう君の不適切な靴に対するスパンキングを始めてしまったので、続けなければならない。」

「何だって？ 待ってくれ、靴を脱ぐから！ ちょっと——」

しかしケイティの抗議は、ベリアルがケイティのショートパンツのウエストバンドを鋭く引っ張り、彼女の臀部の下部の曲線が露出するウェジーを作り、続いてスリッパによる五回の激しい平手打ちを決めたことで遮られた。

彼は猛烈なペースでスパンキングを実行したが、ベリアルはスリッパの一撃一撃をケイティの臀部の異なる領域に当て、それぞれを鋭く感じさせるようにした。

案の定、ケイティはベリアル先生のスリッパがジャックと豆の木の巨人のものであり、ベリアル先生自身も巨人であるかのように感じた。

それぞれの一撃は少し中心を外れていた。左上、次に右下、次に左下、次に右上の部分を素早く連続して打った。六回目の一撃は再び中心に戻った。小さなゴム製の突起がケイティのショートパンツと露出した肉に深く食い込み、ケイティはそれらの真の目的に気づいた。柔らかくゴムのような

素材にもかかわらず、それらは衝撃点として機能し、一撃ごとに十回の小さな打撃のように感じさせた。

ケイティはライオンのように吠えたが、最後の一撃が彼女の声を遮り、彼女は子猫のように鳴いた。

ベリアルはスリッパをケイティの臀部の下部に滑らせた。「何回だったかね、ボルカー嬢？」

ケイティは息を飲んだ。「六回、だと思います。」

「正解だ。しかし、靴は一足として二点の衣類と数えられるので、それで二倍の回数の打撃を獲得する。」

ケイティの目が見開かれ、彼女はねじれて敵を睨みつけ、その目は燃え上がった。「は？ ルールのどこにそんなことが書いてある？ 靴は一足って言うんだろ。だって一足だからな！」

「184ページ、第7項。『一対』として言及される禁止衣類のいずれかを身につけているのが発見された学生は、一対のスパンキングを受けるものとする。」

ベリアルがスリッパを高く掲げると、それは部屋中のすべての光を遮るかのようだった。ケイティはその影が自分に迫るのを感じてむせた。スリッパは今や、ほんの一瞬前の記憶よりも十倍も広く見えた。

ベリアルは再びスリッパでケイティの臀部を叩き始め、それぞれの平手打ちは新鮮で跡のない肉と、ケインによってできた盛り上がった紫色のあざの両方に当たった。

ケイティは最初の一撃を感じてうめき、二発目に不意を突かれてむせた。彼女が集中しようとしても、あの恐ろしいゴム

製のスリッパに対して精神的な準備をすることができないようだった。さらに悪いことに、それはケインの跡を彼女の臀部の奥深くに打ち込んでいるかのようで、灼熱の痛みをますます深く、鈍い痛みになるまで沈めていった。

歯を食いしばろうとした後も、ケイティは六回目の一撃で叫んでいた。しかし努力して、彼女は泣き崩れないように自分に言い聞かせた。深く重い息をしながら、ケイティは解放される瞬間を待った。「よし… スパンキングが嫌なら何かを脱げばいいんだよな？ じゃあ…」

ケイティは自分の広い臀部をくねらせ、魅力的であろうと願いながら、声を色っぽくしようとした。「あんたはまず何を脱がせたい？」

ベリアルはしかめ面をした。ヘルハイの職員として、彼は誘惑の技術に対して不承不承ながら敬意を抱いていたが、ケイティの馬鹿げた試みは、古典的なルネサンスの油彩肖像画の隣に掛けられた、クレヨンで描いた棒人間の下品な落書きのようだった。

くねる臀部を無視して、ベリアルは罰則用の道具のキャビネットを調べた。「さて、不適切な靴でスパンキングされたところだ。君はまだシャツ、ショートパンツ、パンティーで罰せられていない。罰が始まる前にこれらのアイテムを脱ぐことを選ばない限り、少なくともあと三回のスパンキングがある。今、どれか脱ぎたいか？ 好きな順番で脱いでもいいし、一度にすべて脱いでも構わない。」

痛みを遮断しようと奮闘しながら、ケイティは拷問からの脱出を見つけて微笑んだ。「よし… つまり、先に脱げば三回の

スパンキングは免除されるんだな？ じゃあ… 全部脱がせてくれ、そうすればスパンキングは全部終わりだろ？」

ベリアルはキャビネットからパドルを取り出し、繊細に調べてからまた掛け直した。「そして残りの一日をシャツと靴だけを着て過ごすのかね、ボルカー嬢？ 脱いだアイテムは返却されない。」

ケイティはしかめ面をした。「は？ あんたは俺をキャンパス中、半裸で歩かせるって言うのか？」

「あるいは全裸だ。屈辱もまたヘルハイにおける懲罰の一形態だ。」

ケイティはドアを一瞥し、頭の中で最終的な服装のイメージを描こうとした。ショートパンツとシャツを履いている限り… ノーパンでやっていける。「よし… じゃあ… ブラとパンティーだ。それらを脱ぐ。」

「不適切なブラジャーについてはもうスパンキングした。」

ケイティは怒りでむせそうになった。「じゃあ、それを他のどれかのスパンキングとしてカウントして、ブラを脱ぐことでどちらかのスパンキングを回避できるようにしてくれないか？」

「ダメだ。ルールは、ある違反に対する罰が完了したら、遡及的に調整することはできないと定めている。私はすでに君のブラジャーを脱ぐことを拒否したことに対して罰した。学校の規則ではそれが不適切と見なされている以上、もちろんそれを脱ぐことは自由だが、それは何の影響も与えない。」

ケイティは目を回した。「わかったよ！ もういい、パンティーを脱ぐからそのスパンキングは飛ばす。でもショートパンツは履いておく。」

ベリアルはケイティの尻を軽く叩いた。最初の二回のスパンキングからの痛みを呼び覚ますのに十分な強さで。「興味深い。立ち上がってもいいよ、ボルカー嬢。」

ケイティはパンティーに手を伸ばしたが、ショートパンツが邪魔をしていることを思い出した。彼女がショートパンツのボタンをもたついていると、突然ベリアルがルールについて彼女を誤解させているかもしれないという考えが浮かんだ。弱い無防備な若い女性に服を脱がせるように仕向けるなんて、ちょっとした冗談として男がやることだ。「ちょっと確認したいんだけど… パンティーを脱ぐけど、その後はショートパンツを履いたままでいいんだよな？」

ケイティはベリアルを一瞥してしかめ面をしたが、別の考えが浮かんだ。もしかしたら男性の視線は武器になるかもしれない… 彼女の有利に。ゆっくりと、ケイティは赤いショートパンツをずり下ろし、規定外のパンティーを部分的に見せた。それは燃える髑髏で飾られ、上部には「バッド・アス」という文字が刻まれていた。

ケイティは腰をくねらせ、まるでショートパンツを脱ぐのに苦労しているかのように振る舞った。「… つまり、この不適切な尻丸出しショートパンツを履いてることで、まだ俺をスパンキングできるってわけか？」

ケイティは「スパンキング」という言葉を強調してまつげをぱちぱちさせた。

退屈そうに見ながら、ベリアルは革のストラップをキャビネットに戻し、それから手を叩き合わせて、ケイティの目をまっすぐに見るために歩み寄った。「ショートパンツを脱ぐ必要はな

い、ボルカー嬢。君は単に不適切なパンティーに対するスパンキングを飛ばしたいだけだろう？」

困惑しながら、ケイティは自分の臀部を見下ろし、なぜベリアル先生がそれを調べるのに全く興味がないように見えるのか疑問に思った。「まあ、そうだけど、ショートパンツをちょっと脱がなきゃ、どうやって不適切なパンティーを脱ぐんだよ？」

「こうやってだ。」コブラの速さで、ベリアルはケイティのショートパンツの中に両手を突っ込んだ。ケイティは抗議の悲鳴をあげ、自分の誘惑作戦がうまく行き過ぎたのではないかと思ったが、彼女がベリアルの手首を掴むと、それらは煙のように感じられた。両手を使って、ベリアルは前と後ろからケイティのパンティーのウエストバンドをつまんだ。それから彼はケイティの下着を一気に、きれいな動作で真上に引っ張り上げた。

ケイティはパンティーが股間と尻の割れ目に食い込むのを感じて息を吸い込み、それから自分が空中に吊り下げられていることに気づいた。瞬時に、ケイティはいじめっ子としての長年の間に好きだったテクニックの一つを認識した：ハンモックウェジーだ！

揺れる動きでケイティの声は震え、彼女は狂戦士の鬨の声を叫んだ。彼女はベリアルを「クソ野郎」と呼ぼうとしたが、代わりに出てきたのは「くそおおお！　ママあああ！」だった。

自分の下着でチーズワイヤーのように吊るされることほど、ママを恋しくさせるものはない。

ケイティはベリアル先生が簡単に彼女を上下左右に跳ねさせるのを感じて、ネズミのようにきゃあと鳴いた。

パンティーは危険なほど張り詰め、切れそうだった。ケイティは唇を噛み、喘いだ。「痛い、痛い！ もうたくさんだ！ やっぱりスパンキングを受ける！」

ベリアルは勢いをつけるために腕を前後に揺らした。「残念だが、衣類の脱衣中に考えを変えることはできない。さあ、じっとしていなさい。」

オリンピック選手のように回転し、ベリアルはケイティを自分のオフィスの中で大きく円を描くように回転させ始めた。ケイティは悲鳴をあげ、パンティーの布地が彼女の口と頭蓋骨の後ろまで伸びるのを感じた。ケイティが息を吸い込むと、パンティーの布地が唇に引っかかるのを感じ、自分がコマのように回されているのを感じた。ケイティが足を蹴ると、赤いショートパンツは腰のすぐ下で引っかかり、パンティーがデンタルフロスのようにきつく引っ張られるにつれて、彼女の臀部の上部のほとんどが露出した。

ベリアルがケイティのパンティーのウエストバンドを彼女の頭上で片手で押さえ、彼女の尻を叩いて回転させた。まるでゴミ袋を縛るかのように。「心配するな、ボルカー嬢、この攻撃的な下着はすぐに脱がせてやる…」

最後のしっかりとしたバウンドで、ケイティのパンティーはケイティの体重のすべてのもとで切れた。

ケイティはうつ伏せに床に倒れ込み、それから赤いショートパンツを引っ張ってウェジーの残骸を解消した。「あああ…くそ！」

ベリアルは彼女を無視して再び座った。「さて、君はまだショートパンツを履き続けることを選んだことに対するスパンキングが残っている。どんな器具を選んでもいいし、私の手を選んでもいい。それから立ち上がって、私の膝の上に来なさい。」

ケイティは四つん這いで体を持ち上げながら不快そうに口笛を吹いた。「は？ あんたの手？」

自分のショートパンツを素早く一瞥して、ケイティは嬉しそうに微笑んだ。家でのスパンキングは楽しいものではなかったが、ケイティは経験から、大抵はパンツの上からの手でのスパンキングなら耐えられることを知っていた… 大抵は。「じゃあ手で頼む！」

彼女は文字通り苦悩官の膝の上に飛び込んだ。ベリアルがケイティを落ち着かせると、彼は自分のあごひげを撫でた。「君は規則18を知らないと解釈してよかろうか？『いかなる手でのスパンキングも、裸の尻の上で行われるものとする』と。」

ケイティがもがくのを防ぐために、ベリアルは力強い手を彼女の腰のあたりに押し付け、もう一方の手で彼女の赤いデニムのショートパンツのウエストバンドに引っかけた。

引き締まった筋肉を緊張させて、ケイティは彼の太ももに押し付けたが、苦悩官の細い腕は彼女が想像していたよりもはるかに強かった。「な、何だって？ どこに書いてある？ 離せ！」

素早い一引きで、ベリアルはケイティの赤いショートパンツを彼女の臀部のすぐ下まで引き下ろし、それからきつく引っかかった。「規則18は4ページだ。もしそこまで読んでいないな

ら、君に remedial な英語の授業を処方しなければならないかもしれない。」

パニックに陥って、ケイティは逃れようともがいたが、彼の手は海の錨のように彼女を押さえつけた。彼女は野生の馬のように跳ねて後ろ足で立ち上がろうとしたが、できたのは数インチ彼の膝の上から浮き上がるだけで、また押し戻された。

ケイティが三度目の脱出の試みをしたとき、ベリアルはその機会を捉えて彼女のショートパンツを引き下ろし、肉厚な太ももを滑り落ちて膝の辺りまでずらした。

ケイティは脚を緊張させ、しわくちゃになったショートパンツに足が引っかかるのを感じた。「くそ！　やっぱりやめた！」

「残念だが、規則3は罰の最中に考えを変えることはできないと定めている。」

怒りの中で、ケイティはどもり始めた。

犠牲者の支離滅裂な抗議を無視して、ベリアルは手のひらをケイティの裸の、水ぶくれとあざだらけの臀部に平らに押し当て、斑模様の肉の上に柔らかい円を描き始めた。「多くの学生は、手でのスパンキングは例えばパドルほど痛くないと思っている。しかし、経験豊富な懲罰者によって裸の尻に行われれば、それはストレス・スポットを正確に狙うことを可能にする。」

最後の力の限りもがいて、ケイティは崩れ落ち、それから柔らかい摩擦を感じて息を呑んだ。「おい！　触ってるのか？　やめろ！」

ベリアルはケイティの両方の尻の頬を軽く持ち上げ、その下に隠れている青白い座面の部分を調べた。それはケインとスリッパから保護されていた。それから彼は膝の角度を変え、ケイティの腰を鋭く上方に傾け、敏感な肉を露出させた。「違う、ボルカー嬢、ただターゲットを選んでいるだけだ。」

パシッ！

ケイティは衝撃を感じて飛び上がり、その反響効果を感じて背中を反らした。彼の手のひらは彼女の臀部の下部全体と、スリッパによってできたいくつかの円形の線状跡、そしてケインによってできたあざがすべて重なる部分を簡単に覆った。

跡の交差点はすべて、まるでガイ・フォークス・デーの花火大会のように輝いた。（米国の読者のために言えば、イギリス人は独立記念日に花火をしない。理由は明らかだ。）

ケイティはその感覚を処理しながら、口を開けて無言の悲鳴をあげた。まるで彼女はケインとスリッパをすべて再び経験しているかのようであり、それに加えてベリアルの荒れた革のような手のひらの新鮮な平手打ちがあった。

「これで一回だ。」

ケイティはむせて叫びたくなったが、代わりに息を吸い込むことを余儀なくされた。ついに彼女は困惑したうめき声しか発することができなかった。「げっ？」

「違う、ボルカー嬢。それは『一回、先生』だ。どうやら remedial な数学の授業も必要そうだ。さて、一回の次に来るものは何か分かるか？」

パシッ！

別の一撃が別の跡とあざのネットワークを捉え、ケイティの尻の頬に新たな痛みの波を灯した。数を数えられず、ケイティは子豚のように悲鳴をあげた。

ケイティが自分の状況を処理するのに時間をかけるのを喜んで、ベリアル先生はインターホンのダイヤルを弄り、それがまだアクティブであることを確認した。自分のオフィスの上の隅にある隠しセキュリティカメラを見つけて、ベリアルは自分の席を少し調整し、ケイティの臀部がカメラのショットの中心に来るようにした。もちろん、彼は泥棒や悪戯者を防ぐためにオフィスのあらゆる角度をカバーしていたが、見ている学生たちにもっとショーを見せるというアイデアが気に入っていた。ゆっくりと、彼はほとんど優しく、しかし完全に優しくはない程度にケイティの尻を撫で、彼女が自分の声を聞くことができると確信するまで待った。「それでブルキーのケイティ・ボルカー、ヘルハイでの初日はどうだ？」

「あんたは——」

ケイティが答えようとした瞬間、ベリアルは手のひらを叩き下ろし、これまでで最も激しい一撃を、六本のケインの跡すべてを一度に捉えて決めた。

ベリアルはケイティに泣き叫ばせ、それから彼女が止まるのを待った。「で？ 私の質問にちゃんと答えてもらいたいものだ、ボルカー嬢。」

彼が何と言おうと気にせず、ケイティはねじれて苦悩官をまっすぐに見つめた。「あんたは熊手にでも座ってろ！」

ベリアルは彼女の純粋な決意に感心したことだろう… 彼女のまつげを濡らす涙がなければ。「… そ、して…」

パシッ！

「うがあああ！」

四発目はまったく同じ場所に決まり、六本のケインの跡すべてを横切る手のひらの明確な白いシルエットを浮かび上がらせた。通常、ベリアルは手をしっかりと安定させ、パドルのような効果を得るために指を閉じることを好んだ。しかし今のところ、彼は指を広げることでケイティの線状跡のさらに多くをカバーできると判断した。ベリアルは五発目と六発目を続けざまに決め、それから指をケイティの両方の尻の頬に撫でた。「これで不適切なショートパンツを履いていることに対する六回だ。」

ケイティは顔を上げた。「は？ でもさっきショートパンツを脱がせたばかりだろ！」

「もちろん。なぜならルールは手でのスパンキングは裸の尻で行われなければならないと定めているからだ。」

「でもそれは不公平だ！ あんたがショートパンツを脱がせたなら、あたしがショートパンツを脱がなかったことでスパンキングできるはずがないだろ！」

「簡単なことだ、君がショートパンツを脱ぐことを拒否したからだ。ルールによれば、君がショートパンツを脱ぐことを拒否したので、私はスパンキングを執行しなければならない。そして君が手でのスパンキングを受けることを選択したので、裸の尻にスパンキングを執行するために君のショートパンツを脱がさなければならない。」

「ああ、くそったれ！　そんなこと知ってたら、手でのスパンキングなんて絶対に承諾しなかった！」

「そしてもし君がルールをもっと注意深く読んでいれば、それを知っていただろう… ちょっと待て、今気づいたんだが、私は君を規定のスカートではなくショートパンツを履いていることでスパンキングしている。」

「そうだよ！　言われなくても分かってるよ、名探偵！　他に何か気づいたことはあるか？」

「まあ、それは一対のショートパンツだ、そしてルールは明らかに、『一対』として言及される不承認の衣類を身につけることは、一対のスパンキングを受けると定めている。」

「何？　それって全然意味が通らない！　たった一つの——」

ベリアルはケイティの臀部に最初の平手打ちを決め、彼女の文を代わりに終えた。「一対のショートパンツだ。」

ケイティが怒りで沸騰していると、ベリアルは二発目の清々しい平手打ちを決め、ケイティに数秒間その痛みを味わわせてから、ゆっくりとさらに三発を決めた。

ケイティは路地猫のように唾を吐いた。「がるるっ！　くそ、やれよ！」

「ボルカー嬢、君の継続的な悪態と悪い態度のおかげで、これが終わった後に確実に追加のスパンキングを稼いだな。」

ケイティが目をきつく閉じると、彼女は二つの涙が目に溜まるのを感じ、それを追い払おうとした。ベリアルに涙の証拠

を見られたくなくて、彼女は頭を下げて二つの中指を立てた。「あんたは俺のケツにキスでもしてろ、この老いぼれ！」

ベリアルはケイティの座面に二回のスパンキングを決め、より深い衝撃を与えるために、しっかりと閉じた手を使うことに戻った。「いや、私は君のケツをスパンキングするのだ。六回の打撃ルールは一般的に器具を用いた罰に適用されるが、規則3第2項は、いかなる教師または苦悩官も、任意の手でのスパンキングの長さを自分の裁量で延長できると定めている。」

そう言って、ベリアルは容赦ない安定したペースでスパンキングを始め、ケイティの裸の臀部全体を平手打ちの嵐で覆った。

ケイティが最初の平手打ちの新鮮な痛みが消え始めるのを感じると、それはすぐに燃え上がる炎の感覚に取って代わられ、一打ごとにその地獄に新しい薪が加えられた。「痛い！ 痛い！ 痛い！ うわっ！」

ケイティの最初の叫び声は、むしろ格闘家の戦闘時の叫びのようだった。しかし彼女の叫びはすぐにさらに甲高く、必死になった。「あああ！ わかった！ わかった！ 悪態はやめる！」

ベリアルは雷鳴のような平手打ちの安定した雨を止めなかった。「止めるだろうとも、ケイティ。私が終わらせた後にな。ちなみに、悪態に対するスパンキングはまだ始めてもいない。これはただの態度に対するものだ。」

百回ほどのスパンキングの後、ベリアルはついに止み、ケイティが彼の膝の上で震えるのを許した。「良い知らせがある。不適切なショートパンツを履いていることに対するスパン

キングは終わった。今度は不適切なシャツに対するものを始めよう。そして今度は私が器具を選ぶ番だ。」

ベリアルは左手をケイティの前に伸ばし、コレクションから頑丈な木製のパドルを選んだ。彼はそれをケイティの前に十分な長さぶら下げて彼女によく見せてから、右手に持ち替えた。

前腕で素早く涙を拭き、ケイティは後ろを振り返って見ると、自分の尻が空中で震えているのが見えた。「ひっく… ああ、警告だけで済ませてくれないか… ハンサム？」

ケイティは最後の言葉を苦痛に満ちた笑みとともに加え、背中を反らして臀部を少し持ち上げた。この痛々しいほど不器用な従順で女性的に見せようとする試みは、ケイティのTシャツの後ろにある悪態によってかなり損なわれていた。「なあ、お兄さん… 俺の可哀想な小さなお尻は、今日はもう十分にスパンキングされたんじゃないか？」

「いやだね！ そんな態度じゃまだ足りないな。」

そう言って、ベリアルはパドルをケイティの臀部全体に叩きつけ、彼女の引き締まった筋肉質な臀筋の両方を生の生地のように簡単に平らにした。

ケイティの必死の嘆願は、彼女の高まる恐怖を覆う薄い仮面に過ぎなかった。パドルが決まった瞬間、彼女は狼人のように叫んだ。「あおおおおおおお！」

「それがもっと適切だ。それを感じたんだろう、ボルカー嬢？」

ケイティはほとんど悪態をつきそうになったが、自分を抑えた。不幸なことに、苦悩官の質問は彼女の頭にうまく入っていなかった。「しぃぃ… す、すみません、先生！」

ベリアルは彼女の左上の頬を平手打ちした。それほど強くはないが、彼女の注意を引くには十分だった。「私は質問をしたんだ、ボルカー嬢。」

ケイティはケインの跡がズキズキし始めて喘いだ。「がっ！… な、何の質問でしたっけ？」

ベリアルは彼女の臀部がパドルの影の下で震えるのを見ながら、その瞬間を長く引き延ばした。「私はその一撃を感じたかと尋ねたんだ。適切に痛かったか？」

ケイティは前髪が目にかかるほど激しくうなずいた。「はい！はい、とても… くそ… 痛かったです、先生！ 今までで一番ひどかったです！」

ベリアルは温かく微笑んだ。彼女が明らかに不器用でありながら礼儀正しくしようとする様子は、ほとんど愛らしかった。「それはよかった。それなら…」

ベリアルはパドルを机の上に置き、付箋に何かを走り書きした。彼はその付箋を机の前面に貼り、ケイティが簡単に読めるようにした：「ケイティ・ボルカー、#1718。パドルを嫌う。」

ケイティが恐怖でその付箋を見つめていると、ベリアルはパドルを再び手に取った。「… 今後、君が必要とする追加の懲戒には、パドルを主要な道具として指定することにしよう。」

「でも——」

ベリアルは三回の素早く猛烈なパドルの一撃を決め、ケイティの両方の臀部に二本の長く幅広い線状跡を、そして太ももの上部に一本の線状跡を残した。間を置かずに、彼はパドルの持ち方を変えて、より垂直な角度で最後の二回の一撃を狙い、ケイティの左右の臀部の中心をそれぞれ正確に打った。

六回目の一撃までには、ケイティの悲鳴は偽造できない独特の性質に達していた。彼女のショートパンツはすねの辺りまで垂れ下がり、足首に引っかかっていた。ケイティが野生のガゼルのように前方に飛び出そうとすると、彼女は足を蹴ってコンバットブーツから足を抜き、赤いショートパンツが部屋中に飛んでいった。ケイティは嘘の涙を流すタイプではなく、常に本物の涙をできるだけ長く抵抗した。鼻を鳴らして、ケイティはすぐに顔を肩にこすりつけ、明らかな涙の跡を隠すための最後の無駄な試みをした。

ベリアルはケイティに泣き言を言わせながら、まるで丸太を挽くかのようにパドルを彼女の臀部の上で滑らせた。「… さて、まだ追加のスパンキングが残っていることは理解しているね？ 一つは悪態に対して、もう一つは私のドアをバタンと閉めたことに対して。さて、パドルを君の主要な選択器具として確立したので、まずはドアをバタンと閉めたことで罰することにしよう。君が第一印象を作るために選んだ方法だったのだから、ふさわしいだろう。」

ケイティがようやくこれらの言葉の意味を認識すると、彼女は臀筋を引き締め、眉をひそめた。「な、何だって？ そんなこと前には言ってなかったぞ！」

「いや。しかしルールブックには明確に書いてある。さあ、じっとしていなさい。どうやらあの大暴れで、靴をなくしてしまったようだ… ショートパンツも一緒にな。」

ケイティが足をバタバタさせると、彼女は本能的にかかとで臀部を守った。その時、彼女は自分が今や太ももまでのストッキング、ブラ、そしてだぶだぶのパンクロックTシャツだけを身につけており、それが背中のほとんどの方までずり落ちて乳房の下部が露出していることに気づいた。「でも——」

ベリアルは突然、素早い最後のパドリングを開始した。六回の打撃の後、彼は止み、ケイティはスパンキングが終わったと期待する勇気を持った。しかし代わりに、ベリアルはケイティの腰へのグリップを調整し、自分の右足でケイティの左足を引っ掛け、彼女を自分の左膝頭の上にまたがらせた。この新しい体位はケイティを地面すれすれにまで低くさせ、彼女の鼻はカーペットに押し付けられた。また、これまでの一連のスパンキングで一度も触れられていなかった彼女の太ももの内側をより露出させる効果もあった。

最後の怒りの発作で、ケイティは手の届くものなら何でも噛みついたり、引っかいたり、爪を立てようともがいた。彼女の片方の手が椅子の脚を掴んだ。彼女はなんとか苦悩官のズボンの脚を掴んだが、彼に爪を立てようとしたまさにその時、最後のパドリングが始まった。一撃は非常に強力で、ケイティを前に倒し、彼女はその保持を失った。彼女がカーペットを噛み、敷物が彼女の頬と鼻に擦り傷を残すのを感じながら、ケイティは困惑した野性的なうめき声しか発することができなかった。

ベリアルのピンでケイティは彼の膝の上に固定され、彼は素早いパドルの一撃を加え、ケイティの臀部と太ももの隅々ま

で素早くカバーした。ケイティに息をつく暇を与えず、ベリアルは容赦なくパドリングし、彼女の最後の決意を打ち砕くつもりでいた。

案の定、ケイティは歯を食いしばり、赤ん坊のように泣き崩れる衝動に抵抗する最後の試みをした。しかし必然的に、ダムは決壊した。新鮮な涙が滝のように彼女の頬を流れ落ち、彼女は叫び声をあげ始めた。

彼が制御不能な、激しい啜り泣きの特徴的な音を聞くと、ベリアルはパドルを置き、ターゲットを調べた。彼は自分が逃したいくつかの小さな斑点があると判断し、ケイティがスパンキングが止んだことに気づく前に、彼は手を使って彼女の臀部全体と太ももの色を、斑模様の紫色のあざや水ぶくれとともに、一貫した怒った赤色に均すために、再びスパンキングを始めた。これはケイティが彼の膝の上に、それほど静かではなく横たわり、抵抗するエネルギーを集めることができなくなるまで続いた。ベリアルが最後の一連の平手打ちを決めると、ケイティは泣き言を言い、うめいた。彼女は明らかに叫びたかったが、彼女の声はとっくに嗄れていた。

ベリアルはパドルをフックに掛け直した。ケイティに抵抗する力がもうないことを満足して、彼はケイティの体位を調整し、彼女が彼の膝にまたがるのではなく、彼の膝の上に横たわるようにした。「よし、私のドアをバタンと閉めたことに対する満足のいくスパンキングだ。これで残るは君の悪態に対する別のスパンキングを執行することだけだ。器具を選びたいか？」

ケイティの目がぱちぱちと開くと、彼女はトランス状態から抜け出したように見えた。彼女が最初に気づいたのは、彼女の臀部が全体に痛むことだった。それから彼女は顔を上げ

て、恐ろしい一連のスパンキング器具を見つめた。すでに限界をはるかに超えていたケイティの唇は、カーペットにキスをしながら震え、どのスパンキング器具が最も痛くないか考えた。

幸運なことに、最近母親と父親から耐え抜いた多くのスパンキングが、罰の最中に冷静さを保つことをケイティに教えていた。涙をこらえながら瞬きをして、彼女は定規が小さくて威圧的でないように見えると判断した。「わ、私は定規にします… 先生！」

席でねじりながら、ベリアルは指を一連の定規の上でなぞった。「う一む、どの定規だい、ケイティ？ プラスチック製か、木製か、金属製か？」

ケイティはプラスチックが最も軽く、最も厳しくないように思えた。「プ、プラスチックで！」

ベリアルは冷ややかにプラスチックの定規を取り、ケイティの臀部を軽く叩いた。「大胆な選択だ。あと何回来るか分かっているか？」

ケイティは首を振った。「何が違うんだ？ ルールブックに書いてある通りだろ？」

「概ね正しい。軽微な違反に対しては、ルールは標準の六回を規定している… 少なくとも初犯にはな。だから、まさにそれを与えることにしよう！」

ビシッ！

ケイティは軽いプラスチックの定規が最も痛くないだろうと推測していた。それぞれの素材には長所短所があるが、プラスチック定規の滑らかな表面は経験豊富な懲罰者に一つの

主要な利点を提供する（あるいはいたずらな犠牲者に尋ねれば、一つの主要な欠点と言えるだろう）：プラスチック定規はスズメバチのように刺す。

その残る痛みは非常に顕著で、ケインとパドルによって残されたより深い痛みさえも圧倒し、ケイティの後ろ側全体に、すでに焦土と化したケイティの臀部の焼け野原の上を制御された山火事のように広がった。

ケイティはすぐに気づいた。「うおお！」

ベリアルは熟練して六回の一撃をきれいな線で決め、端がわずかに重なるようにした。「おやまあ、靴下もほとんど脱げかけているね。脱ぐために少し時間を取るか？」

ケイティは顔をしかめ、弱々しく後ろに手を伸ばして、ゆるんだ太ももまでのストッキングの上部を掴んだ。「嫌だ！ このままでいい！」

「残念だ。それは規定のストッキングを履いていないことに対する別のスパンキングだ。」

「は？ でも規定内だって言っただろ！」

「靴と一緒に履けばな。しかし靴なしで履く靴下は学校の服装規定違反と見なされる。」

「でも靴を履いてた！」

「君が蹴り飛ばすまではな。」

「じゃあ、また履かせてくれ！ そうすれば靴下は問題ないだろ？」

「馬鹿なことを言うな、そのコンバットブーツは学校の服装規定内ではない。なぜ私が君にそれを履き直すことを許可すると思う？」

「でも… あんたはそれを脱ぐことを拒否したことで、もう二回もスパンキングしただろ！」

「もちろん。それは一対の靴だったからだ。そう言えば、君は靴なしで一対の靴下を履いているので、二組のスパンキングが必要になる。悪態は服装規定違反とは別の違反と見なされるので、また定規を使うことができる。」

ケイティが足を蹴ると、片方のストッキングがほとんど彼女の足から脱げかけたが、完全には脱げなかった。「不公平だ！ そんな——」

ベリアルは定規の六回の一撃を別のきれいな線で決めた。「それが片方の靴下に対する一組のスパンキングだ。次はもう片方だ。」

ケイティが息を吹き返すと、彼女は再び足を蹴ろうとした。彼女は明らかに戦う気持ちのほとんどをスパンキングで叩き出されていたが、片方の靴下が彼女の足から飛び去るには十分だった。

ベリアルはそれが床にぱたんと落ちるのを見た。「ああ、残念だ。あと少しだったのに、時間が足りなかったな… もう片方の靴下に対するスパンキングだ。」

「お願い——」

ベリアルは最後の六回の一撃を決めてケイティの言葉を遮り、それから自分の成果を調べるために一時停止し、空いた手で彼女の頬を探った。「なんて素敵なトマト色だろう！

一度規定の青と白のフリルのパンティーを履かせれば、君の後ろはユニオンジャックにぴったり合うだろう。」

それぞれの頬を優しくつまんだ後、彼は彼女の臀部の下部の中心に最後のしっかりとした平手打ちを鋭いパチッという音とともに決めた。

この最後の一撃は、ケイティに、先のパドリングによって彼女の座面にできたズキズキする水ぶくれを痛感させた。

足を床に押し付けて、ケイティは立ち上がろうとしたが、苦悩官の膝の上で跳ねるだけで、彼の手が彼女をその場に留めていた。

ケイティが息を整えると、彼女は再び声を見つけた。「痛い痛い痛い！ ちっ！」

彼女が立ち上がることを許された瞬間、ケイティはその場で踊り、痛む臀部を掴んだが、揉むにはあまりにも痛いことに気づいてきゃあと鳴いた。それから彼女は腰から下が片方のストッキングだけであることに気づき、シャツの前を引っ張って陰毛を隠した。「あああ！ ショートパンツが必要だ！」

ケイティが振り返ると、彼女は自分のショートパンツを見つけたが、それに手を伸ばすと、ベリアルは彼女の耳をつまみ、再び彼の膝の上に引き戻した。「残念ながら、まだ終わっていない。戻ってきなさい！ そして馬鹿なことを言うな、そのショートパンツはもう履けない。服装規定違反だ。」

「で、でも… あたしはそれを履き続けるためにスパンキングを受けるって許したんだぞ！」

ベリアルは、暖かい暖炉で手を温めるかのように、ケイティの輝くような赤い尻を撫でながら鼻歌を歌った。「後から考

えると皮肉な選択だったな。さて、最後の問題は、不適切なパンティーを履いていることで君をスパンキングすることだ。」

「は？ でも、脱ぐことに同意したらスパンキングはしないって言っただろ！ それがルールに書いてあるって言ったんだ！」

ベリアルはあごひげを弄った。「そう言ったか？ もう一度確認する必要があるかもしれない。見てみよう…」

ベリアルはページをめくり、人差し指で文字をなぞった。「ここに、学生自身が衣類を脱がなければならないと書いてある。」

「やった！ 脱ぐことに同意した！」

「しかし実際には脱がなかった。私が力ずくで脱がせたのだ。法の文言によれば、君は私の命令に従ったことにはならない。」

「じゃあ、従うチャンスをくれよ！」

「よかろう。ボルカー嬢、直ちにパンティーを脱ぎなさい。」

ケイティは自分の後ろを掴み、それからパンティーがもうないことを思い出して固まった。「で、でも… もう持ってないんだ！」

ベリアルはケイティの手を彼女の臀部から乱暴に引き離し、彼女の腰へのグリップを確かにしながら首を振った。「しかし以前は持っていたし、ルールが定めるように自分で脱ぐことはしなかった。」

ケイティは拳で床を叩いた。「裁判所に訴えてやる！ あんたのパンツを剥ぎ取ってやる！」

ベリアルは開いた手でケイティの臀部にしっかりとした平手打ちを決めて答えた。「おかしなことを言う。」

ケイティはベリアルの手のひらの新鮮な痛みを感じて顔をしかめた。それはゆっくりとしたキャンプファイアのパチパチという音のようなくすぐったい感覚だった。ケイティがさらに自分の主張を議論する前に、ベリアルは議論を許さない口調で彼女に講義を始めた。「君が奇妙な法的状況に陥っていることは認める。しかし苦悩官として、私は罰の適切な適用を決定する際に広範な自由裁量権を与えられている。いわば私は裁判官であり、陪審員であり、死刑執行人なのだ。次のスパンキングの話に戻るが… 前回は器具を選ばせてやったが、今回は私がその名誉に預かろう。」

ベリアルは長い革のストラップの柄を掴んだ。それは最も凶悪な革ベルトの二倍の厚さと二倍の幅があり、ケイティの目の前にぶら下げた。「始める前に何か言いたいことはあるか？」

ケイティの声からは生意気な態度の痕跡はすべて消え去り、彼女はストラップを見つめた。「あんたは俺を… それで叩くのか？」

「そうだ、それは生意気な若い女性の臀部を懲らしめるのに完璧な武器だ… すでにかなり罰せられた臀部だが、私が言うまでもない。立ち上がりなさい、揉んではいけない。ストラップを最も効果的にするには立った姿勢が必要だ。」

ケイティの手は臀部を掴む前に凍りつき、それから彼女はシャツを引っ張ってベリアルから身をひねった。彼の目が彼

女の露出した後ろ姿を調べているのに気づくと、ケイティは無意識に自分の尻を少し突き出し、口をとがらせた。「…で、でも…」

ケイティは尻を少し振った。「… でもさ？」

ベリアルが何も言わないと、ケイティは瞬きし、自分が微妙すぎたのではないかと考えた。「えっと… 俺の生意気なケツはもう十分に赤くなってないか？ 傷つけたいわけじゃないだろ？」

ベリアルは首を振り、机の後ろから三本脚の木製スツールを取り出した。「うーむ、確かに私はすでに徹底的な仕事をした。もし一つの違反に対して罰しているなら、とっくに満足していただろう。しかしルールは明らかに、不承認の衣類の一つ一つが別々の違反と見なされると定めている。どうにもならん！ さあ、そのスツールの座面に手のひらを平らに置きなさい。」

スツールの低さのおかげで、ケイティは手のひらを届かせるために二重にかがまなければならず、彼女のシャツはぷっくりとしながらも引き締まった臀部の上に高くまくれ上がった。彼女の膝は震えた。「お願いです、先生… 慈悲を！」

「慈悲を乞うことが罰を軽減する効果を持つためには、適切な方法で行われなければならない。規則313。つまり、手を組んでひざまずくこと、こうだ。それから、自分の主張を述べるのだ。」

瞬時に、ケイティはひざまずき、手を前に組んだ。「ああ、くそ！ わかった、わかった！ 何でもする！ お願いだから、先生、もうスパンキングはやめて！」

「言葉遣いだ、ケイティ。」

「しまった！ すみません！」

「警告を受けた後に悪態を使ったことで、追加のスパンキングが二回だ。」

ケイティは泣き叫び、半ば検閲された罵り言葉と謝罪が混ざったものを涙ながらにまくし立て始めた。

退屈そうに見ながら、ベリアルは鼻歌を歌い、自分の机を一瞥した。突然、彼の旧式のポケットベルが振動していることに気づいた。それは新しいタイプの機器で、小型のキーボードにタイプすることで相手に実際のメッセージを送受信できるものだった！ 学校理事会からのメッセージにはこう書かれていた:「懲戒問題を抱えていると聞いた？ 初日か？」

ベリアルはケイティに無頓着に手を振りながらポケットベルを手に取り、返信をタイプした。「おや？ でも君はたくましい女の子だろうケイティ。スパンキングくらい耐えられるはずだ？」

ベリアルは素早くタイプした。「すべて手に負っている。学校のセキュリティ映像を上げてくれ。」

新たな涙がケイティの目に溢れた。「嫌だ！ もうたくさんだ！ 俺のケツはこれ以上の拷問には耐えられない！」

彼女は鼻をすする、それから泣きじゃくり始めた。

ベリアルはポケットベルを置き、ため息をつきながらストラップを手に取った。「それは残念だ。なぜなら規則313第2項は、慈悲を乞うことで罰を軽減させるためには、実際の罰が何かを知る前に始められていなければならないと定めてい

るからだ。だから残念ながら、服装規定違反に対する最後のスパンキングには何の効果もない。しかし、私は繰り返し違反者への罰の取り扱いについていくらかの裁量を許されている。君が本物の慈悲の乞いを試みたことを考慮して、わいせつな言葉に対するストラッピングを半分に減らしてやろう… ただし、石鹸で口を洗うことを受け入れるならば。それは君の口の悪さに対するふさわしい罰だと思う。」

ケイティの唇は震え、彼女は自分にまだ何回のスパンキングが残っているかを数えようとしたが、数えられなくなったことに気づき、彼女の目は恐怖で見開かれた。「は、はい、先生。」

運命を受け入れて、ブルキーのケイティはスツールに向かって這い、再び姿勢を取った。

「いい子だ。どうやらスパンキングは、君のように頑固な女の子でも意図した効果を持ちうるようだ。さあ、最初の一撃だ…」

バシッ！

ストラップは以前の器具とは異なる性質を持っていた。それは木製のパドルのような重い鈍い音で着地したが、柔らかい革がケイティの皮膚を引き裂き、摩擦が追加の痛みを加えた。

意志が摩耗された今、かつて強大だったブルキーのケイティは、ストラップの最初の衝撃を感じて叫び声をあげた。「うおおおおお！ ああああああ！ ううう！」

彼女は足の指の付け根で上下に跳ね、明らかにその場に留まるために残されたすべての力を振り絞っていた。

「一回だ。次は何か分かっているな。残りを数えなさい…」

バシッ！

「ああっ！ 二回、先生！」

「よくできた。もう一度だ？」

パシッ！

ケイティは三発目を感じて後ずさりし、息を整えようと奮闘した。

ベリアルは首を振った。「君の生意気なケツは今どうだ、ケイト？」

「うあああ！ … 三回、先生！ … 痛いです、それ以外に何があるんですか！？」

「ただそれが意図した効果を持っていることを確認したかっただけだ…」

ビシッ！

「うわああ！ 四回、先生！」

「… だから今、君の生意気な態度が私から何をもたらすか分かっただろう？ 違うか、ケイティ？」

ケイティはうなずいた。「はい、先生！ スパンキングです、先生！」

「よし、よし。あと二回だ… それから悪態に対する六回、十二回から減らしたものだ… それからようやく口を石鹸で洗ってタイムアウトにできる。」

バシッ！

彼女の声は嗄れ、彼女は自由に泣き叫ぶ。「うわああああ！ ご、五回、先生！ ああ、神様！ 俺のケツが！」

ベリアルは動じなかった。「痛いだろう、ケイティ？」

彼の顔は依然として退屈と面白さが混ざった表情で、ベリアルは両手を振りかぶって、クリケットのチャンピオンのように両手で一振りした。

（米国の読者のために言えば、クリケットは魅力的なゲームで、野球によく似ているが… ああ、忘れてくれ。君たちには分からないだろう。）

ベリアルは六発目を二十四人の男の力で決めた。

バシッ！

「ああああ！ 六回、先生！」

ベリアルは鼻歌を歌った。「よくやった！ これで終わりのはずだ… ちょっと待て、この罰は不適切なパンティーを一対履いていることに対するものだ。だからもう六回だ。」

ケイティは姿勢を部分的に崩し、降参するかのように片手を振った。「一対の… お願いです、先生！ お願い、お願い、お願い！」

「慈悲を乞うにはもう遅すぎる、ケイティ。しかし姿勢を崩したことで追加のスパンキングを稼ぐには遅すぎない。」

ケイティの手は座面に戻った。ベリアルは微笑んだ。「ずっと良くなった。さて、ケイティ、驚くかもしれないが、次のセットは少し軽くするつもりだ。何しろ、君のケツを叩きすぎると麻痺してしまう。しかしペースを守れば… 君の尻は最後の一

撃の痛みを感じるのに十分な状態を保っているだろう、願わくば。一撃ごとに数を数えることを忘れずに。」

すすり泣きながら、ケイティは「はい、先生…」とつぶやき、最初の一撃が決まった。

確かに、ベリアルはケイティに痛みを感じさせるために十分な強さを抑えつつ、彼女のすでに広範な線状跡とあざのコレクションにさらなる水ぶくれを加えないようにした。ケイティは一貫したパターンで一撃ごとに数を数え始めた。四発目までに、ケイティはようやく息を整え、少なくともスパンキングをうまく終えられるかもしれないと期待する勇気を持った。

ケイティの震えが治まり始めたちょうどその時、ベリアルは微笑み、全力で五発目を決め、彼女の臀部の下部に新鮮な水ぶくれを引き裂いた。

ケイティは飛び上がり、その場で踊り、椅子は彼女の体重のすべての下で激しく揺れた。「くそおおおおおお――！」

彼女の臀筋は、自分が悪態をついたことに気づいて引き締まった。「ご、五回、先生！」

「悪態に対するリマインダーの教訓として十二回すべてが必要か、ケイティ？」

「いいえ、先生！ 口を石鹸で洗うだけで十分です、先生！」

「よろしい。これは服装規定違反に対する最後の一撃だ。そして最後の一撃が最も厳しいものだということは分かっているな。」

六回目の刺すような一撃が決まると、ストラップの先端は牛の鞭の先端のように着地し、鮮やかな紫色の跡を残した。

ケイティは、ある超暴力的な子供向けアニメの特定の猫のように、震える叫び声をあげた。「うわあああああ！」

ケイティが空中に飛び上がると、スツールの脚の一本が彼女の体重で折れ、彼女の下で崩れた。彼女は地面に折り重なるように倒れ、彼女のぷっくりとした上向きの臀部は戦争で荒廃した風景のようだった。

ベリアルは老眼鏡を引き出し、身をかがめてケイティの戦争で荒廃したケツを調べた。「おやまあ、ケイティ。学校の備品を壊すこともスパンキングの対象になるということを知っておくべきだな… しかし今日はもう十分だろう、そう思わないか？」

ベリアルが彼女の裸の臀部を優しく叩くと、ケイティは顔を上げて微笑んだ。ついに彼女は… 慈悲を示されたのか？

「だからそのスパンキングは明日に取っておこう。君にまだ残っている悪態に対する十二回の打撃と一緒にな。今のところは、窓の方を向いてひざまずき、両手を頭の後ろに組んで行進しなさい… くそ、あの石鹸をどこに置いたか？」

反射的に、ケイティは体を起こそうともがきながら、慈悲を乞う姿勢で手を組んだ。「あ、明日もス、スパンキングが？ お願いです、先生！ 私のせいじゃないんです！」

ベリアルは机の引き出しを調べながらうなずいた。「いい子だ。慈悲の乞い方を学んだな。しかしそれは明日の話だ。今のところは、ここにひざまずき、閉じたブラインドで覆われた窓の方を向きなさい。いやいや、立ち上がる必要はない。もちろん、ひざまずいて歩くんだ… ああ、あった！」

ケイティは両手を頭の後ろで組みながら、窓に向かってひざまずいて進んだ。「は？ これ以上何が——」

「大きく開け！」ベリアルは彼女の言葉を遮り、黄色い正方形の石鹸を彼女の口にしっかりと押し込んだ。それは標準的な長方形のものより幅広で、ケイティの頬は膨らんだ。彼女はまるでハムスターがニンジン全体を飲み込もうとしているように見えた。ただしそのニンジンが完全な長方形に切られていると仮定して。

ケイティの目はほとんど飛び出しそうになりながら石鹸を見下ろしたが、彼女が吐き出そうとする前に、ベリアルは一本の指でそれをしっかりと押さえ、首を振った。「あらあら！ 噛みしめるんだ、滑り落としたくないなら。その石鹸が何らかの理由で君の口を離れたら、故意に吐き出したと見なす。」

最後にしかめ面をして、ケイティは石鹸を噛みしめ、涙で潤んだ目をきつく閉じた。彼女は石鹸の破片が歯の間に擦れるのを感じ、その刺激的な味が吐き気を催させた。

ベリアルはしゃがんでケイティの尻を叩き、彼女の鼻をブラインドに押し付けた。「一時間そのままそこにいなさい。さもなければまた六回だ、分かったな？」

ベリアルが体を伸ばすと、彼はブラインドを開け放ち、彼のオフィスのすぐ外にある混雑した学校の廊下を露わにした。集まった学生たちは皆、ケイティから目をそらし、テレビを見ていた。ケイティがテレビを調べると、ぷっくりした裸の臀部と、ひざまずく女性の後頭部が見えた… だぶだぶのパンクロックTシャツを着て。

ベリアルは机からペーパークリップを掘り出しながらうなずいた。「ああ！ ヘルハイの学生たちがクラスの懲戒執行に

健全な関心を持っているのは良いことだ。眺めを遮る意味はない。」

ケイティがベリアルにシャツの後ろを留められ、彼女の裸の臀部が完全に露出されるのを感じると、彼女はテレビ画面の女性がまったく同じように露出されているのを見た。ケイティは立ち上がり、恐怖に逃げ出そうとしたが、彼女が腰から下が裸であることに気づいた。

学生たちがテレビから目をそらすように振り返ると、ケイティは壁の後ろに正面の裸を隠すために素早くひざまずいた。彼女が再びひざまずくと、バランスを崩し、窓に顔をぶつけ、黄色い石鹸が喉の奥まで押し込まれた。

ケイティはむせ始め、涙をこらえながら瞬きをしたが、石鹸が滑り落ちるのを感じた。彼女はそれを失う前にすぐに噛みしめた。顔を上げると、学生たちの群衆全員が彼女の方を向き、指を指して笑っているのが見えた。

上級生の少年が窓に親指を立てた。「おい、みんな見ろ！ ブルキーのケイティだ！ 実物だ！」

完璧な金髪とデザイナー服を着た若い女性が、自分の尻を叩きながらケイティにウインクし、他の人とは異なる明らかなハリウッド訛りで話した。「そうだよ、完全にスパンキングされた、真っ赤で生々しい実物だよ！」

「なんて伝説だ！」

「明日ここに来れば、第二ラウンドが見られると思うか？」

金髪の女性は首を振った。「ねえ、学生マニュアルを読み直してるんだ。私、ああいう風になりたくないよ。彼女は何で罰せられたんだっけ？」

中年の女性が金髪の学生の後ろに現れ、彼女の耳をしっかりとつまんだ。「服装規定違反よ。例えば… あんたが着てるもの全部ね。さあ、副主任苦悩官のオフィスに行くわよ！ ベリアルが言うには、自分でスパンキングを執行する練習がもっと必要だそうだから！」

若い金髪の女性は女性の手首を掴み、空いた手でミニスカートを履いた臀部を隠した。「ああ、やめて！ お願い、副主任苦悩官、分かってないんです。このバカな課題をやらなきゃいけなかったんです、詩的皮肉とか、何とかっていうやつを。だから全部先生のせいなんです！ それに夢中になってて、忘れて—— うわあ！ そんなに強くしないで！」

ケイティが金髪の学生が連れて行かれるのを見ていると、数人の学生がスマホを取り出して写真を撮った。カメラのフラッシュが窓に映ると、ケイティは自分の涙で濡れた腫れた顔の反射像を確認できた。鼻水が鼻から垂れ、よだれが顎を伝った。最後に、二つの厚い涙が彼女の赤くなった頬を濡らした。

ブルキーのケイティは、その瞬間から、彼女がヘルハイで伝説になることを知った。

[パート1 終]

ブルキーのケイティ、学校に叩き込まれる：

パート2：服装規定

トゲトゲしたシャグカーペットの上にひざまずいてわずか五分後、ブルキーのケイティの脚は震え始めた。窓から見える時計のおかげで、ケイティはまだタイムアウトの残り五十五分全体を務めなければならないことを知っていた。しかし時計よりも悪かったのは、オフィスの窓を通り過ぎていく学生たちの波だった。彼らは授業に向かう途中、ケイティの燃えるような赤く涙で濡れた顔をはっきりと見ることができた。数人は立ち止まり、首を伸ばしてケイティの後ろ姿を覗こうとした後、主任苦悩官を不安そうに見てから授業に向かった。

ベリアル先生は口笛を吹きながら机に戻り、ペーパークリップを整理し始めた。学生たちが授業に向かい終え、遅刻のベルが鳴ると、ケイティは安堵のため息をつこうとしたが、口に完全に詰め込まれた石鹸でむせた。時計が一秒一秒を刻むにつれ、ケイティの頭は退屈から叫んでいたが、彼女が考えを占めようとするたびに、彼女の臀部からのズキズキする灼熱の痛みがより大きく叫び、彼女の完全な注意を要求した。

ケイティが頭の中で一連のスパンキングを何度も何度も再生するにつれ、彼女は一つの燃えるような結論に達した。これはすべてベリアル先生のせいだ。いつか必ず仕返ししてやる。復讐してやる！ 彼女はこれらの言葉を、刻むチクタク、チクタクという音に合わせて、何度も何度も自分に繰り返した。

ケイティは、ベリアルが立ち上がって背後から近づいてくる音さえ聞かなかった。「君の一時間はもうすぐ終わる！ 通常、服装規定違反で罰せられた学生は、翌日に正しい制服を着用する機会を与えられる前に、通常通り授業に戻ることが許される。しかし君は実際には適切な制服を持っていないので、明日一日中繰り返しの違反でスパンキングされることを避けるために、多少の寛大さを示さなければならないだろう。だからミノス夫人が君をモールにエスコートし、規定の制服を採寸してもらう。嬉しいか、ケイティ？」

ケイティは石のように沈黙を守ったが、ベリアルが彼女の右の尻の頬を叩いた。「質問したんだ、ボルカー嬢。感謝しているか？『はい、先生』か『いいえ、先生』で答えなさい。」

ケイティはほとんど石鹸を飲み込みそうになった。「い、いいえ…」

ベリアルはケイティの左の臀部を叩いて答えた。「いいえ、先生？ それなら、そのままの格好で授業に戻るほうがいいか？」

ケイティは見下ろして、自分がTシャツとブラと片方のストッキングだけを身につけていることを思い出し、背筋に寒気が走った。「い、いいえ… 先生…」

「それなら、ミノス夫人が忙しい一日の時間を割いて、明日のための学校制服を選ぶのを手伝ってくれることに感謝しなさい。もう一度やってみよう。『はい、先生』か『いいえ、先生』で答えなさい。」

ケイティは石鹸の泡が喉を伝うのを感じて吐き気を催した。なぜ彼は自分に実際に意味のある選択肢を与えているふりをしなければならないのか？「は、はい… 先生…」

ベリアルは両手でケイティの臀部の側面を叩き、身をかがめてささやいた。「口にものを入れたまま話すんじゃない、ボルカー嬢。さあ、立ちなさい。」

よろよろと立ち上がると、ケイティは痺れを感じ、両足がとっくに眠っていることに気づいた。それから彼女はベルが鳴るのを聞いて目を見開いた。

彼女はあちこちを見回し、逃げ道を探したが、振り返るとベリアル先生が彼女の肩をしっかりと押さえていた。「ちょっと待て… 君の行動をレビューし、標準懲戒手続き書類に署名しなければならない。今日、君は私のドアをバタンと閉めたこと、悪態を使ったこと、そして罰の最中に反抗を示したことでスパンキングされた。もちろん、靴、ストッキング、ショートパンツ、パンティー、ブラジャーに対する服装規定違反も忘れてはいけない…」

ケイティは震える足でよろめき、後ろのドアが開く音を聞きながら、教室全体が講義から解放される中、ドアに手を伸ばした。彼女は肩越しに振り返り、それから懇願する目でベリアルを見つめてうなずいた。

少しの悔恨もなく、ベリアルは彼女をしっかりと抱きしめ、机から木製のヘアブラシを掴み、高く掲げた。「おや… 私ったらばかだな！ 不承認のTシャツでスパンキングするのを忘れていた。『Fuck You』？ それはひどく賢いと思ったのだろう。」

そう言って、ベリアルは回り込んでケイティの右の臀部に鋭い一撃を決めた。彼女は石鹸の向こうで怒りに燃え、その場で踊りながら、自分の巨大な体重がベリアルに容易に支えられているのを見つけた。「これで一回だ。今回は数える

必要はない。しかしじっとしていなさい。君がどれほど馬鹿げて見えるか想像してみなさい。」

ケイティは、学生たちの群衆全体が窓越しに彼女を凝視するために立ち止まるつぶやきを聞くことができたが、ヘアブラシの二発目が屈辱の考えすべてを彼女の頭から遠くへ追い払った。自分の足で立つことができず、ケイティは利用可能な唯一の支えにしがみついた：ベリアル自身だ。六発目までに、ケイティは新たな涙に変わり果て、もう一瞬も耐え忍ぶよりむしろブラックホールに消え去りたいと願うだけだった。

自分がどこにいるかを忘れて、ケイティはベリアルをきつく抱きしめ、ママとパパが来て彼女を救い、額にキスをし、すべてがうまくいくと言ってくれることを静かに願った。それからベリアルは彼女を乱暴に起こした。「もうたくさんだ。君を罰するのが私の仕事であり、甘やかすことではない。さて、我々はまだ学校の備品を損傷したことと、最初の警告の後にわいせつな言葉を繰り返し使用したことに対するスパンキングを終えていないが、今日は君をスパンキングするのにすっかり飽きてしまった。君の言う通りだった！ だからここに署名しなさい。明日、我々は中断したところから再開しよう。朝一番、最初のベルが鳴る三十分前に私のオフィスに来ることを期待している。遅れるな。」

ケイティは涙をこらえて瞬きをしながら、ベリアルがテーブルに書類を叩きつけ、退屈そうな表情で彼女の前にペンを落とすのを見た。石鹸をむせながら、ケイティはしゃっくりを始め、震える手で素早く署名し名前を印刷した。

ケイティが日付を書いた瞬間、ベリアルはポンという音とともに彼女の口から石鹸を引き抜いた。「時間を無駄にするな。君はすでに初日に二回の欠席を稼いでいる。」

ケイティは置き去りにされたショートパンツ、パンティー、そして靴を一瞥した。「は？ でも半裸だぞ！」

「実際には、そのシャツを少し下げなければ、75%近く裸だな。」

ベリアルがドアを開けると、ケイティはミノス夫人が彼女が置き去りにした場所、つまり机に座っているのを見つけた。ミノス夫人は瞬きし、その目は分厚い眼鏡の後ろで奇妙に異星人のように見えた。

ベリアルはケイティの後ろを叩いてオフィスから追い出した。「ミノス夫人、ボルカー嬢をストリップモールにエスコートしてください。彼女には完全な制服が必要です。もし彼女が何か問題を起こしたら、現場で懲戒を執行する完全な裁量権があります。もちろん、彼女が欠席した授業の時間ごとに、週末にスパンキングされることになります。しかし、寮の誓約式に間に合うように彼女を連れ戻す限り、必要なだけ時間をかけてください。」

ミノス夫人は長く塗った緑の爪をカチカチと鳴らし、ケイティの手首を掴んだ。「承知しました、主任苦悩官。さあ来なさい、お嬢さん。」

ケイティはシャツの前を押さえようとしながらどもった。「で、でも、でも！」

ミノスは手を伸ばしてケイティの露出した後ろを叩いた。「一日中暇じゃないんだよ。そして長くぐずぐずしていると、バス

に乗り遅れるぞ。どうやら制服を怠ったことに加えて、必要な教科書も購入しなかったんだろう？ いや、答える必要はない、君の顔にありありと出ている。それらも私が買ってやらねばならん。通常なら、結果を甘受させておくのだが、君の学業成績は我々の対クリスマス・ボーナスに影響するのでな。」

ケイティは硬直し、シャツを離して唯一の空いた手で臀部を覆おうとしたが、ミノスが彼女の手首を鋭く前に引っ張り、ケイティの耳をつまんだ。七フィートの身長のケイティは、小柄な秘書に引っ張られながら二重に曲がることを余儀なくされた。ミノスのハイヒールは一歩ごとにカチカチと音を立てた。

ケイティはきゃあと鳴き、慎みをすべて忘れて、ミノスの節くれだった手首にしがみつき、耳への圧力を和らげようと必死になった。しかし老婦人はケイティの巨大な筋力に完全に無頓着であるように見えた。ケイティがくすくすという笑い声を聞くと、彼女はすぐに再びシャツの前を引っ張り下ろし、激しく顔を赤らめた。「お願いです！ ショートパンツを履かせてください！」

「馬鹿なことを言うな。それは学校に適した服装ではない。それを履いていることでスパンキングされたばかりだろう！ もう一度欲しいのか？」

ケイティは首を振ろうとし、耳がしっかりと掴まれているのを感じて顔をしかめた。「嫌です！ もうスパンキングは嫌です！」

ケイティが素早くシャツへのグリップを切り替えて露出した臀部を覆おうとすると、ミノスは首を振るだけだった。「馬鹿げてる！ もちろんこれからもっとスパンキングがあるさ。我々

には守るべき伝統がある！ しかし少なくともベリアル先生は忘れがたい第一印象を与えた。ふん、お尻のことでそんなに騒ぐな。悪い子はヘルハイでいつもそのように晒されるものだ。」

それにもかかわらず、ミノスが彼女をバス停に連れて行く間、ケイティはシャツで自分を覆おうとし続けたが、引っ張るたびに前か後ろかが露出してしまった。バスの中で、ケイティはすぐにベタベタしたカラフルな座席に座った。彼女はお尻を隠す機会に非常に感謝し、刺すような痛みを無視するよう自分に言い聞かせた。しかしケイティが少年たちのグループが彼女を見てくすくす笑うのを聞くと、彼女は顔をしかめた。「ミノス夫人… もし耳を離してくれれば、もっとうまく隠せるのに… ヘルハイが悪い評判になるのは嫌ですよね？」

ミノスの老いた骨が軋みながら彼女は頭を回した。「お嬢さん、ヘルハイはこれ以上悪い評判になることはありえない。最低の道徳心を持つ学生で溢れている。君のような不届き者をどれほど徹底的に懲らしめているか示すことは、我々のイメージを向上させるだけだ。それに、君はあの尻を前に誇示したことがあるのは確かだ。」

ケイティは耳が燃えるのを感じたが、ミノスが再び彼女の耳をつまんでバスから連れ出した。ケイティは大声で叫んだ。「うわ！ じゃあ、あたしがあなたをスパンキングしたらどう思う？」

ミノスは固まり、それからケイティの耳をねじって彼女の頭をさらに低く引き下げた。ケイティが二重に曲がると、彼らは今や目線の高さになった。「私を脅しているのか、ボルカー嬢？ そんな態度はスパンキングされるぞ！」

ケイティは毅然とした態度を保つことを強いた。確かに、もしケイティが支配の階層の頂点に立つ運命なら、このホビットサイズの秘書を扱えるはずだ。「脅しじゃない！ 約束だ！ 思い知れ！ 一学期の終わりまでには、あたしが鉄拳でヘルハイを支配してやる！」

ケイティは背筋を伸ばそうとしたが、無駄だった。

ミノスは眉を上げた。「良い試みだが、校則によれば、暗黙の脅しも教師への脅しとして扱われる。衣類を一着忘れたな。」

ミノスがケイティの耳へのグリップを離すと、老婦人は若い女性のTシャツの裾を掴み、一気に彼女の方へ引っ張った。ケイティが本能的に立ち上がると、その効果は彼女自身が大切にしていたパンクロックTシャツを脱ぐのを助けることになった。ケイティは見下ろし、自分が太ももまでのストッキング一枚とブラだけを身につけていることを発見した。彼女のブラの各カップは、J・R・R・トールキン教授が想像したサウロン卿の全知の目で飾られていた。我々はトールキン教授に深く謝罪する。

それからミノスが指を鳴らすと、ケイティのブラは煙と硫黄の匂いとともに消え去った。

ケイティはくすくすという笑い声と口笛の音を聞き、広大な駐車場を見渡した。彼女は見物人の群衆が指を指し、年配のカップルが舌打ちをし、十代の若者のグループが激しくささやきながらスマホを取り出しているのを見た。

すぐに、ケイティは垂れ下がった乳房を覆った。「おい！ 何が狙いだ？」

ミノスは肩をすくめ、シャツを掲げた。「これが君を急いで店に入れる最も迅速な方法のように思えた。」

唸り声をあげて、ケイティはシャツを掴み、全力で引っ張り、裸のかかとをアスファルトに食い込ませた。ミノスはケイティの体重の四分の一もないにもかかわらず、老婦人は綱引きに動じず、ケイティのシャツがきれいに二つに裂けるまで続けた。

お気に入りのシャツの残骸であるわずかな布切れを持ち上げて、ケイティはうめき声をあげ、できる限り身を隠しながらデパートに駆け込んだ。

シャツの残り半分をゴミ箱に投げ入れ、ミノスは急ぐことなくケイティを追いかけ、ケイティのぷっくりとした赤い臀部を視界に収めるようにした。群衆が驚いて道を開け、すべての視線がその光景に釘付けになる中、それを見逃すのは難しかった。ケイティは「ユニ・フォーマリー」と名付けられた衣料品店のアウトレットに駆け寄った。店の正面には、太って不機嫌そうな漫画の猫がフォーマルなスリーピーススーツを着て、「ハマれば座る™！」と書かれた吹き出しを掲げたポスターが飾られていた。

赤毛の大学生くらいの店員がケイティを迎えようとしたが、二度見した。「ユニフォーマリーへようこそ！ どのようにお手伝いしましょう… 本日は？」

店員が彼女を凝視する中、ケイティは試着室を見つけて飛び込んだ。

すぐに、ケイティはカーテンを即席のトーガのように体に巻きつけた。

ケイティはミノスが追いつくのを待ちながらしかめ面をし、それから吠えた。「よし！ あんたの勝ちだ！ 制服を渡してくれ、着るから！」

ミノスは店に足を踏み入れながら首を振った。「そんな態度じゃダメだ。お前が命令する立場じゃない。それに、着る制服もない。明らかな理由で、まだ君のために作られていないからだ。さあ、ここに出てきて、この店員に正しく採寸してもらうんだ。」

腕をパチンと鳴らして、ミノスは店員を指さした。店員は笑いをこらえているのがやっとだった。群衆が店の窓の外に集まった。

ケイティはヌードの上にカーテンをかけたまま、試着室からつま先立ちで出ようとした。「さっさと済ませてくれ！ 人が見てる！」

しかめ面をして、ミノスはケイティの腕を掴み、カーテンから彼女を引きはがした。「さあ、これでたっぷり見せてやろう！」

ミノスは木製のスツールの上に掛かった「ユニ・フォーマリー・テーラリング・センター！ 何かを計測する必要がある時に！™」という看板を見つけた。

ミノスは自分の繊細な体をスツールに座らせ、ケイティを骨ばった膝の上に簡単に曲げ、ケイティの巨大な太ももを自分の細い脚の間に挟んで、そのパワフルな若い女性を固定した。スツールの低さのおかげで、ケイティの膝と胸は簡単に床に届いた。ケイティは拳と足で床を叩き、後ろのディスプレイ看板を蹴倒し、前のマネキンの列をドミノのように押し倒したが、ミノスは気づいていないようだった。

ケイティは息を呑む音と大笑いの声を聞き、最初の平手打ちが雷鳴のように騒音を切り裂いた。

彼女は先の懲戒セッションからの線状跡、あざ、水ぶくれがすべて燃え上がり始めるのを感じ、ケイティの声は震えた。「やめて！ いい子になる！ いい子になるから！」

ミノスは響き渡る平手打ちを決め、手を上げてゆっくりとうなずいた。「そうなるだろう、ケイティ。なぜなら、そうならないとどうなるかをこれから見せるところだからだ。」

彼女の小さな手は、標的に命中する弾丸の力と精度で、ケイティのすでに敏感な臀部に一連の刺すような平手打ちを決めた。その打撃はベリアルがケイティにしたものほど痛くなかったが、それでも十分に痛く、新鮮な熱がケイティの豊かな臀部の肉の奥深くまで浸透しているようだった。

群衆の中の女性がくすくす笑った。「どうやらプロモーションのためのドッキリみたいね。」

男性は首を振り、スマホを掲げてカメラのスローモーション設定で毎秒録画した。「そんなのどうでもいいだろ？ 俺には本物に見える！ 俺もここで買い物するかもしれない！」

ケイティは唇をきつく結んだが、ミノスの華奢な手が重い木製のパドルのように、目がくらむような力で着地するのを感じた。それは物理的な可能性の領域を超えていた。

ミノスはケイティの臀部に十数発の平手打ちを浴びせ、自分の預かり者が公衆の面前で懇願し、身をよじり、跳ね、泣くことを確実にしようと決意した。さらに十二発のスパンキングの後、ミノスはすでにその目的を達成していたが、念のため、十三発目のスパンキングも決めた。「よし、これでパン屋

のダースだ！ もう馬鹿なことはやめるのか、それともこの若い女性に仕事をさせるつもりか？」

息を切らして、ケイティは話すのに十分なほど泣き叫ぶのを止めるのに苦労した。「やめます！ もう馬鹿なことはしません！ うわあああん！」

赤毛の店員は自分のスマホカメラを掲げてくすくす笑い、自分の録画に夢中だった。ミノスは咳払いをし、店員に厳しい視線を送った。店員はごくりと飲み込み、スマホをしまった。暗黙のメッセージをよく理解していた：「君もこれを味わいたくなければスマホをしまえ。」

ミノスはケイティの尻を優しく撫で、ケイティの叫び声が柔らかな泣き言に変わるまで優しく叩いた。「よし。さあ立ちなさい、ケイティ、そしてこの若い女性に採寸してもらいなさい。」

ケイティが立ち上がると、彼女は激しくうなずき、裸の胸を上下させながら震えるようなかすれた息を吸った。赤毛の店員は巻き尺を取り出し、ケイティの方を向くために回った。「ありがとうございます、お嬢さん！ 背筋を伸ばして、腕を広げてください。数分で終わります。」

涙をこらえて瞬きをしながら、ケイティは群衆を見つけ、店員が意図的に彼女をポーズさせて、見ている観客に彼女の裸の乳房を見せびらかしていることに気づいた。ケイティは泣き言を言い、目をきつく閉じて、群衆を遮断しようとした。しかし彼らの野次と笑い声、そしてカメラのシャッター音は避けられなかった。

店員がケイティのウエストと脚を測るとき、彼女はケイティを回転させて、彼女の臀部が完全に視界に映るようにした。店員は偽りの失望を込めてため息をついたが、その笑顔は

深い満足感を明らかにしていた。「おやおや。これらの… 壮大なヒップに合う標準サイズは扱っていないかもしれません。ほとんど嫉妬しちゃいますわ… ブルキーのケイティ・ボルカー。」

ケイティは見下ろし、半分だけ忘れかけていた記憶を思い出した。「あ、あなたを知ってるの？」

答えとして、赤毛の店員は巻き尺をケイティの後ろに柔らかいパチッという音とともに叩きつけた。通常ならまったく痛くないはずだが、ケイティの尻は今特に敏感だった。それから店員はケイティのウエストに手を回して巻き尺の端を掴み、それを使ってケイティの臀部の下部の垂れ肉をほんの少し持ち上げ、その下に隠れた紫色の斑模様のあざを露出させた。「私を忘れたの？ 傷つくわ、ケイティ。私はあなたを決して忘れられない。」

それから店員は巻き尺を鞭のようにパチンと鳴らし、ケイティの痛む座面に叩きつけた。店員はミノスの方を向いた。「彼女に合うパンティーはあると思います。ファッション的には少し『時代遅れ』かもしれませんが。」

店員は、サー・ウィンストン・チャーチルが首相を務めていた時代の遺物のように見える、白いフリルの付いた青いブルマーを持ってきた。「これが当店で取り扱っている最大サイズです。試着してみますか、お嬢さん？」

ケイティは飛びついておばあちゃんパンティーを奪い取り、履いた。ケイティはそれがパチンと収まるのを感じてシューッと息を吐き、見下ろして初めてそれがどれほどぴったりと収まっているかに気づいた。フリルの裾は彼女の赤くなった臀部の上部を完全には覆っていなかった。さらに悪い

ことに、それは彼女の尻の割れ目に食い込み、振り返って見ると、ケイティは自分がTバックを履いているも同然であることに気づいた。ケイティが振り返ると、店員の口元が笑いをこらえてピクピクしているのが見えた。

「ブラウスを着ましょう。後ろで結んで… サポートを提供する必要がありますね。」

ケイティはブラウスを肩にかけて安堵のため息をついた。しかし店員が後ろのボタンをきつく留めると、ケイティはネックラインが前の胸の谷間をほとんど覆っていないことに気づいた。

ケイティはお腹を引っ込め、ボタンが縫い目から飛び出さないことを必死に願い、どんな覆いでも感謝した。

店員は優しく鼻歌を歌いながらスカートの山をめくり、タグを調べて首を振った。「すみません、脚の寸法を忘れてしまいました。足を広げて立ってください。そう、そのまま… さあ、ひざまずいて！」

ケイティがひざまずくと、何かが彼女の頭の中でカチッと鳴った。彼女は、もう一度スパンキングされたくなければ、赤毛の店員にひざまずいて自分のブーツにキスするよう命じたことを鮮明に覚えていた。「ロージー・アス？ あんたか？」ケイティは自分自身にささやいた。

赤毛の女性は顔を上げ、その表情は怒りと恐怖が混ざっていた。「私の名前はローズです。ロージーな尻を持ってるのはあなたの方だと思いますよ、お嬢さん！」ローズは最後の言葉を付け加えながら、ケイティの尻を優しく叩いた。

ケイティは自分が口に出して言ってしまったことに気づいて唇をすぼめた。もちろん！ 中等学校の頃、赤毛の女性がケイティのブーツにキスした後、ケイティはそれでも彼女をスパンキングした。「わあ！ スパンキングがそんなに嫌いなのか？ 教えてくれてありがとう！」とケイティはその時言い、赤毛のオタクの痩せた尻を露出させた。リル・ミス・スパンキー・パンツと並んで、ロージー・アスはケイティのお気に入りの常連被害者の一人だった。

ローズは一連の衣類の選択肢を掲げた。「ストッキングと、ニーソックスと、靴下、どれがいい？」

ケイティはミノスを一瞥した。「えっと… 服装規定で許されてるのはどれ？」

「どれでもいいよ、ケイティ。学生の選択だ。聞くのはいい子だな。どうやらスパンキングは、君がいい子じゃない時の抑止効果として有効なようだ。」

ケイティは口をとがらせ、それからニーソックスを指さした。「… じゃあ、ニーソックスがいいです、お願いします。」

乳児を連れた若いカップルがそれを聞いて微笑んだ。「あら！ 舌足らずだ！」と母親が言った。

ケイティは自分の声を聞いて顔をしかめた。両親が「白紙の状態からやり直す」という象徴としておむつを履かせて以来、ケイティはスパンキングの記憶が新しい時にはいつも無意識に退行するようになっていた… 先週ようやくお気に入りの十代の服装を再び着ることを許された後でも。

ミノスは立ち上がり、スカートを整えた。「昼食を取ってくる。時間があれば、この問題児が今日の授業に必要な教科書

を買ってきてやろう。ローズさん、君に責任を委ねる。彼女の尻をまっすぐに保つために必要なことは、スパンキングも許可する。すぐに戻ってくる、ボルカー嬢。」

ミノスが微笑むと、ケイティは明るい黄色い光の閃光を見たように思った。よく見ると、ケイティは震えた。「… たぶんまたカメラのフラッシュだろう」と考えた。

ケイティの長い試練の後、彼女の闘志はすべてスパンキングで叩き出されていた。彼女はおとなしく服を着ることを許した。しかしローズがほくそ笑んでいるのを見て、ケイティはしかめ面をした。「ああ、くそったれ、お前の裸で叩かれたケツを何度も見たことがないわけじゃないんだぞ。」

ローズのほくそ笑みは消えた。「動かないで。あら、何てことをしたの！ このニーソックスを破ったわね。」それからローズはニーソックスを引き上げたが、あまりの力強さに破れてしまった。

ケイティの怒りが爆発し、彼女はローズを捕まえようとしたが、奇妙な地獄の力が彼女をその場に固定しているのを感じた。それからケイティはミノスの不吉な言葉と、うっかりヘルハイの合格通知にサインした時に交わした契約書の束縛魔法を思い出した。

すぐに、ローズは爪をケイティのもう一方の脚に引っかけ、薄い布地を台無しにした。「そして今度はこれも破ったわね。とても悪い子！ ミノスさんにどれだけ悪かったか言わなきゃね。」

ケイティが地獄の炎が彼女をその場に固定しているのを感じると、彼女はその匂いの何かを認識した：それはミノス夫人の不快な香水だった。ケイティはミノス夫人が言うことに

は何でも従わなければならないことを知っていた。しかしローズにとって不幸なことに、彼女はヘルハイの職員ではなく、ミノス夫人の命令はかなり曖昧だった。強迫を無視して、ケイティはローズのシャツの襟を掴んだ。「このチビのスカンク！ わざとやったな！ おお、もう我慢ならん！」

ロージーは突然、ケイティが自分を見下ろすことを思い出してきゃあと鳴いた。「でも、その女性が言ったことは——」

木製のスツールの上に置かれたピンクッションに気づかず、ケイティは座ろうとして、飛び上がり、新たな苦痛で叫んだ。群衆も同様に新たな笑い声で轟いたが、ケイティはスツールを蹴倒した。店員の腰に腕を回し、ケイティは簡単にその少女を持ち上げて自分の側に押さえつけ、ローズの上向きの臀部をスパンキングする自由を残した。

ローズが足を蹴ると、ケイティは大笑いした。「ああ、昔みたいだ！ どうして忘れられる？『名前通りのロージー』！ 約束を守って、君の尻をいつでも素敵なバラ色に保っておくという約束を果たすのに忙しすぎたのは残念だ！ 君が10年生で転校してきて以来ずっと！」

ケイティは四角い色見本の小冊子を掴んだ。「ねえ！ 昔を覚えてるか？ 定期的に君の尻を露出させて色をチェックしてた頃を？ そしてもしピンク色じゃなかったら… バシッ！ ロージー・アス・ローズはすぐにブルキーのケイティの膝の上に戻ってた！ ああ、あの二年間は人生で最高の二年間だった！」

ブルキーのケイティがロージー・アスの後ろに鋭い平手打ちを決めるにつれ、彼女はようやく再び昔の自分を取り戻し始めた。

ローズにとって不幸なことに、彼女の店の制服は薄いコットンのワンピースで、比較的短いスカートだった。それはほとんど保護を提供せず、ケイティが簡単にローズのスカートを持ち上げる前からなおさらだった。「お前に新しい名前を付けたのが誰か、決して忘れさせないからな！」

ローズは薄いコットンのパンティーを履いており、イチゴの柄で飾られていた。

「待って、ダメだよ…」ロージーが言い始めた。

勝利の笑い声をあげて、ブルキーのケイティは全力でスパンキングを始め、ロージー・アスの叫び声を無視した。一瞬、ケイティは非常に有頂天になり… 自分がまだヘルハイの学生であることを忘れた。「そうだ！ ケツを蹴られたい時は、ブルキーのケイティを呼べ！」

そう言って、ブルキーのケイティはローズのパンティーを引き下ろした。確かに、ロージー・アス・ローズの尻はその名にふさわしい、素敵なバラ色だった。しかしケイティの鬱積した怒りですべてを以てすれば、ローズの尻が彼女のパンティーに合わせて怒ったイチゴ色に日焼けするまでに時間はかからなかった。

十代の頃の恐怖がすべて押し戻ってくるように、ロージー・アスは泣き始めた。「やめて、ケイティお願い。やめて。うわっ！ あなたの先生が—— しなきゃ—— 言った—— だった—— ああああ—— 私が責任者だったのに…」

突然、別の明るい黄色の閃光と、かすかな硫黄の匂いがあった。ローズはさらに数秒間泣き叫んだが、ケイティの打撃が弱々しく手首の力のない愛情のこもった軽打のようにしか感じられないことに気づいた。ローズが振り返って見る

と、彼女は瞬時にケイティの以前の鉄の掴みを彼女の腰から解いた。ローズは飛び上がり、激しく自分の尻を揉みながら、ケイティを見下ろしてしかめ面をした。その時初めて、彼らは両方ともケイティが今やローズよりも背が低くなっていることに気づいた。

約四フィートの身長で、ケイティは自分の小さな手と細い体躯を調べた。「は？ 俺の手がどうした？」

ケイティが自分の甲高い声を聞くと、彼女は自分の喉を掴んだ。「俺の声がどうした？ まるで血の気の多いシマリスの一人みたいだ！」

ローズは衝撃を受けたが、この機会を逃すほどではなかった。彼女はすぐに自分のパンティーを引き上げ、それからケイティの耳を掴んだ。

「あなたはとても悪い子だったわね、ケイティ（もうそれほどブルキーじゃない）・ボルカー！ そして悪い小さな女の子はどうなるか分かってる？ スパンキングされるのよ！」

ローズはケイティが蹴倒したスツールを拾い上げ、ケイティを空中に持ち上げ、スツールに座ってスパンキングのためにケイティを自分の膝の上に位置づけた。「楽しませてもらうわ」とローズはささやいた。

ケイティはローズの膝の上で蹴り、身をよじり、その声は突然幼くなった。「嫌だ！ スパンキングは嫌！」

「あら、そういうわけにはいかないわ、ケイティ、たくさんスパンキングされるのよ。あなたはずっと前からこれを受けるべきだったのよ。」

そしてその時…

パシッ！

ローズは開いた手のひらで、ケイティの古めかしいブルマーの尻の部分にしっかりとした平手打ちを決めた。

そしてまた一つ。そしてまた一つ…

ケイティは自分の窮状に気づいて叫び声をあげ、すぐに子供じみた涙に溶けていった。「うわあああん！」

ローズは偽の同情を込めてため息をついた。「あら、ケイティ、あなたの小さなお尻が痛いの？ よかった！」

さらに数発の平手打ちを決めた後、ローズは一時停止して古めかしい下着を調べた。「ねえ、何を忘れかけていたと思う、ケイティ？」

自分の質問に答えるために、ローズはケイティのパンティーの上部を掴んで引き下ろそうとした。しかしローズは特に経験豊富なスパンキングをする者ではなく、ケイティのすでに酷使された臀部の下まで引き下ろすのに苦労した。ケイティは脚を激しく蹴ったため、ブルマーは腰のすぐ下で引っかかり、彼女はほとんどローズの掴みから逃れそうになった。「やめて！ それだけは！ 裸のお尻は嫌！」

「あらあら。でも裸のお尻の方がずっと痛いんだよ…」

ローズは鋭い平手打ちを決めた。「… そうだろ、ケイティ？ 恥ずかしいってことも言うまでもないけどね。」

ケイティがその場で身をよじり跳ねると、ローズはその機会を捉えてブルマーを完全に引きはがし、ケイティの裸の臀部を喜ぶ群衆に晒した。

ケイティが悲惨さに叫ぶと、群衆は大笑いした。指を乱れた髪に食い込ませ、ケイティは頭蓋骨を叩きつけ、支離滅裂な泣き声に溶けていったが、スパンキングが彼女の叫びをさらに必死なものにした。

ローズはその瞬間に没頭し、自分のいじめっ子を苦しめるスリルを楽しんだ。しかしやがて、ローズは自分を取り戻し、母親のような口調を装った。「いい子にする気はあるの、ケイティ？ それとももっとスパンキングが必要？」

すすり泣きと息を切らす合間に、ケイティは叫ぶことができた。「はい！ はい、はい、はああい！！」

ローズはケイティを二回、しっかりとスパンキングした。「はい、もっとスパンキングが必要？」

ケイティは首を振り、長い前髪が激しく舞った。「違う！ スパンキングは嫌！ いい子にする！」

「よし。じゃあ、立ちなさい。」ローズは念のため最後の一発を加え、ケイティを立ち上がらせた。ローズが手を叩くと、彼女は二度見し、再びケイティの腰を調べた。確かに、それらは採寸時の記憶と同じくらい大きかった。「うーん、それは奇妙ね。まあ、仕方ないわ。あなたのその巨大なケツに合うように、二枚のスカートを縫い合わせなきゃね。」

ケイティはしっかりとスパンキングされた者の戦争踊りを行い、それから自分の身長の変化と裸の臀部に気づいた。彼女はすぐに学校承認のブルマーを引き上げた。

ケイティが腕を組んで口をとがらせると、彼女は見た目通り、可能な限りムカついているように見えた。「いいよ！ 好きにしろ！」

ローズはシンデレラの歌を鼻歌で歌いながら、二枚のスカートを裾に沿って切り、ケイティの腰に巻きつけた。「動かないで。」

それからローズはピンをケイティの非常に敏感な臀部に突き刺した。

その刺すような感覚を感じると、ケイティは小さな「プスッ！」という音を聞いたと確信し、硬直して空中に飛び上がり、叫び声をあげた。

ローズは恥ずかしそうに見上げた。「おや、ごめんなさい、ピンが当たっちゃいましたか？」

ケイティはしかめ面をして自分の尻を掴んだ。「わざとやったな！ もう一度スパンキングが——」

自分が再び縮み始めるのを感じると、ケイティは「スパンキング」という言葉を言い終える前に言葉を濁した。それから、彼女はおとなしく振り返って身をかがめ、手を膝の上に置いた。「… えっと、気にしないでください。仕事を続けてください。私のことは気にしないで！」

ローズは目をこすったが、確かにケイティはいつもと同じように大きくて重厚だった。肩をすくめて、ローズは作業に取り掛かった。ケイティのスカートを固定するのに六本のピンが必要だったが、ご存知の通り、そのすべてがケイティの臀部に引っかかったようだった。

スパンキングの記憶がまだ新しいうちに、ケイティはうめき声ときゃあという声をあげながらピンの刺さるのを耐え、じっと立とうと必死になった。

ローズは自分の仕事を調べて首を振った。「まあ、これであなたの… 独特な体格に対応できる幅にはなるでしょう。身長を補うことはあまりできませんね。まだ太ももがたくさん露出することになります。それがあなたの服装規定内だといいですね。もし違ったら、返品も修正も受け付けませんので！ さあ、それを戻しますね！」

ケイティはローズがミシンで作業しているのを見ながらうめいた。スカートが完成すると、ケイティは完成した学校制服を調べた。伝線したストッキング、ニーソックスの上部とフランケンシュタインの花嫁風ミニスカートの下部の間に見える隙間、そしてブラウスから飛び出さんばかりの膨らむ胸を見て、ケイティは自分が読んでいないルールブックがこれらの細部のいずれかに触れているかどうか疑問に思わずにはいられなかった。

ちょうどその時、ミノス夫人が戻ってきた。「ああ！ 素晴らしい昼食だったよ。手伝ってくれてありがとう、若い女性。ケイティは何か問題を起こしたか？」

ローズはケイティの方を向き、邪悪な笑みを浮かべた。

ケイティは首を振り、祈るように手を挙げた。「いいえ！ お願い—— 二度と—— 二度と悪いことはしません！」

世界は暗くなり、二人だけに狭まったかのようだった。ケイティはローズの心が読めるようだった。「あなたは二年間ほぼ毎日廊下で私の尻を露出させ、少なくとも週に一度はスパンキングしたわ。私の名前がロージーだったという理由だけで。」

ケイティはその真実を思い出して顔を青ざめた。彼女は自分が恐ろしいいじめっ子だったことを思い出した。奇妙なの

は、何がより悪いのか分からないことだった。自分がかつて嫌っていたまさにそのような人間であることを知ることなのか、それとも今まさに自分が当然の報いを受けようとしていることを知ることなのか。

しかしその瞬間でさえ、ブルキーのケイティは反省していなかった。彼女は悲しんでいた。いじめっ子をやめたいからではなく、いじめっ子であり続けたいのに、もうロージー・アスをいじめられないから悲しかったのだ。

それから、世界は彼らの周りに焦点を戻した。

ローズはため息をついた。「すみません、奥様、彼女は完全な悪夢でした。ずっと文句を言って騒いでいました。一度脅しさえしました。」

ミノスはケイティに厳しい視線を送った。「そのような行動は許されない、お嬢さん。キャンパスに戻り次第、主任苦悩官に報告する。ここに君の教科書がある。幸運なことに、それらをかき集める時間があった。君の忘れっぽさを両親に知らせ、その費用を君のお小遣いから差し引くように勧めるだろう。」

ミノスは重い買い物袋をケイティの腹に振り回し、息を詰まらせた。ケイティが息を整えるために二重に曲がると、ミノスはその機会を捉えて彼女の耳をつまみ、急かした。「主任苦悩官が、彼がどれだけ努力した後に、君が何をしてきたかを聞くのを待っていなさい。もし彼がオリエンテーション式典で、全校生徒の前で君を見せしめにしても、私は驚かないだろう。むしろ、そうしてほしいものだ！」

それが何を意味するか正確に分かって、ケイティは話すことさえできなかった。彼女はただ鼻をすすり、泣き崩れ、かつ

て嘲笑した「気取った制服」を着て自分がどれほど愚かに見えるかを考えた。

彼らがバスを待っている間、ミノスは自分自身にぶつぶつ言い続けた。ケイティは謝罪と約束をしようとしたが、どれも本心ではなかった。バスがようやく到着すると、ミノスは彼女をシッと黙らせ、バスに引きずり込んだ。

ミノスは首を振り、ケイティを自分の膝の上に座らせた。ケイティは小柄な老婦人に対して胸と胸が向き合うような不格好な姿勢で座った。ミノスがケイティのスカートの裾を引き上げて邪魔にならないようにすると、激怒した秘書は手を上げた。「仕方ない。主任苦悩官のために彼女の尻を温かく保つために、帰りのバスの間中ずっとスパンキングするしかないな。」

ケイティは見下ろしてどもり、何が起こるか分かっていたが、それを止めるために何もできなかった。ミノスは再びケイティをスパンキングし始め、彼女の小さな手のひらでケイティのおばあちゃんパンティーの隅々まで叩くのに懸命に取り組んだ。

たった十回の平手打ちの後、ケイティは叫び始め、ブラウスのボタンが飛び散ったが、ミノス夫人は辛抱強くスパンキングを続けた。

数人の海外からの観光客が瞬きした。「これは何かのパフォーマンスアートですか？」

地元のロンドン市民は肩をすくめた。「もしかして過激な抗議活動かも？」

バスの運転手は頭上ミラーを一瞥した。「ねえ、お嬢さん…少し静かにしてもらえませんか？」

ミノスはぶつぶつ言いながら、ケイティの腰へのグリップを解き、代わりにケイティの耳を掴んで引き下ろし、自分の膝の上に横たえ、より伝統的なスパンキングの体位にした。「いいや、この若い女性は一日中厄介者だった。彼女はずっと前からこのスパンキングを受けるべきだったんだ。今受けるんだ、それも同じだけ長くな。」

今やケイティは絶望の新たな涙を流し、ミノスがケイティを裸にし始めるのに抵抗するには疲れすぎていた。ケイティはとても巨大で、ミノスの膝の上にうつ伏せになると六席分も占めた。

バスの運転手は、自分のバックミラーを埋めるケイティの巨大な裸の臀部を見て肩をすくめた。「まあ、私がとやかく言う筋合いじゃないな。」

ヘルハイのキャンパスに戻るバスの旅は、ケイティ以外の全員にとってあっという間だった。彼らが最終目的地に到着すると、ミノス夫人はため息をつき、ケイティを起き上がらせた。「さて、君が物事を難しくしたおかげで、初日のほとんどを逃したな。補習で約七回の欠席を埋めなければならないだろう。しかし少なくとも寮の誓約式には十分間に合うだろう。もし遅れたら何が起こるか考えるだけで――」

バスのドアがシューという音とともに後ろで閉まると、ミノスは突然、ケイティに服を着直すよう命じるのを忘れたことを思い出した。ケイティは無頓着だったが、ミノスが悲鳴をあげてバスを追ってよろよろと歩き出すまで気づかなかった。「待って！ 戻ってきて！ この学生の制服が必要なんだ、さ

もなければ… ああ、ちぇっ。これで分かっただろう、ボルカー嬢？ あれだけの苦労をして、制服もなしだ。」

ケイティは突然自分の現在の窮状を完全に認識して鼻を鳴らした。彼女は詰まった鼻を通して話そうと苦労した。「…ぐっ？」

ミノスはため息をついた。「まあいいや、前進するしかないな。少なくとも、一日に二回も不適切な制服でスパンキングされることはない。それは明日の朝まで待てる。なぜなら完全に裸であることは間違いなく服装規定違反だからな。」

ケイティはバスが遠くに消えていくのに手を伸ばしたが、ミノス夫人が彼女の耳を鋭く引っ張り、門を通ってヘルハイに戻した。ケイティが最後の、勇敢だが結局は運命づけられた脱出の試みをした後、ミノス夫人は息を切らしてケイティを肩に担ぎ上げ、鋭い平手打ちを決めた。ケイティは壊れた子供のように泣き、爪をアスファルトに立てながらヘルハイの敷地内に引きずり戻された。

門がバタンと閉まると、そこには若い男女の一列が裸の臀部を晒し、白樺の束を持った角のあるサテュロスたちに差し出されている鋼鉄のレリーフが現れた。

門の上にはこう書かれていた：「Lasciate ogne speranza, voi ch'intrate.」（汝ら、ここに入る者は、すべての希望を捨てよ。）

[パート2 終]

生意気なベッキーの読書感想文:

パート1:クラス最下位

「良い尻と悪い態度を持った生意気な女の子は、スパンキングを必要としているというのは、広く認められた真理である。」

その言葉は、ペイモン先生の机の後ろの黒板に完璧な筆跡で書かれていた。彼は銀髪の眼鏡をかけた男性で、オックスフォード大学英文学部で働くほうをはるかに好んでいるように見えた。「諸君の最近の『高慢と偏見』に関する小論文の成績を持っている。よくできた者もいれば、そうでない者もいる。成績を渡し始める前に、読書課題をこなさなかったことを告白したい者はいるか? 告白は汝に赦免を与えるだろう。」彼の机の上には、『赦免』と名付けられた特大のパドルが掛かっており、与えられる準備ができていた。

ベッキー・スカイは爪を整えながら、パドルに気づかず、息を呑んでつぶやいた。彼女は完全に金髪で、完全に日焼けしており、間違いなくカリフォルニア・バレーの美人だった。「はあ… 終わってよかった。ああいうアクションアドベンチャーものは全部嫌い。私はロマコメのほうが好き! 次はもっとロマンチックなのをやれるといいな。『フィフティ・シェイズ・オブ・グレイ』みたいな。」

ペイモン先生はこの最後のコメントは聞き取れず、学生たちの名前と成績を呼び始め、ついにベッキーの名前に到達した。「ベッキー・スカイ:不可。おめでとう、君はクラスで最悪の成績を達成した。この課題に最低限の努力しか払っていないことは明らかだ。」

ベッキーは口をとがらせた。「何言ってるの？ 退屈なシーンは全部書いたわよ。ゾンビに対する偏見が悪いってことで、それを誇りに思うべきだって内容よ。」

「『高慢と偏見』にゾンビは登場しない。せめて映画しか見てないことを直接言わずに伝える方法を見つけなさい、ベッキー。それに、君は間違った映画を見た。この論文で正しく書けているのは君の名前だけだ。本を少しでも読んだのか？」

「もちろん読んだわ。表紙は読んだ。『高慢と偏見』。そういうことなら全部知ってるわ。」

ペイモン先生は眼鏡を直し、ベッキーの小論文を調べた。「君の小論文の一部をクラスに読んで聞かせたほうがいいかもしれない。彼らは君の散文を… 教訓的に感じるかもしれない。」

クラスメートの何人かがくすくす笑い始めると、彼は読み始めた。「引用する、『ダーシー氏はあんなケツなら女に困ることはないだろう。でもあの女王様ビッチには敬意を示したほうがいい。さもないと、彼女は歩く死体どもにしたように彼を打ちのめすだろう。』おやまあ、暗示だ。」

「違うよ。それはポップカルチャーの引用だ。魔法なんかじゃない。」

「うまく言ったものだ、スカイ嬢。さあ、立ち上がって教室の前に来なさい。」

鼻を鳴らして、ベッキーは席を立ち、スーパーモデルのようにパワーウォークした。ペイモン先生は机の後ろから椅子を滑り出し、彼女の方に向き直った。「ベッキー、君は明らかに

読書課題を完了していないだけでなく、それについて嘘をつき続けている。それは一回ではなく二回のスパンキングに値する。通常ならクラス全体に追加の宿題を出すところだが、私の短い残りの人生で、絶対に必要な以上に君の小論文を採点する気はない。」

ペイモン先生は腰かけ、自分の太ももを軽く叩いた。「単純で直接的な罰が適切だと思う。さあ、私の膝の上に来なさい！」

ベッキーは瞬きした。それから、ベッキーは自分の頭の上に漫画の思考吹き出しを思い浮かべた。そこには彼女の素晴らしい臀部が青いリボンで飾られた絵が含まれていた。「は？ でも私は『ヘルハイで一番セクシーなケツ』に選ばれたのよ。私をスパンキングできないわ。私はもうここで政治的な力を持ってるの。」

教室が嘲笑の笑い声で沸き起こると、ペイモン先生はほくそ笑んだ。「安心したまえ、これは君のその最も羨望される地位を強化するだけだ。」

ベッキーはひらめきの瞬間を持とうとした。それから彼女の頭の上の二ワットの電球はシューッと消えた。「何？」

「私は君に非常に、非常に熱いケツを与えるつもりだ、スカイ嬢。」突然、ペイモン先生は彼女の手首を掴み、自分の膝の上に引き寄せた。

ベッキーは自分のケツが炎上する様子を想像し、それからようやく状況の現実に気づき、彼女の思考吹き出しはぷっと消えた。

彼女はもがこうとしたが、無理やり彼の膝の上に押し戻された。「やめて！ 私はスパンキングされるには人気がありすぎるの！ お願い、クラス全員の前ではやめて！」

「公衆の面前でのスパンキングは君の人気を傷つけないよ、ベッキー。むしろ、それを高めるだろう。保証する、昼休みまでには学校中の半分がベッキー・スカイのことを、今日どれほどひどくスパンキングされたかについて話しているだろう…」

ペイモン先生はベッキーのスカートを持ち上げ、彼女の後ろ姿を覆う透明なナイロンストッキングを露わにして言葉を切った。見ているクラスからは多くの息を呑む声が上がった。合図のように、若い女性の一人が親切にもワイングラスを落としたが、彼女が英語の授業で何を飲んでいたのかは謎のままだ。

ペイモン先生は口を引き締めた。「ベッキー・スカイ… これは何だ？」

ベッキーは後ろを一瞥し、自分の後ろ姿が今やクラス全体の注目の的になっていることに気づいた。「え？ ストッキングに決まってるでしょ。今シーズンの流行よ。」

ペイモン先生はベッキーのストッキングの薄い部分に鋭い一撃を決めた。「これはタイツだ。服装規定を読まなかったのか、ベッキー？ 学生はキャンパスでタイツを履くことは許されないと明確に説明されている。靴下とニーソックスだけが許可されている。」

「痛い！ … あんた、目が悪いの？ これはストッキングよ！ タイツってのはスーパーヒーローが履くもんでしょ！ パンストを履いたスーパーヒーローを見たことある？ バカ！」

ペイモン先生は目をこすった。「うっ！『パンスト』？ ベッキー、ここは英語の授業だ。そしてその言語の名前が英語であり続ける限り、私は自分の教室で下品なアメリカの俗語を受け入れない。」

ベッキーは彼の膝の上で身をよじった。「意味わかんない！ 脚を覆ってるだけじゃない！ 何て呼ぼうと誰が気にするの？」

「なぜなら、イギリスではこれらはタイツとして知られており、タイツは厳禁だからだ。君は制服違反だ。それは追加のスパンキングを稼ぐことになる。そしてこれらが…」

彼はタイツを掴み、きついウェジーになるまで引き上げた。「… 君の尻にいくらかのクッションを提供しているので、校則は私に執行される各スパンキングの長さを倍にすることを許可している。」

それから彼はそれをベッキーの後ろにパチンと戻した。すでに、布地は伝線し始めていた。
ベッキーはウェジーからの解放を感じて息を呑んだ。「痛い！ うう！ お願い、先生！ 恥ずかしいわ！ 私のストッキングを台無しにしないで！」

眉を上げて、彼はゆっくりとタイツを下ろし始めた。「私がそれを脱がせてほしいのか？」

ベッキーは自分の臀部の上部の割れ目が外気にさらされるのを感じて息を止めた。「え？ やだ！ 裸は嫌！ 私の美しいケツは嫌！」

下着へのグリップを解き、ペイモン先生はそれらを元の位置に戻し、得意げな口調を隠せなかった。「それらで覆われて

いることで二倍のスパンキングだ、ベッキー。本当に裸でやらないのか？」

ベッキーは瞬きした。「えっと… うーん…」

それから彼女は後ろを覗き込み、自分の尻を見つめた。

三秒が経過した。

6秒。

ペイモン先生の机から、彼の古いコンピュータがインターネットに接続しようとして突然AOLのインターネット音を鳴らした。ベッキーは無理やり微笑んだ。「私が欲しいものを手に入れられるってやつはできないの？ 放課後に会って、ちょっと… 追加点数のために何かできるけど？」ベッキーは露骨に、見えないバナナを口に押し込むような手のジェスチャーをした。

ペイモン先生は別の遊び心のある平手打ちで答えた。「君は他の授業では思い通りにしているかもしれないが、ベッキー、私の授業では公平に単位を取ってもらう。ウォームアップが君に考える時間を与えるだろう。」

彼は手のひらの平らな面をベッキーの魅力的な尻に擦り付け、それから手を高く上げて彼女の形の良いケツに猛烈な一撃を決めた。

ベッキーは顔をしかめた。「うわっ！ 痛い！ 痛い！ わかった、分かった！ 読書は大事だとかそういうことね！」

「ほら、もうそんなに進歩した。六回のスパンキング全部を終えたら何が達成できるか想像してみなさい。」

ベッキーの目が見開かれた。「六回？ でも… 六回は二回より多いわよ？」

「一回は読書課題をやらなかったことに対するものだ。」

ペイモン先生は自分の文をベッキーの臀部の頂点への開いた手のひらの平手打ちで区切った。

パシッ！

「もう一回は嘘をついたことに対するものだ…」

バシッ！

「三回目は制服違反だ。」

ビシッ！

「それで三回のスパンキングだ。そして、君の尻が覆われていることで二倍になる。」

そう言って、彼は迅速で安定したペースでスパンキングを始めた。

パシッ！ パシッ！ パシッ！

ベッキーはスパンキングの合間に叫び声をあげ、尻をくねらせた。「痛い！ ちょ、ちょっと待って！ 痛い！ 知りたかったのは、服の上から一回のスパンキングができるかどうかだけだったのよ—痛い！—裸の上じゃなくて！ こんなことに同意したつもりはなかった！ ひぃっ！ 裸でやりたい！ 裸で！」

動じることなく、ペイモン先生は薄く保護された彼女の尻に激しい平手打ちを浴びせ続けた。「遅すぎた、ベッキー。残

念だが校則は、スパンキングが始まったら止めることを禁じている。」

ヘルハイの学生たちにはほとんど知られていない事実だが、各学生にはファイルがあり、教員間で共有されていた。各ファイルには、とりわけ、彼らの臀部の甘い場所の位置と最大の効果を生み出すために必要な打撃の角度に関するメモが含まれていた。他の教師たちは、ベッキーが尻に余分な子犬の脂肪を持っていることを観察しており、そのためベッキーをスパンキングするには他の女子学生よりも力を入れることが推奨されていた。また、彼女は線状跡の感覚にかなり悩まされ、それらは完璧な尻の美しさを損なう傷だと文句を言うことも記録されていた。

ペイモン先生は短い休止を取り、彼女の尻の頬をぴんと張った。ベッキーの大きな後悔に、彼女は彼の広げた指の形をした線状跡がきつい布地に対して盛り上がるのを感じた。「おお… そんな！ 校則は少し―えっと―好き放題やるための言葉は何だっけ？ そうだ！ 検察裁量！ 今回だけは簡単に済ませてくれない？」

ペイモン先生は再び本格的にスパンキングを始めた。ベッキーは各平手打ちの衝撃が力とともに増し、スパンキングのペースが速まるのを感じて叫び声をあげた。彼女は特に誰かに祈りながら、自分の策がうまくいくことを願った。「何しろ、このお尻に抵抗できる奴がいるものか？」

ペイモン先生には抵抗できたようだった、少なくとも次の五分間は。容赦なく彼はベッキーの部分的に保護されたケツをスパンキングし、彼女が叫び声をあげるまで続けた。彼は痛む手を振った。「よし、ベッキー。一回のスパンキングが終わった。何か私に尋ねたかったことがあったな？」

「ううう、なんてこった… え？ ああ、えっと… もう一方の種類のスパンキングにしてもらえますか？ 二回だけとかになるやつ？」

彼はほとんど愛情を込めて彼女の後ろ姿を撫でた。「そうだな。君は覆われていることに固執したので六回のスパンキングを受けることになっていた。一回終わったから残りは五回だ。しかし、もし考えを変えてスパンキングのために君の尻を裸にしたいなら、その数を三回に減らすことができる。」

ベッキーは激しくうなずいた。「ああ、そうする！ 裸のほうがいい！ 好きなだけ私の裸の尻を見せてあげる！」

彼は彼女の尻を軽く叩いた。「よかろう、ベッキー、立ちなさい。」

ペイモン先生は腕を持ち上げ、ベッキーに立つことを許した。「さあ、その尻を裸にしなさい、お嬢さん。」

ベッキーはパンスト／タイツの裾に手を伸ばしたが、突然クラスの残りの連中を思い出した。「ちょ、ちょっと待って！ 放課後に裸の尻を見たいって意味だと思ったのに。短い裸の尻バージョンのスパンキングを… 尻を裸にせずに受けられないの？」

「もちろんできない。君はまだ交渉しようとしているが、私は駆け引きに興味はない。君の尻を裸にし、残りの五回の代わりに三回のスパンキングを与えようとしていた。しかしもしその取引が嫌なら…」

ベッキーの手首を掴み、彼は彼女をもう一度自分の膝の上に引きずり寄せた。

ベッキーは腕を必死にバタつかせた。「やめて！ ちょっと待って！ 新しい取引をしよう！ 私が欲しいものをくれたら、あんたが欲しいものは何でもしてあげる！ 猫娘のコスプレをする！ メイド服！ スパンデックス！ あんたの変態的な小さな心が望むものは何でも！」

彼は彼女を自分の脚の間に挟んで拘束し、膝を使って彼女の尻を鋭い角度で支えた。「ルールは一度スパンキングが始まったら止めることを禁じている。そしてそれは君が私の膝の上に乗った瞬間に始まる。また、懲戒マニュアルは各スパンキングに異なる器具を使うことを推奨している。」

彼は机から木製の定規を手に取り、ベッキーの顔の前にぶら下げた。「これで十分だろう。」

ベッキーは定規を見つめた。「やめて！ 何が欲しいの？
胸？ ケツ？ 足の写真？」

「私が欲しいのは、ベッキー、君が読書課題を終えていることだ。しかし君は終えていないので、私は君が適切に懲らしめられることを確実にするつもりだ。」

そう言ってペイモン先生は定規をもう一方の手に持ち替え、ベッキーの後ろ姿に確かな一撃を決めた。

バシッ！

「うわあ！ じ、じゃあ、補習課題をやったらどう？ えっと、創作作文をやる？ 物語がどう感じたか絵を描いてもいいよ？ ひえええ！」

「ここは美術の授業じゃない、ベッキー。ここは英語だ。そして君がこれから受けるものを英語で言うと、さんざん叩きのめされることだ！」

ゆっくりと、慎重に、ペイモン先生は定規で確かな一撃を加え始め、ベッキーのタイツで覆われた臀部を下に向かって進んだ。それぞれが完璧に重ならないように重ねられたが、ベッキーの臀部の一インチも逃さなかった。彼は定規の腕前に誇りを持っていた。「二度測って一度切れ」と彼は考えた。

ついに彼が彼女の頬の下部に達すると、彼は彼女の臀部の下部に二回目の一撃を加え、逆の順序でプロセスを最初からやり直し、それぞれの新しい赤い跡を直前のもののすぐ上に残した。

ベッキーはタイツに対して熱が上がるのを感じて叫び声をあげた。「うわあ！ なんてこったあああ！」

彼女のタイツと規定の学校パンティーはほとんどクッション効果を提供しなかった。ベッキーは自分のかろうじてあった首尾一貫性を失い、各打撃の間にどもり始めた。

ペイモン先生は定規でさらに一連の打撃を加えながら眉を上げた。「バレーの娘にしては思ったよりタフだな。もうスパンキングに慣れてきたのかもしれない」と考えた。

ベッキーは悲鳴をあげ叫んだが、まだ一滴の涙も流していなかった。

不満のうなずきとともに、ペイモン先生は定規を脇に置いた。「それが二回だ。さて、ベッキー、あと四回のスパンキングが欲しいか、それとも尻を裸にして合計を三回に減らしたいか？」

彼女はシューッと息を吐き、スパンキングの痛みがすぐに恥ずかしさへの恐怖を克服した。「四回… 三回… 待って、裸

にすればスパンキングが少なくなるんだろ？ わかった！ わかったよ、完全に尻を裸にする！」

微笑んで、ペイモン先生はその機会を利用してベッキーの靴を脱がせ、彼女が後ろで足を蹴る間、彼女の繊細な足を賞賛した。ついに、彼は彼女を膝の上から立たせた。「立ちなさい。」

彼は立ち上がり、部屋の反対側の隅にある木製のスツールを指さした。

「さあ、タイムアウト用の椅子の上に立ちなさい。」

「え… 立つ？ でも… スツールは座るものじゃないの？」

彼は一回の激しい平手打ちを、ベッキーの後ろ姿の中心に正確に決めた。

ベッキーはきゃあと鳴き、その場で跳ねた。

ペイモン先生は腕を組んだ。「従わなければ、やり直すぞ。それがいいか？」

ウサギのように跳ねながら、ベッキーは跳ねながらスツールの上に上がった。「ひぃっ！ いいえ、先生！ わあ… 私はとても従順です、見てください？」

ペイモン先生はため息をつき、机に向かい、引き出しを漁った。「よし。君は、私が君の臀部を懲らしめるのを妨げる可能性のある衣類を脱ぐことで、悔恨を示し続けることができる。具体的にはスカートとパンティーだ。」

うなずいて、ベッキーはパンティーとスカートを脱ぎ、気軽に脇に投げた。それから彼女はブラウスの前を結んで腹筋を露出し、スツールの上で不安定に揺れた。

それから、誰かがくすくす笑うのを聞き、突然、ようやく、彼女はクラスが見ていることを思い出した。「うっ… 少なくともこれが最後のスパンキングだ！」

優雅に、ペイモン先生はベッキーの脱ぎ捨てられた服を拾い上げた。「馬鹿なことを言うな、スカイ嬢。君には三回の裸の尻スパンキングが残っている。」

ベッキーは硬直した。「え？ でももう二回くれたでしょ！ 三引く二は一よ！」

クラスの残りは、ベッキーの状況の皮肉に徐々に気づきながら、くすくすと笑い始めた。

ペイモン先生はベッキーのスカートとパンティーを机の引き出しにしまった。「それは君が頑固で、尻を覆ったままにすることを主張していた時のことだ。代わり案は裸での三回のスパンキングだったので、それが君が受けるものだ。」

「え？ それは不公平よ！」

「完全に公平だ。私は約束したものを正確に与えている。」

ベッキーは足を踏み鳴らし、立っているスツールを倒しそうになった。「わあ！ そんなの、くそくらえ！ そんなこと知ってたら、尻を裸にするなんて絶対に承諾しなかったわ。六回のスパンキングをくれ、このクソ野郎！」

ペイモン先生は引き出しをバタンと閉め、深く息を吸い込んだ。「お望み通りに、スカイ嬢。」

ベッキーは鼻を高く突き上げた。「よし！ じゃあ、服を返して。」

彼は二番目の引き出しを開け、石鹸の箱を取り出した。「ダメだ。それは我々の取引の一部ではない…」

「何の取引？」

「君は六回のスパンキングを求めた。だから私は喜んで応じる。しかしその前に、その毒舌について何かしなければならない。」

彼は手を伸ばし、人差し指と親指でベッキーの耳をつまんだ。彼女は後ろに反り、ほとんど転げ落ちそうになった。「ひぃっ！ ちょっと待って、放課後にウサギのコスプレで会うっていう取引のことだと思ったのに！」

「違う。君は六回のスパンキングに戻るように求めた。だからそれをやる。つまり、あと四回だ。しかし、明るい面を見なさい…」

手首をひねって、彼は彼女の頭を強制的に回転させ、クラス全員が彼女を見ているのを見せた。何人かの男子生徒は笑いをこらえるために拳を口に突っ込んでいた。「… 君は今、クラスで一番人気の女の子だ。」

ベッキーの膝が震え、彼女はスツールから落ちそうになった。「気をつけて！ 私をケツから落とすつもり？」

「それなら飛び降りろ！」彼は空いた手で彼女の後ろに一発を決めた。

ベッキーは叫び声をあげ、スツールから後ろに飛び降り、自分の尻を掴んだ。それから彼女はその場で踊り、それを揉んだ。

ペイモン先生は舌打ちをした。「チッチッ。許可なく揉むのか、ベッキー？ そんなことは分かっているはずだ。そしてその罰則も分かっているはずだ！」

ベッキーは固まった。「え？ 罰則？ でもホッケーとこれに何の関係が？」

「ホッケーが何か知らないし、知りたくもない。私はスパンキング中の許可なき揉みに対する罰則のことを言っている。よく考えろ、ベッキー。それが何か思い出せるはずだ！」

ベッキーは突然、自分が腰から下を裸であることに気づき、股間を覆った。「えっと… すごくダサくて恥ずかしいものを着なきゃいけないの？ 去年の夏のコレクションみたいな？」

「実際、今日の残りの時間をその格好で過ごさせるのが適切だと思う。」

彼女は見下ろした。「でも… 私は何も着てないわ？」

「しかしそれが君を男子に人気にすると考えてみなさい。さて、どこまでいったかな？ ああ、そうだ！ 罰則だ！ 君の尻を揉むことは、君の六回のスパンキングを最初からやり直さなければならないことを意味する。つまり、君のお気に入りの器具を再利用することもできる…」

彼はベッキーの耳を引っ張って机に連れて行き、木製の定規を掴んだ。ベッキーはその恐ろしい定規を見て目を見開いた。「嫌！ それは一番嫌いなやつだ！」

「その通りだ。」

ベッキーは頭を後ろに倒し、天に向かって泣き叫んだ。「うわあ！ このひどい学校は大嫌いだ！」

ペイモン先生はベッキーの手を股間から引きはがし、彼女に身をかがめて机に体重を預けるよう強いた。地獄の炎が火花を散らして燃え上がり、ベッキーの臀部を覆った。悲鳴をあげて、彼女はすぐに適切な姿勢をとり、罰の適切な標的を提示するために臀部を突き出した。

ペイモン先生は定規を高く掲げた。「学校を好きなだけ嫌うのは自由だが、嫌っている間は快適に座ることはできないだろう。」彼は再び系統的に定規で新しい一連の平行な打撃を加え、ベッキーの今や裸の臀部にきれいな赤い線を重ねた。

パシッ！ パシッ！ バシッ！

「うわあぁ！」ベッキーの決意は、痛みよりも苛立ちから崩れ始めた。しかし地獄の炎が消え始めるのを感じると、ベッキーは自分の尻を突き出し続けることを強いた。せめてそれ以上燃えないようにするために。

定規の別の一連の打撃を終え、ベッキーの臀部を上から下、下から上へと覆った後、ペイモン先生は定規を置き、机の引き出しを開けた。「この器具は有望に見える。どう思う、ベッキー？」

彼は短く丸いパドルを彼女の目の前にぶら下げた。

ベッキーは怒りに燃えた。「おい、そんな！ 定規だけでも十分ひどかったのに！」

「定規も評価しているが、同じものを二回使うわけにはいかない。これは君が同意した六回の裸の尻スパンキングの二回目だ。どうやら君は文学作品と同じくらい口頭契約にも無頓着なようだ。」

そう言って、彼はパドルをベッキーの右の頬にしっかりと打ちつけた！ 彼女はその場で踊り、後ろに足を蹴り上げた。「うわああ！ これって、ケツへの暴行と傷害、とかいうやつだ！」

隣の音楽の授業から、鈍いリムショットの音が聞こえた。「バ・ドゥム・チャ！」

それに応えるかのように、ペイモン先生は自分自身の打楽器を演奏し始めた。ただしこの場合は、尻のボンゴだった。ベッキーは適切な歌詞の伴奏を披露した。たとえ彼女は言葉を即興で作っていたとしても。

彼女は隣で演奏されている「オー・ダニー・ボーイ」に合わせて泣き叫んだ。「おお、なんてこった！ 私のケツ！ 私のケツがヒリヒリする！」

「おやおや、なんて大騒ぎだ、スカイ嬢！ この調子だと、六回のスパンキングが終わる頃には、アルバム一枚分の素材ができるだろう。」

クラスの最前列から、若い女性が発言するために手を挙げた。彼女はスウィフティ・カルトのメンバーであることを示す許可されていないピンを着けていた。「『拷問された尻の部門』って呼べるんじゃない？」

ペイモン先生は目を細めながら、ベッキーをより激しく、より速くパドリングした。「口を挟むな、アメリカーナ嬢、さもないと次は君の番だ。」

この時点で、ベッキーは支離滅裂な叫び声に成り下がっていた。

「うわ。うわあ！ うわああ！」彼女の悲しげな叫び声には、隣の教室からの哀愁のあるトロンボーンの音が伴っていた。

ペイモン先生は承認の音を立て、パドルを脇に置いた。「さて、スカイ嬢、これで裸の尻スパンキング二回が終わり、あと四回だ。どうやらようやく君に通じ始めたようだ。確かに君は素敵な赤色になった。両方の端がね。さて、次のスパンキングの準備はいいか？」

彼女は泣き叫ぶ裸の尻の赤ん坊のように泣きじゃくり、彼の言葉を理解すると、ひざまずいて彼の靴にすがりついた。「お願いです先生、慈悲を！ 私のケツはこの虐待に耐えられません！」

「さて、君は腰から下の服はすべて犠牲にした。もし私が慈悲を示すことを望むなら、他に何を差し出せる？」

「えっと… 永遠の感謝？」

クラス全員が大笑いした。ペイモン先生でさえ笑った。「すまないが、興味ない。では次のスパンキングに移ろう。」

彼は彼のスパンキング道具が入っている底なしのように見える引き出しを開け、漁り始め、ベッキーに考える時間を与えた。

ベッキーの頭の上に別の二ワットの電球が現れた。「待って… あんたは私にトップスを脱げって言ってるの？」

ペイモン先生は小さな引き出しから信じられないほど長いケインを取り出し、それから腕を引き出しの中の無限の虚空に戻した。「うーむ… 君はスパンキングを逃れるために、完全に裸になるつもりだと言っているのか、ベッキー？」

ベッキーは自分の豊かな胸を見下ろし、次にくすくす笑う学生たち、次に自分の赤い尻、そして最後に彼を見て、唇を震わせた。「お願い… もうスパンキングは嫌！」

ペイモン先生は三本の舌を持つ革のストラップを取り出し、ベッキーの前に立つために歩いていった。「ここはヘルハイだ。もうスパンキングはないというのはありえない。しかし、今日の残りの時間を裸で過ごすことに同意するなら、次のスパンキングは免除してやろう。」

ベッキーの唇が震えた。「わかったああ…」

ペイモン先生は回り込んでベッキーの後ろを撫で、それから彼の硬くなった手のひらを彼女の皮膚の水ぶくれのように熱い表面に擦り付けた。「うーむ、確かに学校一の熱いケツだ！」

身をすくめて、ベッキーはマッサージによって提供された短い安堵を味わい、それから後ろのくすくす笑いを聞いて頭を垂れた。

ゆっくりと、彼女はシャツの後ろのボタンを外し始めたが、ペイモン先生が彼女の手を掴んで止めた。「クラスの方を向きなさい、ベッキー。君は彼らに教訓を提供しているのだから、良い眺めも提供したまえ。」彼は彼女の臀部の下部に平手打ちを加えてその要求を強調した。

ベッキーはかかとで踊り、くるりと回った。「ひぃっ… はい、先生！」

クラスの方を向いて、彼女はトップスを裸の肩の下に落とし、デザイナーブラを露わにした。

ペイモン先生は優しく言った。「おやまあ、ベッキー… そのブラは承認された制服リストにはないと思うよ。」彼の声は含みで重かった。

ベッキーは緊張した。「ああ、ダメです、先生！ あなたが言ったことは全部やりました！ まさか、そんなつもりじゃ…」

彼は彼女の尻にしっかりとした愛情のこもった軽打を与えた。「もう一回スパンキングか？ それが服装規定違反に対する唯一の適切な罰だ。君がそのブラを着ている限り、君は制服違反だ。もちろん、違反している衣類を脱ぐという選択肢はいつでもある。しかしそれが何を意味するかは分かっているな…」

笑い声の叫び声の中で激しく泣きながら、ベッキーはゆっくりとブラの後ろの留め具を外した。それが落ちる直前に、彼女は片手で胸の前を叩いて押さえ、泣き言を言った。「お願いです先生、お願いです——」

ペイモン先生は彼女の裸の尻に激しい平手打ちを加えて彼女の抗議を遮った。「覆うな！」

彼は彼女の前を指さした。「ここも同様だ。両手を頭の上に置いて、クラスメートに交代を見せなさい。愚かで、生意気な、間抜けな女の子がどんな姿か見せてやれ。」

ゆっくりと、ベッキーは従った。彼女が回り終える頃には、彼女は鼻をすするようになり、絶望して泣き出した。

ペイモン先生は時計を確認し、彼女が彼の声を聞くのに十分なほど泣き止むのを待つために数瞬を与えた。「さて、喜ぶだろうが、我々の合意は成立する。一日中そのままでいることに同意する限り、次のスパンキングは免除してやろ

う。悲しいことに、君にはまだ四回のスパンキングが残っていた。君が英語と同じくらい数学も得意でないことは疑わないが、四回のスパンキングから一回を引くとどうなる？」

純粋な恐怖で、ベッキーはあごを落とした。「三回のスパンキング！」

「ほら、引き算ができるじゃないか。適切な動機付けが必要なだけだ。毎回の授業でこのようにスパンキングすべきだな。」

涙が滝のようにベッキーの顔を流れ落ちた。「なぜ宇宙は私にこんなことをするの？！」

「なぜなら君は宿題をやらずに嘘をついたからだ…」

ベッキーは足の指の付け根で跳ねた。まるで逃げ出そうとしているかのように、しかし一箇所に閉じ込められたままだった。「嘘なんかついてない！ タイトルを読んだって言っただけよ！」

彼は再び座り直し、広く微笑んだ。「君はまた、これらがタイツではないと主張した。それは見え見えの嘘だった。そして見え見えの嘘つきは裸の尻のスパンキングを受けるのだ。」

ベッキーは怒りで跳ね、おっぱいを揺らした。「でもママはストッキングって呼んでるの！ 本当にそうなの！ 覚えてる、だってアメリカではそれを履いちゃダメって言われたから！ 家に帰りたい！ うわああ！」

それから彼女はつまずき、転び、前に倒れ込み、ちょうど彼の膝の上に着地した。

ペイモン先生は遊び心を持って彼女の尻を叩いた。「君の粗野なアメリカの話し言葉の試みに対処する必要がある。君の教育に対する親のサポートについて話し合うために、君の母親を私のオフィスに招待しよう。しかしその前に…」

彼は開いた手のひらでベッキーの敏感な臀部を叩き、彼女が跳ねて叫ぶ間、彼女の腰のあたりを押さえた。「うわ！ わあ！ うおお！」

隣の音楽の教室で、トロンボーンがベッキーの叫びに三つの哀愁のある音符で応え、まるでベッキーの窮状を嘲るかのようだった。

今やベッキーは完全に支離滅裂な涙に溶け込み、彼女の尻が再びしっかりとスパンキングされる間、手足をバタつかせた。

ついに、ペイモン先生は罰を一時停止した。「これ以上問題を起こすつもりか、お嬢さん？ なぜならもしふざけたり隠そうとしたりしたら何が起こるか分かっているな？」

ベッキーの学力のなさを考えれば、彼女が何が起こるか分かっていなかった可能性は十分にあったので、ペイモン先生はその質問を彼女の非常に赤い頬への三回の素早い平手打ちで強調することを選んだ。

ベッキーは悲鳴をあげた。「嫌、嫌、嫌ああ！」

しかし彼は響き渡る平手打ちで彼女の最後の引き延ばされた叫びを遮った。彼女は息を呑み、それからおずおずと彼に質問を繰り返すよう頼んだ。彼がそうした後、彼女は自分の答えを考えるために立ち止まった。「私… えっと、もっとスパンキングをもらうの？」

「それが今日一日で君が正しく言った最初のことだ、お嬢さん。さあ立ち上がって、まっすぐ洗面台に行きなさい。」

彼は机から石鹸の箱をすくい上げ、クラスの後ろをしっかりと指さした。

ベッキーは笑っているクラスメート全員の前を裸でよろよろと通り過ぎた。「洗面台？ まさか… シンクでスパンキングするつもり？」

ペイモン先生はベッキーの脇を通り過ぎて水を出した。「違う、ベッキー、シンクでスパンキングするつもりはない。それは馬鹿げているし、非常に非現実的だ。我々は君の口を良質のイギリス式石鹸で洗うつもりだ。」

「でもどうして？ 悪い言葉は使ってないわよ。」

ペイモン先生は石鹸を泡立てながら首を振った。「私を信じなさい、君の粗野なアメリカの舌で十分だ！ 私が君を終わらせた後には、物事を正しい英語の名前で呼ぶことを知るだろう。そして適切な場所に『U』を入れられるようになる。」

彼が石鹸を放すと、それは空中に浮かび、ベッキーの恐怖に引きつった顔に向かって浮かんだ。

ベッキーはどもったが、石鹸が親切にも彼女の口に飛び込んだ。「ば—— んっ！」

ペイモン先生は肩を揉んだ。「おやまあ、私の腕は休憩が必要だ。こうしよう、ベッキー、残りのスパンキングの代わりに、君に書き写しをさせることにしよう。それがいいだろう？」

石鹸の泡が石鹸から滴り落ちた。「書、書き写し？ はい、お願いします！」

ペイモン先生は彼女を回転させ、彼女の後ろを叩いて前に押し出した。「よかろう。クラスの前に戻りなさい、ベッキー。黒板の前に立ち、次の文章を百回書きなさい:『私は愚かで、空っぽな頭の金髪女だ。』そして隠すな！」

彼女は泣き言のような声を出したが従った。彼女が「私は愚かで、空っぽな頭の金髪女だ。」と書いている間、彼女は自分がどれほど馬鹿げて見えるだろうかと考えた。

ベッキーはそこに立ち、目から涙を、口から石鹸を滴らせながら、美しい全裸のバート・シンプソンのように文章を書く以外の選択肢はなかった。しかし彼女は安堵感を感じた。「少なくともこれはもうすぐ終わる！」とベッキーは思った。

もちろん、もし彼女が本当に考えを巡らせていたなら、ベッキーは文章を書き終えた後でも、まだ一回のスパンキングが残っていることに気づいたかもしれない。

ペイモン先生が定規と丸いパドルを慎重に脇に置き、彼の底なしのように見える引き出しの中の他の器具を考えている間、ベッキーは「喜んで」書き続け、後ろで何が起こっているか気づかなかった。

ベッキーが約十回の繰り返しを書いた後、ペイモン先生は彼女の進捗を確認するために顔を上げた。「くそっ、ベッキー、君の字は読みにくいし、この調子なら一日中ここにいることになる。最後のスパンキングを今与えて、残りは放課後に書き終えさせるしかないな。」

ベッキーは硬直し、振り返ってひざまずいた。「で、でも、わ、私、約束したじゃないですか！」

「まずはこの石鹸が君の粗野なアメリカ訛りを洗い流したか見てみよう。」

彼はベッキーの口から石鹸をポンと抜き取った。ベッキーが話し始めた瞬間、彼女はBBCの時代劇からそのまま出てきたような、間違いなく旧式のコックニー訛りで話した。「おい！ でも、それは不公平だぜ、お頭！ 書いたぜ、全部、あんたが言った通りに！」

彼は再びベッキーの耳をつかみ、彼女を教室の洗面台に連れて行った。「おやまあ。これは単なる石鹸洗い以上のものが必要だな。」

隣では、音楽の授業のトロンボーン奏者が協力的に緊張した『うおおおおお』という音を提供し、クラスはベッキーの進路を追うために首をひねった。彼らが洗面台に着くと、ペイモン先生は石鹸を水に浸した。

「心配するな、スカイ嬢、すぐに君は国王陛下の英語を話せるようになる。さあ、大きく開けて…」彼の要求を容易にするために、彼はベッキーの耳を離し、裸の生意気娘の尻にしっかりとした平手打ちを加えた。

ベッキーはその場で跳ね、叫んだ。「ああ！ 私のくそったれな——」今や濡れて泡立った石鹸がベッキーの口にしっかりと挿入された。ペイモン先生は空いた手でベッキーの鼻をつまみ、石鹸を前後に動かした。「これが終わったら、君は可愛い小さな天使のように話せるようになる。さあ、親切に舌を石鹸の周りで転がしなさい。泡が隅々まで行き渡るように。」

泡と泡がベッキーの口から溢れ出ると、彼女は明らかにイギリス式にぶつぶつ言った。「むす、ふりる？ んん、あ、むんふ、ふんん？」ペイモン先生は石鹸を取り除いた。

「吐き出しなさい」と彼は指示し、洗面台を指さした。ベッキーが身をかがめて石鹸の泡でむせると、クラス全員は彼女の後ろ姿の素敵な眺めを楽しんだ。ベッキーは痰を吐き出し、哀れっぽく彼を見た。「お願いです先生、もう十分に罰せられたんじゃないでしょうか？」

ついに、それは完璧な国王陛下の英語だった。

「さて、訛りは直ったが、君にはまだもう一回スパンキングが残っている、ベッキー。怠惰と傲慢の罪を告白し、赦免を求めるつもりはないか？」彼は自分の机の上に掛かった大きな彫刻のパドルをずる賢く一瞥した。

ベッキーの目は希望に輝いた。「おお、良い先生、本当に仰るのですか？ 誠に？ もし告白すれば、最後のスパンキングを免れていただけるのですか？」

「もちろん違う。読めないのか？ そのパドルの名前は『赦免』だ。いずれにせよ、君はそれを味わうことになる。」

ベッキーはパドルを見つめ、ゆっくりと二と二を足した。それから、突然、彼女は厚いスコットランド訛りに滑り込んだ。「え？ 蛇のような舌の悪党め！ おお、お前が何を企んでいたか知っていたら、一言も告白しなかったぞ、この裏切り者の老いぼれめ！」

ペイモン先生はしかめ面をした。「スコットランド語？ 正直なところ、ベッキー、君は英語の訛りが何かも知らないほど愚かなのか？ 基本的な地理の補習授業が必要なようだ。」彼

女の耳をつまんで、彼は彼女をつま先立ちに持ち上げ、彼の机に引きずり戻す間、彼女に続いて這うように強いた。

ペイモン先生は長い木製のパドルをその台から取り出し、回転させてベッキーに彫られた名前を近くで見せた:「赦免」。「また、君が私のパドルを忘れたとしても、それは私のせいではない。私は授業の最初にそれに言及した。」

ベッキーは導かれながら無駄にもがいた。「この大きなクソ野郎！ お前の目をえぐり出してやる！」

「先生を脅しているのか、ベッキー？ なぜならそのような野蛮な行動に対する罰則が何か正確に分かっているはずだ。」

ベッキーは文字通り発作を起こしそうだった。彼女の訛りは今や大英帝国に曖昧に関連する多数の植民地を「自由奔放に」渡っていた。今のところ、彼女は明らかにオーストラリア訛りに聞こえた。「好きにしろ、このクソ野郎！」

「お望み通りに、スカイ嬢。」ペイモン先生は彼女を机の上に持ち上げ、尻をクラスに向け、パドルの長い両手用の柄を握った。

ベッキーは立とうともがいたが、まるで彼女の手が机の天板に瞬間接着剤で貼り付けられたかのようだった。彼女は悪態をつき、今度はアイルランド訛りに滑り込んだ。「やめて！ このクソ野郎！」

野球選手のようにスイングをテストした後、ペイモン先生はパドルの猛烈な一振りを加え、それは簡単にベッキーの臀部全体を覆った。ベッキーが最初の衝撃を感じた後、彼女

は一瞬呆然とし、それから叫び声をあげ、かかとで跳ね上がり、遅れた反応で脚を蹴った。「なんてこったああ！」

「ああ、見ろ、それはずっと良い発音だ！ さて、連合王国とグレートブリテンの区別を叩き込めるか見てみよう。自分のためになるなら、ゲール語の表現はもうやめるんだな。」

彼は再び彼女を打ち、反響する雷鳴を生み出した。

二回のスパンキングの後、ベッキーはついに正しいシェイクスピア英語を再発見したようだった。「おお！ お願いします、先生！ 慈悲を！ もうたくさんです！ ううううう！」

「ああ、見ろ、適切な進歩が見られた。明らかに問題の核心に迫っている…」

バシッ！

「うわあ！ ああ、悲しきかな！ 我がケツよ！」

「いい子だ。これからは宿題をするつもりか？」

パシッ！

ベッキーはパドルでケツを平らに押し付けられて悲鳴をあげた。「は、はい！ はい、先生！」

「そして私の黒板に、読みやすい字で文章を書くつもりか？」

バシッ！

ベッキーは額を机に叩きつけた。「はい！ します！ します—— ううう！ し、します！」

「そして今日の残りの時間、制服なしで過ごすつもりか？」

バシッ！ バシッ！

ベッキーが最初の質問に答える前に、ペイモン先生は素早く二回目のパドルの一撃を加えた。「そして隠さない？」

ベッキーはパドリングの累積効果が燃え盛る尻の焚き火にまで高まるのを感じて叫んだ。「わかった、はい！ ううう！ はい、はい、何でも言う通りに！」

「さて、私は宿題をすると言った！」

バシッ！

「うああ！ はいはいはい！ 何でもします！ ううう！」

「よかろう、ベッキー。あの黒板に戻って文章を続けなさい。君の母親に手紙を書くつもりだ。そして彼女が学校でのスパンキングは家庭でのスパンキングを意味するというルールを徹底することを願っている。なぜならそうすれば君にはさらに六回が待っているからだ…」

「は、はい… 先生…」鼻をすすりながら、ベッキーは黒板に向かい、文章を書き始めた。彼女の筆跡は相変わらずひどかった。震えながら、彼女は十一回目の繰り返しを書き始めた:「私は愚かで、空っぽな頭の金髪女だ。」

ペイモン先生はそれを見て舌打ちをした。「おやまあ、ベッキー。君の字はまだひどい。君をよりきれいに書くように動機付けるために、何ができるだろうか？」

彼は彼女の後ろに優しい愛情のこもった軽打を与え、クラスの楽しみとなった。

ベッキーは硬直し、それから鞭で打たれた子犬の目で先生を見上げた。「えっと… 余分な書写の宿題をくれますか？」

「そうしたいところだ。しかし、ベッキー、君に宿題を任せられないだろ？」

彼は再び彼女の尻を叩き、彼女の熱い尻の頬を一つずつ絞った。二つの涙が彼女の顔を伝った。絶望の中で、彼女は話すことさえできなかった。

ペイモン先生は彼女に最後のひとつまみを加え、彼女の尻の子犬の脂肪をひねり、それから彼女へのホールドを解いた。「しかし君は六つの適切な罰を受けたし、私の腕も疲れてきたようだ。放課後に君を残して、補習できちんとした書写を練習させなければならないだろう。私は君を非常に注意深く監視するつもりだ。」

彼女は安堵のため息をついた。「はい、先生。」

しかしその日の後半、ベッキーが馬鹿の帽子以外何も身につけずに硬くて頑丈な木製のスツールに座っていると、彼女のズキズキする尻は、これが結局彼女の最良のアイデアではなかったことを鮮明に思い出させた。

十二回の試行の後、彼女はようやく読みやすいと判断される筆跡で自分の文章を書き写し、残りの文章を書き続けることを許された。それから、ペイモン先生は彼女に『高慢と偏見』のコピーを手渡し、彼が次のバッチの読書感想文の採点を終える間、隅っこに座るように命じた。

不安そうに肩越しに振り返りながら、ベッキーは自分の席で落ち着かずにじっとしていた。ペイモン先生は親切にも彼女に粗いスコッチブライトパッドを「座布団」として与えていた。

顔をしかめながら、ベッキーは本の表紙に描かれた男女を調べた。それはBBCのテレビドラマ化の公開に合わせた

1990年代の版だった。「へえ。彼はなかなかイケメンじゃない。魅力は分かるわ。」

そしてこうして、ベッキーは読み始めた。

[パート1 終]

生意気なベッキーの読書感想文:

パート2:蛙の子は蛙

ヘルハイのラテン語の教室で、ベッキー・スカイは学校制服を着て教師の机の縁に腰掛けていた。彼女のスカートは洗濯ばさみで留められ、素朴な空色の学校パンティーに包まれた元気な臀部が露わになっていた。ベッキーの愛用のタイツは見当たらなかった。この五日間、それが彼女がほぼ着用していたすべてだった。

尖った馬鹿の帽子が彼女の頭の上にあり、彼女は罰として黒板に文章を書き写すのに忙しかった。何度も何度も、彼女は震える手で「私は職業訓練にもっと努力しなければならない」という言葉を黙って書き続けた。

ベッキーのすぐ隣に座って、ヘルマスターは机の上で前のめりになり、黄色い目の端から若い女性の震える臀部をじっくりと観察した。彼は老いた男で、非常に痩せて、非常に背が高かった。

ドアをノックする音がした。ベッキーは硬直したが書き続け、ヘルマスターは微笑むだけだった。「入れ。」

曲線的な中年女性が部屋に飛び込んできた。ヘルマスターは鋭い眉を上げげた。「ようこそ、スカイ夫人。正式に紹介されたことはなかったと思います。私はヘルマスター——」

「私はミズ・スカイよ!」スカイさんはヘルマスターの机に向かって歩いていった。彼女はパッド入りの肩と黒いスカートのフォーマルなレディーススーツを着ており、髪はショートのプラチナブロンドのパーマにスタイリングされていた。彼女

は息を切らした。「ふん… 親御さん用の駐車スペースがないなんて信じられないわ。ワイナリーからずっと歩いて来なきゃならなかったのよ。あら、ベッキー、ダーリン、あなた…それはかなり大胆な帽子の選択ね。メゾン・ミシェル？」

ベッキーの唯一の答えは柔らかい泣き言のような音だけで、それから彼女はうっかりチョークを黒板に強く擦りつけてしまった。

ヘルマスターは首を振った。「いいえ、奥様。それはベッキーの地位を示す馬鹿の帽子です。具体的には、彼女の職業訓練におけるひどい成績のためです。それを着るのは好きじゃないでしょう、ベッキー？」

ベッキーは席で身をよじったが、文章の作業を中断する危険は冒さなかった。「いいえ、先生。でも着ます。なぜなら私は愚かな金髪女で、えっと、賢く学ぶ必要があるからです！」

「迅速に学べ！」彼は手を伸ばしてベッキーの裸の脚に二回の鋭い平手打ちをそれぞれ加えた。「ご覧の通り、ベッキーは勉強に集中するために厳しい懲戒を切実に必要としています。彼女は辞書も切実に必要としているのではないかと懸念しています。」

スカイさんはヘルマスターの顔に指を振った。「おい！ 私の娘の資産に手を出すな。私は彼女を強くて自立したフェミニストに育てているんだ。」

ヘルマスターの表情は変わらなかった。「あなたは彼女を不遜なバカに育てている。それに、言うまでもなく一流の厄介者だ。しかしすべてが失われたわけではない。家庭での定期的な懲戒によって、彼女の態度は改善できると思う。」

「懲戒… あなたの言うことは…」スカイさんの目は突然、壁のスパンキング器具のラックに留まった。「何？ この学校ではスパンキングするの？ 中世とかの後に禁止されたと思ってたわ。」

ヘルマスターは長く重いため息をついた。「どうやらあなたは懲戒マニュアルをあまり注意深く読んでいないようだ、スカイさん。ご覧の通り、ここはヘルハイだ。そしてここでは非常に伝統的で、ある人は古風と言うかもしれないが、徹底的に科学的な形態の懲戒を実践している。それは生意気な少女たちの態度を変えるのに非常に効果的であることが証明されている… どんな年齢の者でも！」彼は最後の言葉を強調しながら発し、注意深くスカイさんを頭から足まで見渡した。

スカイさんの口は開いたままだった。「でも、ここはエリートで上品な学校のはずだと思ってたわ。BBCのアクセントとか何もかも。アメリカでは、下層階級の田舎者のような親だけがまだ子供をスパンキングするのよ。お菓子でベッキーをやる気にさせようとしたことはある？ それで大抵うまくいくのよ。」

ベッキーは首を振った。「違う、ママ！ 私の… もっと悪くしないで！」

それからベッキーはヘルマスターが自分をにらんでいるのに気づき、黒板の方を向いた。「… えっと！ 私はとても愚かな金髪女です！」

ヘルマスターは唇をまくり上げた。「お菓子はベッキーに宿題をやる気にさせていない。彼女は多くの授業で落第している。」

スカイさんは舌打ちのような音を立てた。「ふん！ あなたの科学的メソッドとか、何とか言うやつはこれっぽっちも効果がないじゃないか。」

「我々のメソッドは、学生たちが努力するように動機付けるのに明らかに効果的です。ベッキーは我々が丁寧に『問題学生』と呼ぶものの例です。しかし反対の証拠にもかかわらず、我々はあなたの娘が完全に絶望的なケースだとは信じていません。彼女は家庭で適切な強化を受ける必要があると信じているだけです。残念ながら、ベッキーの指導カウンセラーはあなたに多数のメールを送り、何度も電話を試みましたが、あなたの秘書によって録音電話に転送され、受信トレイは満杯でした。」

「仕事中に電話してきたのはあなたたちなの？ よくも！ 会社の人たちに、私が家庭で会社の価値観に十分なコミットメントを示していないと思われるじゃないの！」

「あなたのキャリアを追求する野心は非常に立派だと思います。しかし、あなたの娘を成功に備えさせたいなら、家庭でベッキーに対する我々の推奨する完全な懲戒プログラムを実施することを強くお勧めします。」

「つまり、私の愛しいベッキーをスパンキングしろって言うの？ よくもそんな提案を！ 反フェミニストよ！」

「それどころか… 懲戒の問題に関しては、我々は原則的な平等主義者です。実演してみましょうか？ 教えてください、あなたは取引をすることに抵抗がありますか、スカイさん？」

スカイさんは嘲った。「ばかばかしい！ 私は夫の急成長中のシリコンバレーのウェブアプリバイブコーディングソリュー

ションで人事部として働いてガラスの天井を突き破っているのよ！ 取引について少しは分かってるつもりよ。」

「素晴らしい。では私のメソッドの有効性をテストすることを提案します。そしてそれが効果的であると証明されれば、あなた自身がそれを受け入れ、私が満足するように実施するのです。」

スカイさんは鼻を高く突き上げた。「ふん。効果的？ それは私が判断するわ。もしそんな野蛮で非暴力的でない子育てテクニックが実際に効果的だと、私が納得できるように証明できたら、あなたの言う通りだって認めてやるわ。くそっ、私自身がベッキーのケツを叩き始めるかもしれないわね。取引成立よ。」

ベッキーは警戒してきゃあと鳴いた。「やめて、ママ！ 絶対に取引なんてしないで！」

スカイさんは人差し指を立てた。「静かにして、お利口さん、ママは仕事中よ。私の許可なしにあなたの大切で完璧な小さなお尻に何も起こらないから。」

ヘルマスターの唇はゆっくりと開き、鈍い灰色の歯のすべてを露わにした。「彼女の言う通りだ、ベッキー。さあ、立ちなさい、お嬢さん。私の机の前に来なさい。もう一度ちょっとした実演が必要だ。適切な姿勢を取りなさい。」

ベッキーは悲しそうに見えたが、努力して顔を整え、机から飛び降りた。「ううう、またかよ！ えっと… はい、先生！ はい、はい、はい、先生！」

スカイさんは瞬きし、それから口を開けた。「な、なに？」

ヘルマスターは黙って彼女を見守った。緊張しながら、ベッキーは机の周りをずりずりと移動し、滑らかな天板に手を置き、お尻を突き出した。従順さにもかかわらず、彼女の苦悩は依然としてひどく明らかだった。

ヘルマスターがベッキーの目をまっすぐに見ると、彼は嘲笑した。「姿勢はよくできた。褒美として、後で冷たいクリームをあげてもいいだろう… その特権を無駄にしないという前提で。さて、ベッキー、学校の嘘に対する罰則は分かっているな？」

ベッキーは緊張し、懲戒マニュアルの該当箇所を思い出そうと奮闘した。「えっと… 嘘は禁じられているのは知ってます、先生。罰則の正確な詳細を忘れてしまいました。」

「では思い出させてやろう。嘘は定規での六回の打撃で罰せられる。幸運なことに、君は嘘をつかなかった——忘れたことを認めた。そのことで誇りに思う。しかし、君は学校のルールを忘れた。その罰則は分かっているか？」

ベッキーの臀部が引き締まった。「… 定規で六回でしたっけ？」

「違う、ベッキー。定規で四回だ。それを今から受ける。さらに、君は私の二番目の質問に間違った答えをした。それは嘘を構成し、さらに定規で六回を稼いだ。」

そう言って彼は立ち上がり、机を回ってベッキーの隣に立った。それから彼は彼女のスカートを留めていた洗濯ばさみを外した。「これをどけよう。君を傷つけたくはない… 無意味に。」

それから彼はスカートの裾を持ち上げ、きちんとウエストバンドに押し込んだ。最後に、彼は彼女のパンティーをしっかりと太ももまで引き下ろし、形の良い後ろ姿を露わにした。それは依然として明るいバラ色だった。

興味をそそられて、スカイさんは机の反対側に歩み寄った。「え？ ベッキーが私に頼んだ時にはそんなに丁寧に話したことないわ——」

それから、スカイさんは怒った「ママ・ベア」の顔を装った。「つまり—— 何をしてるの？ 言ったでしょ、私の承認なしにベッキーのお尻に指一本触れさせないって。あなたはスパンキングの効果を証明すると言ったわ。査読済みの研究とか何かを持ってるんだと思ってた。」

その間、ベッキーは机に頭を低く垂れ、その声は懇願していた。「お願いしますお願いします先生それは間違いでした嘘をつくつもりじゃなかったんです！ 私はただ… 私は愚かで忘れっぽい金髪女なんです！ お願いです、どうか私の可哀想な尻を助けてください！ お願いします！ ああ、やめて、やめて！ ああ、やめてえ！」

「ダメだ」とヘルマスターは淡々と言った。「もちろん、スカイさん、私は適切な体罰の実演をして、その効果を証明しなければなりません。あなたの条件に従い、私は彼女の尻に指一本触れません。しかし、この定規を彼女の尻に何度か当てるつもりです。そして、私の条件に従い、あなたは私にそれをさせます。」

彼はベッキーの方を向いた。「ベッキー、慈悲を乞うのに適切な姿勢はテーブルに身をかがめることではないことを知っ

ているな？ 望むなら慈悲を乞う適切な姿勢を取ってもいいぞ！」

ベッキーはテーブルから倒れ落ち、ひざまずき、泣きじゃくった。「お願いします！ お願いします！ いい子になります！ 頭の空っぽな骨抜きのバカにならないようにもっと努力します！ 本当に！」

それから彼女はヘルマスターの足首を掴み、彼のブーツに唇を押し付けた。彼女の母親は呆然と沈黙して見守った。

ヘルマスターは鼻歌を歌った。まるで美しい音楽の音に魅了されたかのように。「よかろう、ベッキー。嘘をついたことに対する追加の六回は免除してやろう。さあ、学校の罰則コードを忘れたことに対する最初の四回の打撃のために姿勢を戻しなさい。」

ベッキーは感謝して彼のブーツにキスをした。「ああ、ありがとうございます、優しい先生！」

ベッキーが立ち上がると、スカートがウエストバンドから外れ、彼女に短い慎みの瞬間を与えた。少し顔を赤らめて、彼女は優雅にスカートを持ち上げ、机で姿勢を戻し、スカートをしっかりと上まで押し込んで邪魔にならないようにし、明確な標的を提示した。スカイさんはその光景に顔を赤らめた。「まあ、あなたはとても強引ね。権威的で… 家父長的！ これは進歩的な教育プログラムのはずじゃなかったの？」

ヘルマスターは定規をベッキーの後ろにそっと当てた。「ご覧の通り、我々は大きな進歩を遂げています。さあ、ベッキー、いくぞ！」

彼は定規を上げ、それをベッキーの臀部の上部に力強く打ちつけた。

ベッキーは叫び、それから乾いた単調な声で、まるで自動操縦のように答えた。「うわああ！ … 一回、先生、ありがとうございます、先生！」

二発目は最初のすぐ上、彼女の尻の頂点に決まった。ベッキーは悲鳴をあげた。「ひぃっ！ 二回、先生、ありがとうございます、先生！」

三発目は彼女の太ももに垂れ下がる彼女の頬を捉えた。

ベッキーは背中を反らし、むせた。「うわ！ ああ、神様！ 三回、先生、ありがとうございます、先生！ 痛い！」

四発目、最後の一撃は上からまっすぐに降りてきて、残酷な「側面攻撃」の打撃で彼女の頬の端をはじいた。ベッキーは息を吸い込み、最後のカウントを吐き出した。「四回… 先生… ありがとうございます… 先生！」

ヘルマスターはベッキーに話しかけたが、目は母親に固定したままだった。「よくやった、ベッキー。その罰を適切に処理した褒美として、三十秒の揉む時間を与える。」

彼は机の上に砂時計を置いた。「砂がなくなる前に姿勢に戻れ。」

ベッキーはすぐに机から飛び降り、自分の尻を掴み、その場で踊りながら叫んだ。彼女は自分の胸が動きごとに上下に揺れることに気づいていなかった。彼女の馬鹿の帽子は今や頭から落ちそうだった。

彼女に踊らせておいて、ヘルマスターは席に戻り、目は砂時計から離さなかった。

スカイさんはどもった。「こんなの見たことないわ。ベッキーは指の棘を抜くとか、髪を洗うだけで癇癪を起こしていたのに。彼女は痛みに耐えられない大切な小さな赤ちゃんなのよ。ここで何が起こってるの、悪ふざけ？ 私、ドッキリされてるの？」

まだ時計を見つめながら、ヘルマスターは指を机に叩きつけた。「いいえ、親愛なる女性よ。あなたが見ているのは一週間分の適切な懲戒の成果です。」

「チーン！」と砂時計が鳴った。

ベッキーの目が見開かれ、彼女は驚くべき速さで机に手のひらを叩きつけ、従順に適切な姿勢を取った。しかしベッキーが時計の音を聞くと、彼女は震えた。

今や被害者と向き合って、ヘルマスターは冷たい目で睨んだ。「ベッキー、時間がなくなる前に姿勢に戻れと言っただろう？」

ベッキーは泣き言を言った。「はい、先生… 努力しました！ 従おうと努力しました、でも——」

「そして不服従の罰則は分かっているな？」

ベッキーは顔をしかめ、涙が頬を伝った。「またスパンキングです、先生！ お願いです、お願い、お願い、私を憐れんでください！」

「そのスパンキングは今のところ保留にしよう。まず、我々は私のメソッドの効果を証明しなければならない。だから、ベッ

キー、嘘の罰則が分かった今、いくつか質問をする。そしてもし真実を答えなければ、私には分かる。分かったな？」

ベッキーの臀部は高く掲げられたまま震えた。「はい、先生！」

「よし。最初の質問だ：本当に宿題をやりたいのか？」

「いいえ、先生！ 宿題をするのは大嫌いです！ でもやります！ 全部やります、だからスパンキングしないでください！」

スカイさんは息を呑んだ。「でも… 彼女は決して宿題をやらないのよ！」

ヘルマスターは立ち上がり、ベッキーの遥か上にそびえ立った。「二つ目の質問だ、ベッキー。その馬鹿の帽子以外何も着ずにもう一週間過ごしたいか？」

「いいえ、先生！ それ以外なら何でも、先生！ あなたの言うことは何でもします！」

バシッ！

電光石火の動きで、ヘルマスターは両方の骨ばった手を回してベッキーの上向きの臀部を叩き、彼女を粗く長い指の間に抱えた。「では、その代わりに、もう一度しっかりとしたスパンキングをしてやろうか？」

ベッキーは身をすくめ、それから目を見開いた。「痛い！えっと… あ、あの、そ、それって、一週間の強制裸体の代わりに、た、たった一回のスパンキングってことですか、先生？」

「違う、ただのスパンキングじゃない。しっかりとしたスパンキングだ。」

机の後ろの戸棚の引き出しを開けて、ヘルマスターは革のタウズを取り出し、少女の鼻の前に掲げ、両手の間でパチンと鳴らした。

ベッキーはタウズを見て顔を青ざめた。「そ、それ、ど、どっちもひどいです、先生！ お願いです、先生、選ばせないでください！ も、もし、も、もうすぐ受けるスパンキングだけで済ませてくれるなら、約束します、いい子になります！」

ゆっくりと、ヘルマスターは机を回ってベッキーの裸の後ろ姿の横に立った。

スカイさんはほとんど気を失いそうになった。「私のベッキーが？ いい子になるって約束？ 彼女はいつも良い子ぶるのは超ダサいって言ってたのに！」

パシッ！

ベッキーはタウズが彼女の上げられた擦り傷だらけのケツに衝撃を与えるのを感じて息を呑んだ。

ヘルマスターは慎重に狙いを定めて腕を高く上げた。「選択肢は二つだけだ。裸で過ごすか、これを続けるかだ！」

再び、彼はタウズを彼女の臀部に叩きつけた。

ベッキーはつま先立ちになり、かかとで跳ねた。「痛い！ 痛い痛い！ わかった、わかった、わかった！ 強制裸体を選びます！ ストラップだけはやめて！ 私の尻はとても敏感なんです！ この虐待には耐えられません！」

ヘルマスターは驚いているスカイさんを手で示した。「お分かりですか？ 適切な罰の適用を通じて、ベッキーは自分が望まないことをするよう説得されました。したがって、あなたは体罰が動機付けの道具として効果的であることに同意しなければなりません。」

スカイさんは咳払いをした。「ええと… それはね！ それはただ、ベッキーが叩くと脅せばやりたくないことをやるって証明しただけよ。あなたはスパンキングが効果的な方法だと私が納得できるように証明すると言ったわ。私はまだ納得してないわ。本当の証拠を見せてよ。もっと説得力を持って。」

彼女は優雅に手首を振り、パーマのかかった爪を調べた。「つまり、もしあなたにそれをする力があると思うならね。」

ヘルマスターは grin した。「もちろん！」

それから、彼は驚いた女性の手首を掴み、机の上に座り、彼女を自分の膝の上に引き寄せた。

スカイさんは悲鳴をあげ、拳を男性の背中に叩きつけた。「何？ 放せ、このならず者！」

しかしヘルマスターは年上の女性を簡単に押さえつけ、彼女の抗議を無視した。「簡単な手でのスパンキングから始めて、段階を踏んでいく。ベッキー、君の一週間の裸生活は三十秒後に始まる。始まる時には準備ができているほうがいいぞ。」

ベッキーはきゃあと鳴き、それから服を脱ぎ始めた。「はい、先生！」

まるで彼女は電話ボックスなしでクラーク・ケントがスーパーマンに変身する最高の演技をしているかのようだった。すぐ

に、ベッキーは馬鹿の帽子以外何も身につけず、両手を頭の後ろで組んで立っていた。

ヘルマスターはその光景に満足してうなずき、それからベッキーの母親に注意を戻した。「さて、どこまでいったかな？ ああ、そうだ、まだ正式に紹介されていなかった。私はヘルマスター——」

スカイさんは跳ねて後ろ足で立ち上がり、足を床に擦り付けてハイヒールの片方を外した。「放せ、このクソ野郎！」

答えとして、ヘルマスターは重い手を女性の臀部に強く振り下ろした。「それで二度目の私の邪魔だ。あなたは自分を紹介していない。どうか、あなたの名前を教えてください、奥様。」

スカイさんは叫んだ。「ああ！ くそったれ！ これは暴行だ！ 告訴してやる！」

ベッキーは首を振り、目を飛び出させた。「やめて、ママ！ 言い争うともっとひどくなるよ！」

ヘルマスターは顎を撫でながら、スカイさんの子供を産むための腰が彼の膝の上でひねり、もがくのを見守った。「そうだ。そしてこの調子ではあまり進展しないだろう。ベッキー、お願いだから、机の引き出しから母さんのためのパドルを取ってきてくれ。それから、窓のそばに行って、みんなに見えるように立っていなさい。両手は頭の後ろに、お嬢さん。」

「はい、先生！ すぐに、先生！」

ベッキーはパドルをヘルマスターに手渡し、それから裸の尻をまっすぐ窓に向かって歩いていった。「ごめんね、ママ。あなたは自分で何とかして。」

パドルを見て、スカイさんの目は見開かれた。「よくも！ 私はとても重要な力のある女性よ！」

ヘルマスターはパドルを強く振り下ろし、スカイさんの尻の割れ目の中心に平たく当てた。「もう違う。ここヘルハイでは、誰もが相応に扱われる。そしてあなた、スカイさんは、娘を正しく教えられなかった生意気な女だ。しかし我々はこの方法がどれほど効果的かを教えてやる。パドルを壊してでもな。」

バシッ！

そう言って、ヘルマスターは別の雷鳴のような一撃を加え、続いて七発を素早く続けた。

その後、彼は再びペースを上げた。そして打撃が彼女のケツに厚く、速く、そして激しく降り注ぎ始めると、スカイさんは悲鳴をあげた。

その間、ベッキーは教室の窓を通りかかった学生たちのグループにすぐに見つけられた。ベッキーはクラスメートがスマホを取り出すのを見て首を振ったが、もう遅かった。

すでにヘルハイで一番人気の女子の一人だったベッキーは、前回の強制裸体期間の後、キャンパス中で有名になっていた。彼女は窓の後ろからスマホの振動音を聞くことができ、さらに多くの学生が開けた中庭に集まり始めていた。

ベッキーの顔は真っ赤になったが、彼女は鼻（そして胸）をガラスにぴったりと押し付けた。

「ベッキー、望むなら群衆に手を振って投げキスしてもいいぞ」とヘルマスターが言った。

ベッキーの肩は緊張した。ゆっくりと彼女はパレードフロートの手振りをするために手を上げ、集まる群衆に投げキスをした。

その頃、スカイさんはようやく息を整えることができた。「うわ！ 痛い、痛い痛い！ やめて！ 私… あなたの上司に会わせろ！ 訴えてやる！ キャンセルしてやる！ うああ！ 痛い！」

ヘルマスターは笑ったが、パドリングを一時も止めなかった。「金髪の頭を使いなさい、親愛なる人。私はヘルハイのヘルマスターだ。私には上司はいない。その言葉から、私がこのパドルを使うのをやめてほしいと解釈していいのか？」

「うわあ！ そうよ、もちろん。やめて、やめて、やめてえ！」

「止めるためには、まず丁寧に止めてほしいと頼まなければならない。」

少しペースを落として、ヘルマスターは三回のしっかりとした打撃を、長く細い腕のすべてを使って加えた。

バシッ！ バシッ！ バシッ！

スカイさんの成熟した臀部は左右に身をよじり、フォーマルなスカートに対してぴんと張りつめた。「うわあ！ ああ、くそ！ 痛い！」

彼はパドルをしっかりと握りながら、女性の臀部の下部に猛烈な一撃を狙い、二つのパンケーキのように平らにした。「丁寧に頼んでいるのが聞こえない。」

「ああっ！ わかった、わかった！ ごめんなさい！ もう止めて！」

「ダメだ。『お願いします』を忘れた。ベッキー、そっちで隠れてないほうがいいぞ。」

ベッキーは硬直し、後悔しながら肩越しに振り返った。「いいえ、先生… みんな何でも見えるって言ってます。」

スカイさんは吠えた。彼女の声は偶然にも旧式のカリフォルニア・バレーの少女訛りに戻っていた。「痛い！ あんたは私に何を望んでるの？ 謝ったって言ったでしょ！ ごめん、ごめん、ごめん！ 止めてください！ お願い！ 砂糖を乗せてお願い！」

「私の立場に対する正しい呼称は『ヘルマスター』か、さもなくば『先生』だ。」

パドルが自分の後ろに平らに押し付けられているのを感じて、スカイさんは激しくうなずいた。「はい！ はい、先生！」

「素晴らしい。さて、正式に紹介されていなかったと思う。あなたの名前を伺ってもいいですか、奥様？」

「え？ 私はスカイさんよ！」

ヘルマスターはパドルで素早い一発を加えた。「それがあなたの洗礼名ですか？」

「ひぃっ！ え、え？ 私はクリスチャンじゃないわ！」

「そのことに関しては天の力に感謝しよう。別の方法を試してみよう。出生証明書に書かれている名前は何ですか？」

「カレン！ 私はカレン・スカイよ！」

「カレン？ あなたの年齢の女性にとって統計的にありそうで、しかも喜ばしくも適切な名前ですね。さて、カレンさん、このスパンキングを止めてほしいですか？」

「はい！ お願い、はい！」

面白そうな表情で、「ほら、そんなに難しくなかったでしょう？ 丁寧に止めてほしいと頼みました。そして校則に従い、止めましょう。ただし、あなたが納得したという前提で？ ベッキーに関して、学校の懲戒プログラムに従うことに同意しますか？」

「はい！ ただ止めて！ あなたの言う通りにします、先生！」

「もう私を先生と呼ぶのか？ 進歩だ。」

「そうよ、そうよ！ 教訓を学んだわ、くそったれ！」

ヘルマスターはパドルを脇に置き、手を伸ばして机の後ろの引き出しを開けた。「さて、カレン、校則に従い、私はパドルであなたをスパンキングするのを止めなければならない。しかし、あなたが教訓を学んだことを確実にするために、校則——念のため言っておくと、あなたは今それに従うことに同意した——は私に邪魔になるものを取り除くことを許可している。」

そう言って、彼は彼女のスカートをまくり上げ、黒いパンティーを露わにした。そこには「女性は魚が自転車を必要とするように男性を必要とする」というキャプションと、それに伴う漫画のイラストが描かれていた。その無地の色と有望でないスローガンにもかかわらず、彼女の年齢のプロフェッショナルな女性にしては驚くほど生意気な下着だった。

ウエストバンドを掴んで、ヘルマスターはそれを軽く上に引っ張り、驚いた女性に優しいウェジーを与えた。彼はそれをしっかりと持ち、その光景を味わった。「よく考えなさい。これを下ろすべきか、カレン？」

スカイさんは歯を食いしばった。「何？ もちろん下ろすべきよ！」

しかし彼女が自分の言い間違いを聞くと、彼女は唇をすぼめた。「えっと—— つまり—— まず私の同意を得る必要があるわ！」

ヘルマスターは首を振った。「間違いだ。どうやらあなたは飲み込みがかなり遅いようだ。しかし、あなたがどうやって昇進したかは誰もが知っているだろう。ところで、ロンドンでアメリカの同盟国を追いかける地元の娘たちについて何て言っていたか知ってるか？」

スカイさんは首を左右にひねり、自分の下着に何が起こっているのかを覗き見ようとした。「え？ 私が知るわけないでしょ？」

「この古い話を聞いたことがないのか？ なかなか面白いんだが。もし娘がちょっとした淫乱だったら、『彼女はアメリカのパンティーを履いている』と言ったものだ。」

「… 何？ なぜ？」

「一人のヤンキーで、すぐにオフになる！」そう言って、彼は彼女のパンティーを一気に、きれいな動作で膝の下まで引き下ろした。

スカイさんの臀部は成熟していて形が良かったが、いくつかのセルライトが目立った。「おい！ 私にこんなことできないわ！ 私は誇り高きフェミニストのガールボスよ！」

ヘルマスターは露出した各尻の頬に手のひらをしっかりと叩きつけた。「そしてあなたは一週間座れない誇り高きフェミニストのガールボスになろうとしているところだ！ さて、校則は私が再びパドルを使うことを禁じている。しかし、最も幸運なことに…」彼はタウズを手に取り、彼女の頭の前にぶら下げた。「… 私はまだこれを持っている。これはパドルより軽いが、より鋭い痛みを生み出せると思う。ベッキーはその効果について痛い証言を提供できるだろう。」

「その変なものは何だ？」

「高校以来、すべての就職面接で使ってきた言葉だろうな。このタイプのストラップには多くの名前がある。一般にタウズと呼ばれているが、我々は愛情を込めて『くすぐり棒』と呼んでいる。」

「え？ 次はくすぐるつもり？ お願い、それはやめて！ 私の肌はとても敏感でくすぐったいのよ！」

ヘルマスターは邪悪に grin した。「後でな。しかし今は…」

パシッ！

スカイさんがタウズが自分の尻を引き裂くのを感じると、彼女はすぐに十代の時にハリケーン・シーズンの真っ只中にサーフィンを試した時のフラッシュバックを思い出した。「うわあああああああああああああ！」

スカイさんは礼儀の一片も忘れ、ひねり、跳ね、蹴り始め、両手で自分の臀部を遮った。「やめて！ もうやめて！ もうやめて、先生！ 大人しくします！」

目を回して、ヘルマスターはすぐに女性の暴れる手を空いた手で腰のあたりに押さえつけ、タウズを高く掲げた。「校則は罰のスパンキングは六回のブロックで行われることを主張しているようだ…」

パシッ！

スカイさんの声が嗄れた。「ひぃっ！ なんてこったあ！」

「もちろん、望むなら慈悲の嘆願を挟んでも構わない。ベッキーがどうやってやったか覚えているか？」

ビシッ！ 三度目の打撃が決まるまでに、スカイさんの臀部に二本の怒った赤い線状跡が浮き上がり、三本目がすぐに加わった。

スカイさんはシューッと息を吐いた。「痛い！ ああ、くそ！ お願い、止めて！ 止めて、先生！ あなたの言うことは何でもします！ 私は… あなたのチンポをしゃぶってあげる！ あなたの顔に座る！ バニーガールのコスプレをする！ お願いします！」

舌打ちをして、ヘルマスターはタウズを脇に置き、彼女の尻の子犬の脂肪をつまんで鋭くひねった。「違う、カレン、慈悲を乞うのはひざまずく時だ。だからもし乞いたいなら、降りなさい。娘がどうやったか覚えているか見てみなさい。」

スカイさんは彼の膝の上から倒れ落ち、床に転がりながらぷっくりした尻を揉んだ。彼女が立ち上がると、窓から自分を見ている学生たちの群衆に気づき、ヘルマスターの足首

にしがみついた。「お願いです、先生！ もう終わりにしてください！ 子供たちが見ています！ もしこれがワールド・ワイド・ウェブに出回ったら…」

彼女は祈るように手を合わせ、マスカラが顔を伝った。「…私のLinkedInグループの笑い者になります！」

「知ったことではない。そしてあなたは私に少しも興味深いものを提供していない、リトル・ミズ・アート・オブ・ザ・ディール。先ほど、あなたはいくつか興味深い提案をしたと思う。特定の衣装を着るとか。何だったかな？ ああ、そうだ、バニーガールのコスプレ！ 取引をしようじゃないか。あなたはこの面白い衣装に着替え、一週間それを着る。さらに、ベッキーに家庭で私の懲戒テクニックを実施する——それは私が確認に行く——その見返りとして… 私はもうタウズであなたをスパンキングしない。同意するか？」

スカイさんは彼の股間を見つめ、葛藤しているように見えた。「えっと… 私の他の提案はどうなるの？」

「正直なところ、スカイさん、あなたには恥というものがないのか？ 私は仕事中だ。あなたの降伏の細かい詳細は別の機会に交渉しよう。ベッキーの進捗を確認するためにあなたの家を訪ねる時にな。」

この時点で、スカイさんはヘルマスターの膝に頬を預け、彼のズボンの脚に唇を軽く擦り付けていた。しかしヘルマスターの厳しい口調の何かが、かつて誇り高く強力なフェミニストのガールボスを放心状態から覚醒させた。ついに、スカイさんは口をとがらせた。「はい、先生。あなたの勝ちです。納得しました。スパンキングは人類が考案した中で最も効果的な動機付けの懲戒形態です！ ただ、お願いです、もう

私をスパンキングしないでください、パパ… いや、ヘルマスター先生、お願いします！」

「よかろう。もしタウズであと六回が欲しくなければ、すぐにその馬鹿げたスーツを脱ぎなさい。劇場科にあなたが着るべきヴィンテージのプレイボーイ・バニーコスチュームがあるはずだ。収納クローゼットを確認しなさい。あそこだ、ベッキーのすぐ後ろだ。」

スカイさんが立ち上がり始めると、ヘルマスターは彼女の頭蓋骨の後ろを優しく抱え、彼女の頭を下に導いた。「ダメダメダメ！ あなたはバニーのはずだ、覚えているか？ 今は四つん這いのままでいて、ぴょんぴょん跳ねるんだ！」

数回の遊び心のある軽打で、彼は女性を収納クローゼットに向かって突いた。驚きの小さなきゃあという声とともに、スカイさんはまさにウサギのように跳ねた。それから、彼女は窓に集まった群衆からの大笑いの声を聞いた。後ろを振り返ると、スカイさんはベッキーがそっと額をガラスに打ち付けているのに気づいた。

スカイさんは何度も泣き言のような声を出したが、従順に残りの道をクローゼットまで這って行き、すぐにバニースーツを見つけた。それは金色のローカットのボディスーツで、網タイツ、ウサギの耳、ふわふわの白い尻尾が付いていた。彼女は誰にも満月を見せずに素早く服を脱ごうとした。スカイさんがフォーマルスーツを脱ぐと、彼女は恐ろしいバニーコスチュームに手を伸ばそうとし、その手は震えていた。

しかし彼女がバニーコスチュームを掴む直前、ヘルマスターはどこからともなく現れ、彼女の手首を掴んだ。「ちょっと

待った！ 最後に重要な話が一つある。服を拾い上げ、きちんと畳んで、私の机の上に置きなさい。」

スカイさんはすぐに仕事着を拾うために身をかがめた。それから彼女は緊張し、肩越しに振り返った。群衆の目はすべて彼女の裸の後ろ姿にしっかりと固定されていた。ヘルマスターはしかめ面をし、スカイさんの太ももに二回の平手打ちを加えた。それは彼女の臀部の斑模様の赤い肉のすぐ下だった。「さあ、やれ。」

スカイさんはきゃあと鳴き、それから机に向かってパワーウォークしたが、服を忘れたことを思い出してすぐに引き返した。

影が彼女の上に迫ると、スカイさんの髪の毛が逆立ち、彼女は振り返ってヘルマスターが自分を見下ろしているのを見た。「適切な行動を示した後でこれらを返してやろう。教えてくれ、スカイさん、あなたの年齢の女性にとって適切な行動とは何だと思う？」

スカイさんは完全に裸の自分の姿を見下ろし、膝が震えているのを見た。「あなたの言う通りです、ヘルマスター先生！」

「素晴らしい答えだ、スカイさん。それはあなたが確かに理性の能力を持っていることを証明している。さて、あなたは私がもうあなたをスパンキングしないと言ったのを覚えているだろう…『くすぐり棒』ではな。しかし、あなたは最初のスパンキングの間に非常に無礼で非協力的だった。だから、あなたにはまだ二回目のスパンキングの借りがある！ 今回は裸でやってもらおう。」

スカイさんはひざまずき、背の高い男の脚にしっかりとしがみついた。「お願いです、先生、もうおっしゃる通りです！ 私の可哀想な尻はもうとても、とても痛いんです！」

ひざまずいて、ヘルマスターはぷっくりした小さな女性を脇の下で抱え上げた。「そしてもっと、もっとひどくなるだろう！」それから彼は彼女を曲げた膝の上に落とし、彼女のケツを窓から完全に見えるように高く掲げ、無力な標的の上に手を高く掲げた。

それから彼は、ベッキーが窓からの見物人の視界を部分的に遮っていることに気づいて一時停止した。「ベッキー、君は邪魔だ。母さんと私に少しスペースをくれ、お嬢さん。」

ベッキーはうなずいたが、指示通り顔を窓に当て、足の指の付け根で前後に揺れた。「はい、先生… えっと、窓からの誰かの視界を遮らないように、ここにちょっと移動してほしいってことですか？」

「もちろん、スカイ嬢。部屋の反対側のタイムアウトに行って立ちなさい。君のママが今は主役だ。しかし指示を無視して減点されたくなければ、その鼻を窓に押し付けておくほうがいい。」

ヘルマスターはベッキーの後ろに素早い平手打ちを決めた。「動け、お嬢さん！」

「ひぃっ！ はい、先生！」ベッキーは肩を緊張させ、それから横にずれた。ベッキーの鼻と胸が長く滑らかな表面に擦れるにつれて、ガラスがきしんだ。外では、男女の学生の大集団が畏敬の念をもってため息をついた。

スカイさんはうめいた。「お、お願い！」

ヘルマスターはベッキーが移動の終わりに達するまで注意深く見守った。それから満足げな嘲笑とともに、彼は手を高く上げ、スカイさんの上向きのケツに強く振り下ろした。

パシッ！

スカイさんは吠えた。「え？ や、やめてえ！ またなの？」

「正解、また私の手だ。通常、懲戒マニュアルは段階的罰の各段階で異なる器具を使うことを推奨している。しかし、これは明らかにあなたがスパンキングされる初めての経験なので、通常なら受けるはずのケインでの罰は免除してやろう。」

スカイさんは新たな苦痛と屈辱で叫んだ。「お願い、私にこんなことしないで！ みんなに私のケツを見せてるのよ！ みんな私を笑ってる！ うわあ！」

「ああ、その泣き言をやめなさい。あなたの年齢の女性にはふさわしくない。」

パシッ！

「あなたのタイプは分かっている。いつも注目の的になりたがる。そして今、なっている！ それに、私は自分の主張を証明しているのだ。」

パシッ！

「このスパンキングを止めるために、私が言うことは何でもするつもりか？」

パシッ！

スカイさんはもがき、それから彼の膝の上に崩れ落ちて泣いた。「うう… 痛い、痛い、痛い！ おお、親愛なる人、はい！ はい、先生！ いい子になります！」

「よし、それなら証明しなさい。立ち上がってあの窓に行きなさい。両手は頭の上、隠すな。」

スカイさんは子猫のように鳴いた。「はい、先生！」彼女は跳ね、スキップし、跳ねながら窓に向かい、群衆に面して立った。群衆が彼女の母性的な乳房を見てため息をつく中、彼女の柔らかな泣き言が聞こえた。

ベッキーに気づいて、ヘルマスターは指で彼女を自分の方に手招きした。「ベッキー、君もこっちに戻ってこい。鼻を壁に押し付けておくんだ。」

ベッキーは鳴きながら戻ってきて彼らに加わった。それから老人は二人の女性を隣同士に立たせ、母親と娘の肩に沿って撫でた。「一緒に過ごす質の高い母娘の時間だ。三十分間、もしどちらかが隠そうとしたら…」

彼は二人の後ろを叩いた。

「我々は窓辺の見物人に二人で一人分の特別サービスを見せよう。ケインでの打撃の後、パドリングだ。」

純粋な恐怖で、ベッキーとスカイさんは両方とも窓の方を向き、周りの見守る目を遮るために目を閉じた。しかし彼らは透明なガラスを通して伝わる群衆のざわめきを無視できなかった。

この時点までに、「地獄のような三者面談」の噂がヘルハイ中に広まっていた。スカイさんは危険を冒してチラッと見てみると、ガラスの反対側で背が高く筋肉質な若い女性がカメ

ラを掲げて彼らを見ているのが見えた。別の眼鏡をかけた女性が日記に猛烈にメモを取り、それからポラロイドカメラでフラッシュ写真を撮った。彼女はつばに「プレスパス」と書かれたカードが入ったフェドラ帽をかぶっていた。

ベッキーは見物人を調べてため息をついた。「おお！ あれはブルキーのケイティよ！ ゲーマーチャンネルでライブ配信してると思うわ。あれはホリー・ザ・ナードよ。彼女は良い成績を取ってるけど、それでも私と同じくらいスパンキングされてるのよ。不思議なものね。」

スカイさんはうめいた。「黙れ、ベッキー！」

二人は三十分間の質の高い母娘の時間を耐え抜いた。それから、後ろで砂時計が鳴る音を聞いた。

ヘルマスターは教科書から顔を上げた。「隅っこの時間はそれで十分だ。おお、カレン、親愛なる人？ 今から行ってバニースーツに着替えなさい。君はベッキー、文章に戻りなさい。今は自分の机で作業しなさい。」

遠くを見るような表情で、スカイさんはクローゼットに向かい、ゆっくりと金色のプレイボーイ・バニーコスチュームを着始めた。

ベッキーは優しく鼻歌を歌いながら、自分の机から石板を取り出し、座って書き始めた。不幸なことに、彼女の鼻歌がヘルマスターの注意を引いた。「考え直した。劇場科の倉庫にもっと面白い衣装があるかもしれない。二人で着替えごっこをしなさい。カレン、ベッキー用の子猫のコスチュームを探してくれ。彼女の世代にはウサギよりネコ科のほうが流行っていると思う。」

スカイさんはまるでトランス状態から目覚めたかのように瞬きし、猫耳の付いたピンクのファジーなコスチュームを取り出した。「これのこと？」

ヘルマスターは微笑み、立ち上がって二人の不運な犠牲者を見渡した。「それだ。おお、心配するな、ベッキー。次の一週間裸でいるという指示に従わなかったことで罰したりはしない。劇場科の責任者として、強制裸体の要件を例外とすることができる… ただし、後ろのフラップを下ろしたままでなければならない。」

ベッキーは猫のコスチュームのドロップシートに気づき、熱心にそれに足を入れた。しかし彼女が後ろに手を回してボタンを留めようとしたまさにその時、ヘルマスターは彼女の後ろに忍び寄り、彼女のケツを叩いた。「ドロップシートは下ろしたままにしておけ、スカイ嬢。本当に、何もかも説明しなければならないのか？」

ふさわしい叫び声をあげて、ベッキーはその場で跳ね、すぐに手を下ろして裸の尻を露わにした。「はい、先生！ いいえ、先生！ えっと… 三袋いっぱい、先生？」

スカイさんはバニーコスチュームのローカットの胸元を直そうとし、自分を調べて恥ずかしそうに頭を垂れた。しかし年齢にもかかわらず、中年女性が新しい衣装を着て振る舞う方法にはまだ愛らしい恥ずかしさの質があった。

ヘルマスターは年上の女性の裸の肩を叩いた。「カレン、親愛なる人、我々の議論を振り返ろう。あなたは今、ベッキーは悪さをしたらスパンキングで罰せられるべきだと同意しているね？」

スカイさんのウサギの耳はうなずくたびに前後に揺れた。「ああ、はい、ヘルマスター先生。あなたの言う通りです！ 私の娘は間違いなくあなたの懲戒方法から恩恵を受けると思います。」

ヘルマスターはスカイさんの腰に手を置き、彼女を引き寄せた。「そして、先の議論で過ちがあったのは誰だ？ あなたか、私か？」

スカイさんは足を引きずった。「私です、ヘルマスター先生。完全に私が間違っていました。私がスパンキングされたのは私のせいであって、あなたのせいではありません。私はいたずらな小さなバニーガールで、スパンキングされるに値します。」

「ああ、その通りだ。しかし、今日あなたに起こったすべてのことについて、他に責任のある者はいるのではないか？ スパンキングされるに値する、もう一人のいたずらな小さな女の子は？」

ベッキー・スカイが突然緊張した様子を見せる一方、カレン・スカイは突然希望に満ちた様子を見せた。

喜びで跳ねながら、スカイさんは娘と背の高い年上の男性の間を視線を往復させた。「今すぐベッキーにスパンキングをすべきだと思いますか？ 何しろ、生徒が先生に罰せられたのなら、母親にもう一度罰せられるのが当然でしょう！」

「確かにそうすべきだ。実際、もしあなたがこの件について分別を持ってこなかったら、我々は先の議論を再検討しなければならないと思うだろう、カレン？」

スカイさんは片手で自分の後ろを覆い、背の高い男性の周りを娘の方へと横に移動した。「えっと… それは必要ありません、先生！ 私は議論するのが本当に嫌いなんです。」

それから、スカイさんはベッキーの手首を掴み、ヘルマスターの仕事机に向かって娘を引きずり始めた。「そう！ ヘルマスターの言う通りよ、ベッキー・スカイ。今すぐこっちに来て、私の膝の上に身をかがめなさい！ 学校で間抜けにならないように教えてやるわ。あなたは悪い、悪い子猫ちゃんだったのよ！」

ベッキーは恐怖で母親を見つめ、ふわふわしたピンクの猫の手で口を覆った。「でも、ママ！ 今まで一度も私を叩いたことないじゃない！」

スカイさんは硬い木製の表面に座り、それから太ももを叩きながら顔をしかめた。「私の間違いだったわ。次からはもう二度とないからね。」

「でも——」

息を切らして、スカイさんは娘をさらに引き寄せた。ベッキーはほとんどつまずき、机に手をついて体を支え、優雅に母親の膝の上に四つん這いになった。スカイさんはベッキーのコスチュームのふわふわしたピンクの尻尾をさっと脇にどけ、彼女のプラチナブロンドの髪をさっと脇にどけ、それから本格的に娘をスパンキングし始めた。「ヘルマスター先生、お勧めの器具はありますか？ ウォームアップとして手から始めようと思ったけど、ベッキーに… つまり、勉強に集中しなかったことの仕返しを確実にしたいのよ。」

「今日はすでに定規とパドルを経験した。しかし木製のヘアブラシが役立つだろう。たぶんあなたのハンドバッグに一つあるのでは。」

スカイさんは瞬きし、手を空中で止めた。「私の何？」

ヘルマスターはしかめ面をした。「あなたの… パース？ それはアメリカ化された用語だと思うが。」

ベッキーは肩越しに振り返った。「何？ それがイギリスでのヘアブラシの呼び方なの？」

スカイさんは開いた手のひらで激しい平手打ちを決めた。「違う、鳥頭、彼らはパースをハンドバッグって呼ぶのよ。イギリスではロビン・フッドみたいなキャラクターだけがパースを持つのよ。さて、私はヘアブラシを…」スカイさんは舌を出しながらハンドバッグを漁ったが、しかめ面をした。「… ホテルのもう一つのパースに置き忘れたわ。」

ベッキーは猫の手袋をはめた手を叩いて喜んだ。「おお！ 私、ヘアブラシ持ってる！ 私のパースに入ってる！ 可愛いピンク色で…」

ベッキーの目が見開かれた。彼女の可愛いピンクのヘアブラシが空中に浮かび、ヘルマスターの差し出した手に着地するのを見たからだ。ベッキーは首を振り、新たな涙が目に浮かんだ。「ちょっと待って！ 何に使うのか知らなかったんだ！ えっと… 私は黙秘権があったはず！ うわ！ 痛い！」

女の子のような笑い声をあげて、スカイさんは手でのスパンキングを再開し、猛烈な速さでベッキーの後ろを叩いた。「心配しないで、ヘルマスター先生。私がベッキーが今年の残りの間ずっと快適に座れないようにしてあげるわ。少なく

とも、学校で態度を改めるまではね。アメリカで言うところの、片方で教訓を学ばなければ、もう片方で学ぶってね！」

ヘルマスターはヘアブラシを開いた手のひらに叩きつけた。「植民地では本当にそう言うのか？」

娘がどもりながら謝罪しようとするのを無視して、スカイさんはヘルマスターからヘアブラシを受け取った。考え込むように鼻歌を歌いながら、バニースーツを着たカレンはヘアブラシを娘の素敵な臀部に当てた。「うーん、そう言えば、それはどちらかというと赤い州のものね。」

老人は笑った。「むしろ、赤い尻の州のものかな？」

絶望に鳴きながら、子猫コスチュームのベッキーは臀筋を引き締めたが、ブラシの優しい一撫でが彼女の緊張した筋肉を弛緩させた。「ママ… お願い… いい子になるから、約束する！」

スカイさんは優しくシッと静かにし、ブラシを娘の臀部に優しく撫で続けた。「よしよし、ベッキー、あなたがいい子になって学校で頑張ることは分かってるわ。でも、もし二度と私をヘルマスターのオフィスに呼び出させたら、スパンキングしなきゃね。」

ベッキーはその慰めのジェスチャーを感じてゴロゴロと鳴き、ゆっくりと尻を持ち上げて心地よいマッサージを受け入れた。「はい、ママ、スパンキングをやめてくれれば、二度としません！ 絶対に、絶対に——」

すぐにスカイさんはヘアブラシを二度連続で叩きつけた。「違う！ 確かにあなたはしないわ。しかしとにかく、私はまたあなたをスパンキングするつもりよ。毎日！ 毎日よ！」

ベッキーは泣き叫んだ。「やめて、ママ！ やめて、やめて、やめて！」

スカイさんは喜びの笑い声をあげながら、どんどん激しく、そして速くスパンキングし始めた。「ああ、そうよ、ベッキー！ そう、そう、そう！ 私は学校でスパンキングされたんだから、あなたは家でスパンキングされるのよ！」

ベッキーは絶望のうめき声をあげ、彼女の声が嗄れ、ゴボゴボと野性的な叫び声に溶けていった。

ヘルマスターはうなずき、ドアに近づいた。「非常に結構、奥様。あなたが私の考え方を理解してくれて嬉しいよ。さて、お嬢さんたち、ごゆっくり。今夜会おう、カレン、親愛なる人。」

ベッキーの泣き声が制御不能な醜い啜り泣きに変わり果てると、スカイさんはパドルの途中で固まった。「えっと、なぜ今夜あなたに会うの？ 別に構わないけど、でも——」

「もちろん、あなたがベッキーの懲戒を適切に行うことを確認するためだ。そしてあなたが懲戒マニュアルを完全に熟知していることを確認するためだ。何しろ、ガチョウの子に良いものは…」彼はオフィスのドアを開け、飢えた虚ろな目で両方の女性を見つめた。「… ガチョウにも良いのだ。」

彼らはヘルマスターの目が自分たちに向けられているのを感じ、ベッキーとカレンは両方とも震えた。彼らは自分の体全体に不気味なほどの冷たさを感じた。ただし、彼らの臀部を除いては。

その特定の瞬間、二人の女性の後ろ姿は恐ろしく熱かった。

[終わり]